
ヘルシング、BASARA。表と闇。そして・・・ワカバリリーダー組。

Natu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘルシング、BASARA。表と闇。そして・・・ワカバリリーダー組。

【Nコード】

N06830

【作者名】

N a t u

【あらすじ】

此处は、201XX年の東京。此处には、
‘夜の世界を束ねる’。
集団が居る。

奥州会とそして鬼兵会と言う吸血鬼集団。

長年・・・ある吸血鬼ハンターのある術にかかり長年の眠りにつかれそして目覚めた

奥州会の筆頭。独眼竜伊達政宗。そして竜の右目と呼ばれる片倉小十郎。

そして、日本吸血鬼界帝王と呼ばれる高杉晋助。
エンペラー

そして、ヘルシングのごみ処理屋として仕えるアーカード。

とその従僕であるセラス。そして沙代子。

んでもって、アーカードに振り回される？ワカバ組。

橘夏美とライカ・ネアン。

表と闇で行き来している者同士が今宵もまたこの東京で一暴れする事となるだろう。

さあ行かん。表と闇の中へ。

必読。（申し訳ありませんが必ずお読み頂く様お願いいたします。）（前書き）

此方は、必読となっております。（オリキャラ推進！！で共通ヒロイン！）

どうぞ最後までお手数ですがお読み頂く様重ねてお願い致します。

必読。(申し訳ありませんが必ずお読み頂く様お願いいたします。)

ヘルシング第二部になります。(オリキャラ推進!!)

と言いましても、またコラボですが、その辺は御了承のほど毎度毎度であります。が御了承のほど宜しくお願い致します。尚、中傷等は一切受け付けません。

因みに、戦国BASARAも表に引っ張ってきましたが・・・・・・

ごめんなさい。高杉さんやジンの兄貴様その他諸共サブで出る予定です。

(高杉さん達も吸血鬼設定です。)

と同時に主に伊達派を出す予定です。因みに吸血鬼設定で・・・・・・ほぼ全作共通ヒロイン達が出てきます。同じヒロイン連中も出ますが・・・・その辺もご了承のほど宜しくお願い致したい次第でございます。

其れでは、時間かけてもゆっくり完結を目指していきたいと思えますのでどうぞ暖かな目で見守って頂ければと思います。

さてと、partyのお時間です。

必読。（申し訳ありませんが必ずお読み頂く様お願いいたします。）（後書き）

必読をご覧いただきありがとうございます。

時間かけてもゆっくりと完結目指して頑張りたいと思いますので暖かな目で

どうぞお読み頂ければと思います。

第1夜。プロローグ。（独眼竜の目覚め。そして・・・。）（前書き）

今章は、主に奥州組を出させて頂く予定です。

おそらく長丁場となる予定です。

ごく稀に吸血シーンがあるかも・・・。

第1夜。プロローグ。（独眼竜の目覚め。そして・・・。）

此処は、奥州会のアジト。

此処に1人の男が居た。竜の右目である片倉小十郎だった。

・・・もう直あの方が長年の眠りから目が覚められる頃だ。

そうになると、恐らく・・・鬼兵会のあいつも動き。

また、あのお方の長年の眠りの原因になったあの女ともあいまみれる事となるう。

そして・・・あいつ等とも。

そつ心の中で呟きながら思わずニヤリと笑って「・・・楽しみで仕方ねエな。」と呟いた。

と同時に奥州会の1人が小十郎の部屋にノックして入り「片倉様アア！……筆頭がお目覚めになりました！……！」

小十郎はその言葉を聞き再度ニヤリと笑い「そうか！お目覚めになられたか！……ついに！」と続け様に

「で？政宗様は？」

部下「御自分のお部屋に。そして片倉様を呼ぶようにと。」

小十郎頷き「ああ。分かった。今行く。お前は下がっていいぞ。ご苦労だったな。」

部下は一礼をしてその場を後にした。

と同時に小十郎は自分の部屋の天井を見て「……忍んでんな」

ドツかのネズミが。」そしてフツと笑い「まア・・良いか。ひとま
ず泳がせてそして政宗様の前に突き出してやるか。」そう言い政宗
の部屋に向かった。

一方、天井裏では小声で「・・やれやれ。『勘が良すぎるよ』。流
石は竜の右目って言われているだけ

でもあるね。」と気配を隠し続けながら少しずつ政宗の部屋に移動
し始めた。

「・・・なあって、基本的に『偵察専門外』の私しやアが偵察行か
なきゃならんのかね。」とも呟いた。

回想。

東京都内にあるワカバとヘルシング合同アジト。

『・・・へ???今何ておっしゃったんで????』

ヘルシングの長であるインテグラが葉巻に火をつけて『・・・奥州会の筆頭である独眼竜伊達政宗が近いうちに目が覚めるらしい。多分動きがあるだろう。其処でだ、お前に偵察に行ってもらいたいんだ。夏美。』

夏美冷や汗をかきながら『・・・あの。基本的に私偵察は専門外ですが???』

インテグラ葉巻を吸いながら『・・・仕方なかるう???アーカード達は気配を感じやすいし。そしてその他の連中は他の仕事任されているし、何せ偵察隊が別件でいないのだ。』

その事を聞いた夏美肩落とし『・・・其れで私と???』

インテグラ頷き『そうだ。』と続け様にニヤリと笑い『この特別任務を引き受けてくれたら何時もの倍給料出すぞ?』

夏美その言葉を聞き背筋伸ばし敬礼し『Yes Sir!!!!!!この橘夏美喜んでやらせて頂きます!』

するとたまたまその場にいたベルナドットがタバコに火を灯しながら心の中で。

夏の嬢ちゃん……。給料あげる言葉に乗せられたな。でも、大丈夫かね????

基本的にライカの嬢ちゃんと一緒に偵察が専門外なものな。

まア……。気ばれや。嬢ちゃん。

と呟いていた。

そしてインテグラは葉巻を吸いながら『・・・良いか。夏美もし、ヤバくなったら任務中でも構わん。すぐに脱出して戻って来い。竜の右目と呼ばれる独眼竜の側近片倉小十郎と言う男は結構、勘、が良いからな。お前と大体同じで・・・』

と其処で回想終了。

夏美はげんなりとして心の中で・・・。

いくら給料倍っていつてもこつもあつさり見られるとはさ・・・。

私じゃアの妙な勘繰りも多少落ちたか???と己をあざ笑った。

と同時に政宗の部屋と思われる部屋の天井裏に行った。

そしてそつと耳を立てる。

すると、政宗と小十郎と思われる男たちの話声が聞こえた。

夏美は聞こえたものを丁寧に記憶していく・・・。

まずは、小十郎が主の帰還を喜ぶ声を聞きそして・・・。

鬼兵会の事。

そして・・・。

グールが出てくる事。

んでもって・・・。広州の事とかが挙げられた。

夏美・・。

ん??待てよ??晋助様の事は知っているのはなんとなく納得できるが・・・。何故、メイラン広州の事も知っている???と内心想った。

と同時に話声が急に止まり。

そして・・・。

ヒュッ!!!!と行き成り音がした。

と同時に天井裏に何か突き刺していた。

夏美焦りながらよく見ると小刀だった。

あぶねエ……。つつか、おっかねエ。

と同時に小十郎が天井裏に声をかけ「……。オイ。其処にいるのはすでに分かっているんだ。何処のネズミかは知らねエが。とっと出てきた方が身のためだぜ？」とニヤリと笑い言った。

夏美心の中でクソッ！なんてこったい！こつも簡単にばれるなんて！！

こりゃアとつと引き上げた方がよさそうだな。と呟きながらも流石は竜の右目と呼ばれただけでもある。とも呟き忍び足でその場を去ろうとした次の瞬間銃声が聞こえそして、夏美は音なくしながら交わして行つた。次の瞬間、ミシミシという音がして裏が抜け落ちてしまった。

夏美慌てながら「……。っ！しまっ！」と言ひそして天井裏の空洞にしがみついた。

夏美はほつとした次の瞬間再び銃声になって堕ちた。

小十郎銃を持ち待機していた女に向かって「御苦労！杏奈！」
あんな

其処には黒長髪の黒のチャイナドレスを来て全身を包んでいた女が居た。

杏奈銃ホルダーにしまい小十郎に一礼をして「いいえ。此れも私の役目ですから。」とほほ笑んだ。

と同時に「さア．．侵入者さんもう逃げられないわ。大人しくその御顔見せなさい。」

すると夏美いててと言いながら体を起こし「．．いやあ。やつぱり‘専門外’を引き受けるべきじゃないね。改めて思い知らされたわ。」と続け様に「．．．しかし、奥州会に銃使いが居る何ざア聞いてねエけどな．．．。もう少し情報誌入れるべきだったよ。」

杏奈その声を聞き驚き「あ、アンタは！！！！炎龍！！！！！」

夏美苦笑いをしタバコに火を灯し「．．．懐かしいねエ」。まだ、その名で呼んでくる奴が居るとは．．私しやアも私しやアで、ある意味有名になったもんだ。」

するとボールからライチュウが出て夏美の肩に上り『・・・夏美様？
感心している場合ではなくとっとと引き上げた方がよさそうなので
は？？』とおずおずと言った。

夏美フツと笑い「・・・そうだな。と、言いたい所だが、どうやら
そう簡単に、帰してもらえなさそうだ。」

其処には夏美に銃を突きつけた杏奈が居た。

と同時に気がつけば奥州会の騒ぎを聞きつけた奥州会の連中に囲ま
れていた。

第1夜。プロローグ。（独眼竜の目覚め。そして・・・。）完。

第1夜。プロローグ。（独眼竜の目覚め。そして・・・。）（後書き）

今章御付き合い下さり有難うございます。

きゅ、吸血シーン入れようと思ったんですが・・・タイミングが（笑；；）

あくまでも予定でしたので・・・御了承を。

其れではグタグタのほぼ毎回の予告編をどうぞ（笑；；；）

アレから小十郎に見つかり尚且つ、夏美の闇の時代を知る女に会った夏美。

と同時に奥州会の連中に囲まれてしまった。

夏美タバコを吸いながら杏奈を見て「・・・久しいじゃねエか。『黒の弾丸』。昔、一度・・・理由不明だが姿を消し、行方不明になったと言われていたが・・・まさかここで再会するとは思ってもみなかったよ。」

杏奈もフツと笑い「えエ。そうね。私も思わなかったわ。まさか侵入者が嘗ての闇の始末屋と呼ばれた炎龍だったとはね。」と続け様に「アンタも行方不明と聞かされたけど・・・。まさか。生きていたなんてね。」

夏美再度フツと笑い「・・・何だ？　くたばってほしかったのか？　」

杏奈クスと笑い「いいえ。寧ろ会いたくて仕方なかったわ。アンタとこうしてまた会ってやりあいたかったの。」

夏美「・・・そうかい。」と続け様に「悪いね。今はもう、炎龍、じゃねエ。昔の名何ざアとうのとうに捨てちまったよ。」

杏奈再度クスと笑い「じゃ・・・今は??」

夏美タバコを口に再度加え直し「・・・今はもう、ワカバリダー兼幹部の1人。ワカバ守護拳火炎風拳雷風拳伝承者！そして・・・ヘルシング日本支部の一員橘夏美！」に戻ったのさ。」と続け様に肩の上に載せているライチュウを見て「因みに・・・こいつはア私の幼いころの相棒であるライチュウさ。」

と序に紹介した。

ライチュウ「・・・ご主人様の肩の上から失礼。私は、ワカバポケ軍団を率いさせていただいていますライチュウと申すものです。以後お見知りおきを。」

杏奈ライチュウを見てクスと笑い「可愛い子ね。黒の弾丸事^{あいつはきまわ}藍時沢杏奈よ？宜しくね。」と続け様に再度夏美を見て「だけど・・・炎龍。例えあんたにどんな事情があろうとも此処で只はいそひそひですか。と納得して帰すわけにもいかないの。」と続け様に「小十郎様。」

小十郎はニヤリと笑い「お前の好きにしろ。宜しいですか？政宗様。」

政宗もニヤリと笑い「All right！好きにしていぜ？」と

続け様に奥州会の連中を見て「良いか？おめえ等！手出しは無用だぜ？？You see？？」

奥州会の連中は一斉に頷きそして杏奈もフツと笑い「ありがたき幸せ。」

夏美タメ息をつき「・・・上からは撤退命令オーダー言われているんだが・・・しょうがねえか。」と続け様に翡翠刀を出し「・・・基本的に『中立派』だし無益な争いはしないたちなんだが・・・。」と続け様に鞘から翡翠刀を抜きとり杏奈を見て「・・・昔とは違うが、力衰えていない」所を見せてやんよ。」

杏奈もクスと笑い銃を構え直し「宜しくね。さア・・・やりましょ？？」

夏美タバコを携帯灰皿にもみ消しライチュウに渡してちよいと下がらせて

構えを取り「・・・ワカバリーダ兼幹部そしてヘルシング日本支部が一員橘夏美！！いざ参る！」そう言い杏奈に向かって攻撃し始めた。

杏奈も狙いを定めて「・・・奥州会黒の弾丸藍時沢杏奈。容赦しないわよ？」

そう言い銃弾を放って行った。

夏美自身は翡翠刀で銃弾を交わし続けていた。

杏奈「第2夜、奥州会の竜の右目に偵察をばれタ夏美。そして尚且つ嘗ての間とやりあった女との再会で再戦？」

「次章もどうぞ宜しくね？」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第2夜、奥州会の竜の右目に偵察をばれタ夏美。そして尚且つ嘗ての闇とやり

今章は、夏美さんがアレから片倉さんにばれて尚且つ、嘗て闇としてやりあつた女との再会と再戦を書かせて頂く予定です。

なお此方もおそらく残酷シーン等がある予定です。御了承を・・・汗。

因みにポケ要素も加えさせていただいております汗。

・・・検索等には書いていないですが・・・。

後、オリキャラがまた増えます。バサラ読んで・・・ある方をモデルに女版を出させて頂く予定です（笑）

しゃべり方も多少似ているかもしれませんが・・・。

面白くしようとした結果こうなりましたすみません（苦笑……）

第2夜、奥州会の竜の右目に偵察をばれタ夏美。そして尚且つ嘗ての闇とやり

アレから小十郎に見つかり尚且つ、夏美の闇の時代を知る女に会った夏美。

と同時に奥州会の連中に囲まれてしまった。

夏美タバコを吸いながら杏奈を見て「・・・久しいじゃねエか。黒の弾丸。昔、一度・・・理由不明だが姿を消し、行方不明になったと言われていたが・・・まさかここで再会するとは思ってもみなかったよ。」

杏奈もフツと笑い「えエ。そうね。私も思わなかったわ。まさか侵入者が嘗ての闇の始末屋と呼ばれた炎龍だったとはね。」と続け様に「アンタも行方不明と聞かされたけど・・・。まさか。生きていたなんてね。」

夏美再度フツと笑い「・・・何だ？　くたばってほしかったのか？　」

杏奈クスと笑い「いいえ。寧ろ会いたくて仕方なかったわ。アンタとこうしてまた会ってやりあいたかったの。」

夏美「・・・そうかい。」と続け様に「悪いね。今はもう、炎龍、じゃねエ。昔の名何ザアとうのとうに捨てちまったよ。」

杏奈再度クスと笑い「じゃ・・・今は？　」

夏美タバコを口に再度加え直し「・・・今はもう、ワカバリダー兼幹部の1人。ワカバ守護拳火炎風拳雷風拳伝承者！そして・・・ヘルシング日本支部の一員橘夏美！」に戻ったのさ。」と続け様に肩の上に載せているライチュウを見て「因みに・・・こいつはア私の幼いころの相棒であるライチュウさ。」

と序に紹介した。

ライチュウ「・・・ご主人様の肩の上から失礼。私は、ワカバポケ軍団を率いさせていただいていますライチュウと申すものです。以後お見知りおきを。」

杏奈ライチュウを見てクスと笑い「可愛い子ね。黒の弾丸事^{あじとぎみ}藍時沢杏奈よ？宜しくね。」と続け様に再度夏美を見て「だけど・・・炎龍例えあんたにどんな事情があろうとも此処で只はいそぐですか。と納得して帰すわけにもいかないの。」と続け様に「小十郎様。」

小十郎はニヤリと笑い「お前の好きにしろ。宜しいですか？政宗様。」

政宗もニヤリと笑い「All right！好きにしていぜ？」と続け様に奥州会の連中を見て「良いか？おめえ等！手出しは無用だぜ？？You see？？」

奥州会の連中は一斉に頷きそして杏奈もフツと笑い「ありがたき幸せ。」

夏美タメ息をつき「・・・上からは撤退命令言われているんだが・・・しょうがねえか。」と続け様に翡翠刀を出し「・・・基本的に、中

立派、だし無益な争いはしないたちなんだが……。」と続け様に鞘から翡翠刀を抜きとり杏奈を見て「…………昔とは違うが、力衰えていない、所を見せてやんよ。」杏奈もクスと笑い銃を構え直し「宜しくね。さア…………やりましょ??」

夏美タバコを携帯灰皿にもみ消しライチュウに渡してちよいと下がらせて

構えを取り「…………ワカバリーダ兼幹部そしてヘルシング日本支部が一員橘夏美！！いざ参る！」そう言い杏奈に向かって攻撃し始めた。

杏奈も狙いを定めて「…………奥州会黒の弾丸藍時沢杏奈。容赦しないわよ？」

そう言い銃弾を放って行った。

夏美自身は翡翠刀で銃弾を交わし続けていた。

夏美はね飛ばし続けて「おオオ！！翡翠流爆風烈風弾！！」技を放つが…………杏奈に軽くかわされて

そして…………パシュ！！と肩を突き抜ける音がした。

ライチュウ慌てて『夏美様ッ！！』

夏美はフツと笑い「大丈夫だ！心配するな！」そう言い左肩の血を止めた。

杏奈クスと笑い「とろくなったわね。平和ボケしすぎたんじゃないの??」

夏美はつと笑い「うるへえ！」

だが・・・其れと同時に。

ドクンッ！！と心音が鳴る。

ライチュウその表情を見てヤバイ！！あのままだと夏美様は！？

杏奈自身が夏美の方に銃弾を放った場所は左。

左には腕の辺りに炎龍の刺青がある。例え、炎龍を止めたとしても刺青は消す方法が今の所見当たらないのである。

ライチュウは急いで夏美の所に行き両頬から電気を出しながら『・夏美様ッ！！此処は、私が時間稼ぎます！その間に左肩の傷の手当て・・・御脱出して下さい！！』

夏美驚きながらも「馬鹿言うな！お前置いていける訳ねえだろうが！！」

ライチュウフツと笑い『・・・あの頃と同じ姿を見るのが私は忍びないので。』夏美様。確かにこの黒い弾丸と先程一騎打ちを申し込まれた。そして・・・御自分自身が言ったことに対して逃げる事もご自分自身がお嫌いなはずのもよくこのライチュウ知っておりますですが・・・あの頃と同じ姿になられてしまうと。『ストップ（ライカ様）がいらっしゃらないとダメでしょう？其れに・・・あの方にはすぐに戻れと』命令もオーダーされているでしょう？？そして・・・あの方も。すぐに戻れる事をご望んでいらっしゃる事でしょう。さあ・・・行つて下さい。夏美様。』

夏美はライチュウが言った事を察知した。

確かに・・・ふいにアレの暴走をするとライチュウとて止められない。

すると天井裏から「私しやア様も、ライちゃんに賛成だよ。夏美の姉さん。」

其処には黒ずくめの忍びの恰好をした女が入って来た。

夏美驚き「!!!!メグナ!?何でお前ッ!?!」

形川メグナ。代々橘家本家に使える忍び。(正確的には夏美直属の忍び)兼ワカバの忍びである。

性格的には・・・武田の忍びである猿飛佐助に似た様な御気楽な?性格だが・・・主人そして・・・主人の大切な者達への護り忠誠はだれにも負けない。

メグナ天井裏からストと下りて「いやはやね・・・姉さんが何時までも戻ってこないから私しやア様心配になって来てみたのよ。ボス達もかなりお待ちかねだしね?そうしたら・・・こんな感じよね。」

そう言いクナイを取り出し「うちの姉さんが試合申し込んだ所申し訳ないけどね……。黒の弾丸の姉さん。此方も此方で蠟色い事情あるんでね。此処は唐突で悪いんだが、選手交代ツつうこって……。宜しく頼むよ。」

と続け様に「今のうちに行きな！！姉さんッ！！此処は私しやア様達が何とかするから！！」

夏美翡翠刀を急いで鞘に収め「……。本当は。最後までと言いたい所だが、やむ終えねエな。」と続け様に懷から煙だまを取り出し「……。すまねえ！！後頼んだッ！無事に帰って来いよ！！相棒達よ！！」
そう言い投げ出し煙をまき散らし夏美は退散した。

だが、杏奈は夏美の姿を探そうとしたと同時に杏奈の足の下に電撃が走り、そして……。序にクナイが連続で投げられた。

杏奈其れを交わしメグナ達を見ていた。

メグナフツと笑いながらクナイを回し「黒の弾丸の姉さん。こっ先は私しやア様達がお相手だよ？」

ライチュウもニヤリと笑い『・・・どうぞ宜しく。』

杏奈はフツと笑い「本当は・・・あの子としかかったんだけどね。まア・・・良いわ。邪魔した分だけ取り返すわ！邪魔した報いはちゃんとね取ってもらわないと？」

メグナクナイを構え直して「・・・そんじょそこいらの忍びさん方と同じと思っちまったら姉さんの負けだよ?? 橘家本家橘夏美直属忍び兼ワカバ忍び形川メグナ！忍び参る!!」

ライチュウニヤリ『・・・ワカバポケ軍団リーダーライチュウ！お相手致す!』

そう言いライチュウが先手にボルデッカーを放ってきた。

杏奈は軽くかわし銃弾を放った。

ライチュウ突っ込みつつもニヤリと笑いかったかしら？

と同時に杏奈は自分の影に着地した。

次の瞬間・・・。

影が少し動き・・・。

其れを察知したのか奥州会の一員が「あ、あぶねエです！！藍時沢様アア！！」

杏奈「え？」

すると「忍法！！影潜りの術！！！！」　　「そつ言い影からメグナが出てきて杏奈に攻撃をした。

すると其れが見事に的中。

杏奈は飛ばされた。と同時にライチュウが目の前に来て『・・・百万ボルトオオオ！』と叫びライチュウ個人的な得意大技の一つ百万ボルトをくらわした。

そして杏奈は其処で気を失った。

メグナは其れを見て「終わったようだね。ライちゃん。」

ライチュウメグナの所に戻りながらも『ハイ。でも・・・死んじやつたかな？』

メグナ笑いながら「大丈夫つしょ？あの姉さん。吸血鬼なんだから。電撃くらいで死なんでしょう？」

ライチュウハアと笑いながら『・・・メグナ様つたら。』と同時に引き上げようとした次の瞬間。

「Wait！mouse！（まちなネズミ！）」と声をかけられる。

ライチュウは苦笑いをして『只のmouseではないですよ？責めて電気ネズミと呼んで下さいよ。』

メグナは心の中で・・・。

其処なんだ！？ライちゃん！と突っ込んでいたとき。

一方、ライチュウは自分が呼んだ声の主の所に眼をやり『・・・何用です？奥州会会長。伊達政宗さん？』

政宗ニヤリと笑い『俺のlittle ladyをたやすく倒せるなんてすげえじゃねえか。次は俺の相手しな？』

と六爪の一つを取り出した。

ライチュウは其れを聞き思わず頭抱えて『・・・あの。御言葉ですが伊達政宗さん。私だと相手ならんですよ？ましては・・・今回はあくまでも御主人を御連れ戻すのが任務ですのでね。』

メグナもライチュウに手を出してライチュウを肩に乗せ『そう言う

事……。だから他の時にしてくれないかね？独眼竜の兄貴さん？」

政宗は高笑いをしてメグナ達を見て「A l l i g h t！俺が止め
として何なんだが・・早く行った方がいいんじゃないか？」と
意味深の発言をした。

メグナ其れを聞いて眉を細め辺りを見渡し、常に政宗の側にいた小
十郎がいない事に気づく。

メグナ内心……。。

まさか！！！！と続け様に「ライちゃん！！ちよいと急ぐよ！！！」

ライチュウも察知したのか「……。分かりました。」

と同時にメグナ政宗を見て「・・・やってくれたね」。私しやア様
達がこの姉さんとやりあっている最中に逃げた夏美の姉さんを右目
の兄貴さんに追わせた。つつ事かい？」

その事を聞いた政宗は再度ニヤリと笑い「That's l i g h

t!
」

其れを聞いたメグナは急いでライチュウを連れ夏美を追った。

クソ！私じゃア様達がいながら！！頼むから無事でいてくれよ！！
夏美の姉さん！

と心の中で呟いていた。

一方、政宗はニヤリと笑い「もう、逃がさねえぜ」？「MY little girl」
」とまた意味深発言をしていた。

第2夜、奥州会の竜の右目に偵察をばれタ夏美。そして尚且つ嘗て
の闇とやりあった女との再会で再戦？完。

第2夜、奥州会の竜の右目に偵察をばれタ夏美。そして尚且つ嘗ての闇とやりま

今章も無事に更新完了致しました。

此方も御付き合い下さり有難うございます。

其れでは、ほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

アレから夏美はひとまず無事に奥州会からヘルシング、ワカバアジトに戻っていてインテグラに報告した後自分の部屋に戻って行った。そして、寝室に入り上着を脱ぎ寝室にある鏡で左肩の銃弾の傷そして其処から少量の血が出て・・・左腕にある炎龍の刺青にかかっていないか確認する。

この刺青に血が垂れ・・・もしくは其処に傷があると夏美は深紅の瞳になり

暴走状態になる事がしばしばあるのだ。

夏美筆筭からガーゼと包帯を取り出し消毒をしガーゼを肩に押し付け其処で

包帯を巻き手当てをしその後寝室にある寝室用ソファーに座りテールブルに置いてあった灰皿を自分の所に引き寄せタバコに火を灯す。

・・・参ったね。左肩を撃たれるとどうもほぼ毎回の様に、あれを思い出してしまう'。

あれとは・・・昔突然にメイランにすぐくひどい捨て方をされた日の事だった。

左肩の傷はその‘過去土産’みたいなものだった。

するとゴトと音がして夏美は気になりタバコを灰皿にもみ消して寝室から出てリビングを確認した。だが・・・誰もそして音もするものもない。

夏美フツと笑い「・・・気のせいだな。」そう言い再び寝室に戻ってソファーを見た次の瞬間驚きを隠せないでいた。

「・・・何でだ？巻いたはずなのに？」と思わず呟いてしまっていた。

するとその声で「よオ。また会ったな？夏美。」と小十郎がソファーに座ってニヤリと笑いながら夏美を見ていた。

小十郎「第3夜。夏美奥州会の偵察後、ヘルシング、ワカバアジトに戻り報告後再び今度は自分の部屋の寝室で竜の右目と再会？」

「次章もよろしくな。」

以上です。此処まで読んでいただきありがとうございました。

第3夜。夏美奥州会の偵察後、ヘルシング、ワカバアジトに戻り報告後再び今度

今章も前章と同様に残酷シーン等ある予定です。

ひよつとしたら??吸血シーンがあるのかもしれませんが。

出来たら入れたい(笑)

第3夜。夏美奥州会の偵察後、ヘルシング、ワカバアジトに戻り報告後再び今度

アレから夏美はひとまず無事に奥州会からヘルシング、ワカバアジトに戻っていてインテグラに報告した後自分の部屋に戻って行った。

そして、寝室に入り上着を脱ぎ寝室にある鏡で左肩の銃弾の傷そして其処から少量の血が出て・・・左腕にある炎龍の刺青にかかっていないか確認する。

この刺青に血が垂れ・・・もしくは其処に傷があると夏美は深紅の瞳になり

暴走状態になる事がしばしばあるのだ。

夏美箆笥からガーゼと包帯を取り出し消毒をしガーゼを肩に押し付け其処で

包帯を巻き手当てをしその後寝室にある寝室用ソファーに座りテールに置いてあった灰皿を自分の所に引き寄せタバコに火を灯す。

・・・参ったね。左肩を撃たれるとどうもほぼ毎回の様に、あれを思い出してしまう'。

あれとは・・・昔突然にメイランにすぐくひどい捨て方をされた日の事だった。

左肩の傷はその、過去土産、みたいなものだった。

するとゴトと音がして夏美は気になりタバコを灰皿にもみ消して寝室から出てリビングを確認した。だが・誰もそして音もするものもない。

夏美フツと笑い「・・気のせいだな。」そう言い再び寝室に戻って、ソファーを見た次の瞬間驚きを隠せないでいた。

「・・何でだ？巻いたはずなのに？」と思わず呟いてしまっていた。

するとその声で「よオ。また会ったな？夏美。」と小十郎がソファーに座ってニヤリと笑いながら夏美を見ていた。

夏美は思わず後ずさりをし急いでギンガを取り出し小十郎に向けて発砲した。

だが、小十郎は其れをいとも軽くかわし夏美に向かって刀を鞘から取り出し振り下ろした。

夏美はギンガで刀を防いだ。

夏美・・。

クソッ！！なんつう馬鹿力だ！其れに鋭い！！！流石は、竜の右目
って呼ばれている事あるね！

其れはそうと・・・メグナ達大丈夫かな？？

小十郎はニヤリと笑い「・・・人の心配するより自分の心配した
らどうだ、？」

夏美はハッと我に戻り気がつけばズバン！と小十郎に斬りつけられ
ていた。

夏美ギンガを落して膝をつけて「・・・しまった。」

左胸を触ると血がぼたぼた垂れていた。

と同時に「夏美の姉さん！『夏美様ッ！』」

メグナ達が入って来た。

と同時に夏美の方を見て「・・・！！！！」と慌てて夏美の所に来た。

「姉さん！！！！姉さん！！！！」

夏美はメグナを見てフツと笑い「・・・メ、メグナ。其れにライチュウも無事だったんだな？」と続け様に「・・・良かった。」そしてメ

グナは「自分が傷ついているのに人様の心配かい！？アタどこまでお人よしなんだよ！！」

夏美は其れを聞いて苦笑い「・・・まア。こりゃア自己自得だからね。」と言いながら血を吐く。

メグナ慌てて「姉さん！！」と慌てて止血札を取り出し止血する。

と同時に夏美はセラスから知らせが入ったのか・・・メグナを見て「・・・メグナ。どうやらうちの管轄内に招かざる客人が入ったようだ・・・すぐにライカの奴に知らせて合流してくれ。」

メグナ心配そうな顔で「・・・でも。姉さん。」

夏美ニヤリと笑い「・・・行きな！主命令だよ。それとも『減給』されたいのかい??」

その事を聞いたメグナは渋々「・・・了解。じゃ、その招かざる御客人をさっさと追っ払って・・・序に。」

小十郎を睨みつけ「姉さんを傷つけた元凶も入るようだし、戻り次第追っ払うとするかね。」そう言い

ライチュウを見て「ライちゃん。ちょいと私しやア様行ってくるから後は頼んだよ?」そう微笑んで消えた。

夏美「・・・ライチュウ。お前もひとまず隠れてろ。」

ライチュウ仕方なく頷き「・・・でも、無茶禁物ですよ?後でどやされるの私なのですから。」

と続け様に「・・・後ろで見張ってますよ。」と言って後ろに隠れた。

夏美は再度ギンガを構えながらニヤリと笑い「・・・借り返させてもらいましょうか?竜の右目の兄さん。」

小十郎もニヤリと笑い「・・・出来るのならな。」と刀を再度構え直した。

夏美は火炎風拳回復波を使い自身の傷をいやして行き再度小十郎に

向けて今度こそギンガを発砲した。

小十郎は軽くかわした。

夏美軽く舌打ちしながらも火炎風拳火炎風影分身を使って影分身をした。

小十郎はニヤリと笑い「・・・影分身か」。小細工してくれるな。だが、こんな小細工で俺をごまかせると思うなよ？鳴神！！」雷が渦になり夏美を攻撃した。

と同時に夏美の影分身が消えてしまつて本体になった。

夏美タバコに火を灯し苦笑いをし「・・・いやア、参っちゃったなこりゃア。一応、此れ私しゃアの十八番なんだけどねエ。」と続け様に再びギンガを発砲した。と同時に今度は小十郎の右ほほに軽くすった程度

だった。

右ほほから血が滴れる。

夏美頭抱えて「・・・かすただけか。」すると小十郎が再びニヤリと笑い「あぶねエな。」と言い夏美の前に姿を消し「居ない!？」すると背後に「・・・此処だぜ?夏美?」そう言い夏美は振り向こうとした瞬間・・・。

ドシュッ!!!と再び小十郎の刀が夏美の胸を貫き夏美血を吐いた。

と同時に夏美の返り血が小十郎の顔に掛け手でぬぐい舐め「・・・甘いな。」そう呟き夏美の体ごと壁に突き刺して血が滴れる。

夏美の顔が曇った。

ライチュウは慌てて『夏美様!!ちくしょオオよくもよくも夏美様オオ!!!』そう言いながらライチュウは加速をつけボルデッカー状態になり小十郎に突進して行った。

夏美は血を吐きつつも「よ、よせエエ!!!ライチュウウ!!!」と相棒の名を呼んだと同時に小十郎はもう一本あった刀を鞘から抜き出し「霞断月!!!」ライチュウは喰らってしまいその壁にぶち当

たり気を失った。

夏美は「ライチュウウー！」と続け様に「て、てめエエ！！！」血を吐きつつも夏美は自分に突き刺さった小十郎の刀を抜いたと同時に其処に血が滴れた小十郎は再度ニヤリと笑いながら夏美に近づき「強がるんじゃアねエよ。」と続け様に手を出して「・・・また、こっちに堕ちてしまえ、夏美。」

夏美はその言葉を聞き両目を見きらき驚いて・・・。

一体どういう事だ???

と心の中で呟いていても小十郎の手が夏美自身に近づいたその時・・・。

ドカカカカン！！と音がしクナイが散乱していた。

小十郎其れを見て軽く舌打ちし「・・・もう、あのクノ一戻って来たのか？」と続け様に「・・・いや、違うな。」

すると夏美の前に全身黒白で黒の兜をかぶってオレンジ色の髪で両頬にペイントが施されていた。

夏美その姿を見て「・・・ふ、風さんかい？」

小十郎はその事を聞きニヤリと笑い「・・・伝説の忍びか。此れはまたえれえもんを懐かせたもんだぜ。」

そつ伝説の忍びと呼ばれた風魔小太郎だった。

小太郎は夏美に寄り添い「・・・おそく、なつて、ごめん。夏さん。だ、い、じょうぶ??」

と言い夏美フツと笑い「・・・あ、あア。何とかな。」と続け様に「悪イ。風さん。チイと限界だから

少し休むわ。」とヨロヨロとした自分の体を支えて寢室を出た。

小太郎は頷き夏美を見送って小十郎を見て刀を取り出し「・・・お前の次の相手俺。夏さん傷つけた。

只では帰せない。」

小十郎は其れを聞いて楽しそうに笑い「まさか、伝説の忍びにこうも会えてしかもお相手してくれるとはねエ。嬉しいじゃねエか。だがな・・・龍の右目を舐めてるといくら伝説の忍びも痛い目あうぜ？覚悟しな。」そう言い刀を再度構え直した。と同時に2人は突進して行った。

一方、夏美はリビングのソファーに寝そべって目を瞑った。

傷は回復龍王波を使用し外側も中も傷をいやしていた。

と同時に「Ha!!こんな所で無防備に寝ている何ぞア隙がありすぎるぜ？」そう言い男は夏美の頭の横に座りながら撫でて「good dream」を見るよ？My little girl。ま、俺が居るから当然だろうがな。」

とクククと楽しそうに見て夏美の首筋に顔うずめ舐め咬みつき血を吸った。

その男は何と政宗だった。

一方、メグナ達と「招かざる客人^{ゲール}」をなぎ倒しているライカは夏美

の気が不安定になっていた

事を察知し「・・・相棒?？」

何かあったな?と心の中で呟いていた。

第3夜。夏美奥州会の偵察後、ヘルシング、ワカバアジトに戻り報告後再び今度は自分の部屋の寝室で竜の右目と悪戯再会?完。

第3夜。夏美奥州会の偵察後、ヘルシング、ワカバアジトに戻り報告後再び今度

今章も無事に更新完了致しました。

今回は風魔さんを出させて頂きました。一応、此処の風魔さんは、お話をします（笑）グタグタですが・・・（笑；；）

今後とも出させて頂く予定ですので宜しくお願い致します。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

アレから、グールをなぎ倒して夏美の所に気になったのか行っただった。

ライカ慌てて「相棒オオ！！」と叫んだ。

すると風魔と対立していた小十郎が政宗の所にやって来て「政宗様このままだと死女の小娘と鉢合わせする可能性があります、いかが致します？引き上げますか？」

政宗ニヤリと笑い「ああ・・・引き上げと行きたい所だがそうもいかねエ様だ。」

ライカが勢いよく入って「相棒ッ！！」

すると、其処には政宗に血を吸われ弱っていた夏美とその隣には政宗と後ろには小十郎がいて政宗ライカを見てニヤリと笑い「Hey

! snow girl! 邪魔してるぜ?」ライカ氷棒を取り出し「伊達政宗エエエエエ!!!」と政宗に向かって「よくも相棒オオオオオ!!! 許さねエ!!!」とさらに続けて「相棒に触って良い吸血鬼は基本的に、あの方々、達だけだ。」そう言い政宗に攻撃をして行った。

夏美は息切れしつつも「よ、止すんだ! 相棒ッ!」と止めに入ったが・・・

ライカはあまりに怒りに満ちていて止められる状態ではなかった。

だが、小十郎も極殺モードになってニヤリと笑い「てめエ。政宗様に刃向けるとはいい度胸じゃねエか。俺が・・・相手してやるぜ?」と刀を再度鞘から抜きライカに向けた。

其れを見た夏美は首筋に急いで手をやり血を補給し翡翠刀をすばやく抜刀し小十郎に向かって「止めるオオオ!!!」

止めてくれ!!! もう、私しやアから大切な者を・・・此れ以上。

ウバワナイデクレ・・・。

コレイジョウワタシヲコワサナイデクレ・・・。

イヤダ!!! モウ、コレイジョウウシナウノハ・・・。

コレイジョウ、ヤミノナカニジブンジシンヲフタタビイレテシマウノハ・・・

モノスゴクイヤダ。

モノスゴクイヤダ。

タスケテクレ……。オネガイダ。

モウ……。ウシナウノハタクサンダ。

タイセツナアイボウタチノタメワタシハタタカウ！

ライカは夏美を見て「夏美ッ！」

夏美ニヤリと笑い「よオ。相棒。ご覧の通り私は回復だ。何ともねえよ。」

だから心配するな。

といつもの様に笑ったが……。ライカは相棒に対して何の変化を少しずつだが

感じていた。

ライカ「第4夜。政宗に血を吸われた姿を見た夏美を見て相棒のライカの怒りが政宗に炸裂？そして……。夏美の微力ながらの変化？？」

「次章もどうぞよろしく頼むわ。」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第4夜。政宗に血を吸われた姿を見た夏美を見て相棒のライカの怒りが政宗に炸

今章は、ライカが出てきます。

因みに、政宗さんの言うsnow girlはライカの事です。

氷棒があるからかでしょうか（笑）

何度もすみませんが・・再度残酷シーン等がある予定ですのでご了承ください
承頂きたいと思います。

第4夜。政宗に血を吸われた姿を見た夏美を見て相棒のライカの怒りが政宗に炸

アレから、グールをなぎ倒して夏美の所に気になったのか行っていた。

ライカ慌てて「相棒オオ!!」と叫んだ。

すると風魔と対立していた小十郎が政宗の所にやって来て「政宗様。このままだと死女の小娘と鉢合わせする可能性があります、いかが致します? 引き上げますか?」

政宗ニヤリと笑い「ああ・・引き上げと行きたい所だがそうもいかねエ様だ。」

ライカが勢いよく入って「相棒ツ!!」

すると、其処には政宗に血を吸われ弱っていた夏美とその隣には政宗と後ろには小十郎がいて政宗ライカを見てニヤリと笑い「Hey! snow girl! 邪魔してるぜ?」ライカ氷棒を取り出し「伊達政宗エエエエ!!」と政宗に向かって「よくも相棒オオオオオ!! 許さねエ!!」とさらに続けて「相棒に触って良い吸血鬼は基本的に、あの方々、達だけだ。」そう言い政宗に攻撃をして行った。

夏美は息切れしつつも「よ、止すんだ! 相棒ツ!」と止めに入ったが・・

ライカはあまりに怒りに満ちていて止められる状態ではなかった。

だが、小十郎も極殺モードになってニヤリと笑い「てめエ。政宗様に刃向けるとはいいい度胸じゃねエか。俺が・・・相手してやるぜ？」と刀を再度鞘から抜きライカに向けた。

其れを見た夏美は首筋に急いで手をやり血を補給し翡翠刀をすばやく抜刀し小十郎に向かって「止めるオオオ！！！！」

止めてくれ！！もう、私しやアから大切な者を・・・此れ以上。

ウバワナイデクレ・・・。

コレイジョウワタシヲコワサナイデクレ・・・。

イヤダ！！モウ、コレイジョウウシナウノハ・・・。

コレイジョウ、ヤミノナカニジブンジシンヲフタタビイレテシマウノハ・・・

モノスゴクイヤダ。

モノスゴクイヤダ。

タスケテクレ・・・。オネガイダ。

モウ・・・。ウシナウノハタクサンダ。

タイセツナアイボウタチノタメワタシハタタカウ！

ライカは夏美を見て「夏美ッ！」

夏美ニヤリと笑い「よオ。相棒。ご覧の通り私は回復だ。何ともねえよ。」

だから心配するな。

といつもの様に笑ったが・・・ライカは相棒に対して何の変化を少しずつだが

感じていた。

ライカ氷棒構えつつ「・・・平気じゃねエだろ？」お前さんは下がって少し休んでな。此処は私が引き受けるからよ。」

夏美フツと笑い「・・・この男の相手私ヒトしゃア1人でも無理だったんだ。」だからさ・・・

2人で行こうや。大丈夫だからよ。」と言い翡翠刀を構え直し「・・・もう失うのは沢山なんだ」。

だから、ワカバのリーダーとして幹部として、橘家本家の人間の宿命・・此処を護りとおす！……」そう言い極殺モードの小十郎に対して「ワカバリーダー兼幹部橘夏美！いざ参る！……」そう言い翡翠刀を持ち突進し「翡翠流・爆風龍王弾！……」と攻撃し始めたが・
・逆に小十郎は蹴りで夏美をなぎ倒した。

風が勢いよく吹きそして夏美は壁に激突した。

ライカ「相棒ッ！」と続け様に「チイ！花鳥の舞いよ！死の鳥よ！死の舞いよ！舞えよ！花鳥風氷鳥破壊死龍斬！」と攻撃を放った。

小十郎は刀を構え直し「月皇^{げっこう}！」を放った。

ライカ氷棒を構え直しながら「チイ！！！！花鳥風龍王陣！！！！！！！！」と月皇をはじき返して「死女の力なめんじゃねエぞ！！！！！！！！」

政宗は其れを見てニヤリと笑いながら口笛を吹き「やるじゃねえか！あの死女の嬢ちゃん。」

・・気に入ってたぜ？

ライカは小十郎と相変わらず対立し続けていた。

と同時に夏美は気がつきライカを見やりライカが小十郎の攻撃を受けて多少血が出る事に気づき本調子ではない体を起こし「あ、相・・・」と言いかけた次の瞬間。

ドクン！！！！ドクンッ！！！！心臓の鼓動が増した。

夏美驚いてそして血の匂いに惑わされていた。

な、ど・・・どう言う事だ！！？

血の匂いに惑わされる等・・・。

私は、私は・・・人間だ！！

と同時に政宗が夏美の所に来て前に座りニヤリと笑い「・・・辛エ
だろ？」夏美。」

夏美は只黙っていた。

そして政宗がそつと耳打ちして「・・・『お前のbody』は俺
が咬んだ時に少し『blood』入れさせてもらったからなア。
もう『人間としてじゃなくて・・・少しずつbody』が吸血鬼にch
ange』する頃だろうぜ。」

夏美は其れを聞いて驚いていた。

んな・・・・・・・・何だと！？؟؟クソッ！！！！！！！！

すると政宗があざ笑うかのように自分の左手首を切り夏美の前に血を出し「・・・drink」（飲めよ）。

欲しいんだろ???なあ・・・?『My little girl?』」

とさらに耳元で囁いたが・・・夏美は思いっきり体をはねのけギンガを政宗に向け「私は、人間だッ！」

ワカバの人間だ!!!!!!ワカバの一員だ!!!!!!ヘルシングの一員だ!!!!!!人間なんだ!!!!!!」

と叫んだ。

いや叫ばなければ、理性、が失われそうだったからだ。

出来たら・・・私は、もし吸血鬼になるのであれば・・・。

アーカードさんか晋助様が良かったかな。と心の中で呟いた。

ライカは夏美の様子を見て慌てて「相棒ッ!!」と続け様に小十郎に向けて氷棒を左肩に向けて突き刺し

「どけエエエエ!」と言いその場を後に夏美の側に急いで寄った。

すると夏美が「来るなアアア!!相棒!!!!!!」と叫んだ。

ライカが足を止め「・・・夏美?」と不安そうに聞いた。

夏美

「・・・そんな、不安そうな、顔するなよ。相棒。」

「って、私じゃアは、結局、不安にさせてばかりいたんだな。」

と同時にニヤと笑い「・・・大丈夫だ。心配するな。相棒。」

ライカ「・・・だけど。」

するとセラスが夏美の部屋に勢いよく入って来て「・・・お2人も緊急お仕事'です。」

ライカ頷き「ああ！分かった今行く！！」そう言い奥州組をチラとみて「・・・お前はさんは、安全な所'に身を隠しな。」と呟いてその場を離れた。

と同時にセラスが「夏美さん？」

夏美タバコに火を灯し「・・・悪リイ。先行っててくれ。」

セラスは夏美を見て一礼し即座にライカと共に後にした。

夏美は只ギンガを持ち体を支えつつもセラスの所へと向かった。

・・・私が、吸血鬼化？んな馬鹿な。と己を度付いていた。

だが、心臓の音と血のめぐりの速さに驚いていた。

そして・・・。

心の奥底で・・・。

血が欲しい。血が欲しい。と言っている自分が居た。

夏美は冷や汗をかきつつ冷静に己を沈めていた。

一方、双竜組は其れを楽しそうに見ていた。

第4夜。政宗に血を吸われた姿を見た夏美を見て相棒のライカの怒りが政宗に炸裂？そして・・・夏美の微力ながらの変化？？完。

第4夜。政宗に血を吸われた姿を見た夏美を見て相棒のライカの怒りが政宗に炸

今章も無事に更新完了致しました。

其れでは、ほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ（笑）

夏美タバコに火を灯し走って行つた。

・・・どうしてだ??? グール達の居場所は前は透視術を使わないと基本的に知る事が出来ないはずだ。なのに。なのに……。どうしてだ!?

血の匂い。

あア・・・欲しいな’。

夏美タバコ吸いながら横に首を振り「チイ!! 何考えているんだ! 私じゃアは!!!」と同時にグール達が居るホールへと足を運ぶ。

するとセラスが「夏美さん!!」

夏美セラスの所に急いで寄り「すまねえ!! 遅くなっちゃった!!」

アーカードニヤリと笑い「珍しいな。お前が遅れを取る等。」

夏美苦笑いをし「・・・ちょっと『トラブル』があつて。すみません。」

そう言いギンガを懐から取り出し「さア。。グール達よ！！散りな！！」

It・show time！！」そう言いグール達めがけて打つて出た。

其れも『楽しそうに』。

その姿を見たライカは「・・・相棒？」

アーカードニヤリと笑い「・・・ほう。」と呟いていた。

グール達の返り血が夏美の頬にかかる。

と同時に一瞬夏美の瞳が紅を微ていた。

そう、其れは嘗て闇の始末屋炎龍と呼ばれた時の様に・・・。

だが、その紅の染まる色が微妙に違う風にも見えた。

そして・・・。

夏美最後のグールをなぎ倒し母体の吸血鬼と接触した。

と同時にタバコに再度火を灯し「・・・ずいぶん好き勝手に遊んでくれたな」？母体の吸血鬼さんよ？」とニヤリと笑った。

母体の吸血鬼がクスと笑い「・・・ちよつとね。刺激がほしかったのよ。
ちよつと退屈していたからね。」

夏美フツと笑い「・・・そうかい。なら、御望み通り刺激やろうじゃないの。」

但し、一回きりだけだね。「そう言いギンガを再度銃弾を入れ銃口を向け

て「さて、そろそろ御ねむの時間だ。覚悟は良いかい？」

母体の吸血鬼はそれを見てクスと笑い「・・・同族のくせに同族をかるの」？おかしくない？」

夏美はそれを聞いて癪に障ったのか無表情になり「・・・もう散れや。

」

そう言い銃弾を放った。そして母体の吸血鬼が散って行った事を確認し

「・・・部屋に戻ります。」そう言いその場を後にした。

と同時に「・・・同族？ハッ！まさかな。」

吸血鬼は嫌いじゃないが・・・同じになりたくもない。

永遠なんて・・・ワカバの為に生きると決めた。

あの時から私は己の宿命を（サダメ）全うするだけだ。

すると「・・・ねえ。天井に居るの分かっているんだよ？出てきなよ？」

すると金色の長髪をした黒ずくめの女が出てきた。

「・・・ばれたか。」

夏美チラツと見て「・・・クのか。何処のだ？」

「・・・上杉会の会長である上杉謙信様にお仕えしている忍びかすがだ。

橘夏美。」

夏美其れを聞いて「・・・上杉会とこの剣か。」

と呟いた。

夏美「・・・第5夜。グール戦後の部屋に戻る途中に夏美上杉会の忍びに会う。そして・・・」

「次章もどうぞ宜しくな。」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第5夜。ワカバヘルシングゲール対戦。ゲール戦後の部屋に戻る途中に夏美上杉

今章は、上杉さんとの剣であるかすがさんを出させて頂こうと思います。

尚、予めお断り致しますが、此処に出てくるBASARAキャラは吸血鬼設定ですので

ご理解と御了承をお願い致します。

其れではどうぞ・・・。（残酷シーン等長丁場ありの予定です。ほぼ毎回で申し訳ありません。）

第5夜。ワカバヘルシングゲール対戦。ゲール戦後の部屋に戻る途中に夏美上杉

夏美タバコに火を灯し走って行った。

・・どうしてだ???ゲール達の居場所は前は透視術を使わないと基本的を知る事が出来ないはずだ。なのに。なのに……。どうしてだ!?

血の匂い。

ああ……。欲しいな'。

夏美タバコ吸いながら横に首を振り「チィ!!何考えているんだ!私じゃアは!!!」と同時にゲール達が居るホールへと足を運ぶ。

するとセラスが「夏美さん!!!」

夏美セラスの所に急いで寄り「すまねえ!!!遅くなっちゃった!!!」

アーカードニヤリと笑い「珍しいな。お前が遅れを取る等。」

夏美苦笑いをし「……。ちょっと'トラブル'があつて。すみません。

」

そう言いギンガを懐から取り出し「さア。グール達よ!! 散りな
!!

It・show time!!!」そう言いグール達めがけて打っ
て出た。

其れも「楽しそうに」。

その姿を見たライカは「・・・相棒？」

アーカードニヤリと笑い「・・・ほう。」と呟いていた。

グール達の返り血が夏美の頬にかかる。

と同時に一瞬夏美の瞳が紅を微ていた。

そう、其れは嘗て闇の始末屋炎龍と呼ばれた時の様に・・・。

だが、その紅の染まる色が微妙に違う風にも見えた。

そして・・・。

夏美最後のグールをなぎ倒し母体の吸血鬼と接触した。

と同時にタバコに再度火を灯し「……ずいぶん好き勝手に遊んでくれたな？母体の吸血鬼さんよ？」とニヤリと笑った。

母体の吸血鬼がクスと笑い「……ちよつとね。刺激がほしかったのよ。

ちよつと退屈していたからね。」

夏美フツと笑い「……そうかい。なら、御望み通り刺激やろっじゃないの。

但し、一回きりだけだね。」そう言いギンガを再度銃弾を入れ銃口を向け

て「さて、そろそろ御ねむの時間だ。覚悟は良いかい？」

母体の吸血鬼はそれを見てクスと笑い「……同族のくせに同族をかるの？おかしくない？」

夏美はそれを聞いて癪に障ったのか無表情になり「……もう散れや。」

そつ言い銃弾を放った。そして母体の吸血鬼が散って行った事を確認し

「……部屋に戻ります。」そつ言いその場を後にした。

と同時に「・・・同族？ハッ！まさかな。」

吸血鬼は嫌いじゃないが・・・同じになりたくもない。

永遠なんて・・・ワカバの為に生きると決めた。

あの時から私は己の宿命を（サダメ）全うするだけだ。

すると「・・・ねえ。天井に居るの分かっているんだよ？出てきなよ？」

すると金色の長髪をした黒ずくめの女が出てきた。

「・・・ばれたか。」

夏美チラツと見て「・・・クのか。何処のだ？」

「・・・上杉会の会長である上杉謙信様にお仕えしている忍びかすがだ。」

橘夏美。」

夏美其れを聞いて「・・・上杉会とこの劔けんか。」

と呟いた。

そして夏美両腕を組みながらかすがを見てタバコを吸いながら「・・・
んで？上杉会の剣さんが一体私しゃアに何の用で？」

かすが夏美を見て「謙信様がお前に会いたがつている一度、来ても
らおうか？」

夏美フツと笑い「・・・悪いが、そいつは出来ねえ相談だ」。

貸すが其れを聞いて顔をしかめ「何故だ？」

夏美「・・・どうせ。此方に来い」とかの誘いでもあるのだろうか？」
と続け様に「悪いが、私しゃアは

基本的に「ワカバやヘルシング」等以外は信用できないんでね。い
や・・・寧ろ、信用する事」が

出来ないのさ。」とさらに続けて「……昔色々あったんでね。」とそして「お前さん所の大將に伝えてよ。もし、どうしても私じゃアに会いたかったら、お手数ですが大將自ら御出になって下さいとね。」と続け様に「……それなら、私じゃアも受けさせていただこうと思う。」

かすが頷き「……噂以上の警戒だな。分かった。謙信様にはそうお伝えしよう。」そう言つとすばやく去った。

其れを見た夏美フツと笑い「……流石だね。あっという間に消えて行つたよ。」そう言い部屋に戻った。

部屋に戻つた夏美は双竜の姿がない事を確認しソファーに座り何時もと同様にタバコに火を灯した。

そして窓を見る。其れも黙って。

すると背後から両手が伸びて夏美に抱きついて来た。

夏美は慌ててギンガを取り出そうとしたが「・・・夏美。私だ。」

と普段聞き慣れている声に安堵し「・・・・・・・・アーカードさん。」

そして「危ないですよ??タバコ吸っているんですから。」と笑った。

アーカードは其れを見てフツと笑い「・・・構わん。」と同時に「・・・何があつた?」と問いただした。

夏美は其れを聞きタバコを口に加えて只黙っていた。

第5夜。ワカバヘルシンググール対戦。グール戦後の部屋に戻る途中に夏美上杉会の忍びに会う。そして……。完。

第5夜。ワカバヘルシングゲール対戦。ゲール戦後の部屋に戻る途中に夏美上杉

今章も無事に更新完了致しました。

此処まで御付き合い下さいまして有難うございます。

それでは、ほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

アレから夏美は、アーカードと共に自分の部屋にいた。

そして何気ないアーカードの一言

「何があつた？」

すると夏美は只タバコを口に加え直しながらようやく口を開き「・・・何でも」ないですよ。何も・・・」

だが、アーカードは夏美を見て「・・・私をごまかせるとでも思つたのか」？大方奥州の独眼竜の小僧に血を入れたのであろう？」とニヤリと笑って言った。

夏美は只其れを聞いて黙った。

「アーカードフツと笑い「・・・『凶星』だな。お前が黙っている事は。」

すると夏美は「・・・くれぐれもインテグラ様方には御内密にお願いします。」

此れは、正直「私自身が望んだ事じゃないから。」と悲しそうに笑い呟いた。

と同時に「・・・あの方々の眼に正直今の私はちゃんと映っているのかも。」

分からないのですから・・・。」とも呟いた。

アーカードはフツと笑い「・・・前慮しよう。」と同時に夏美のタバコを口元から取り消して夏美を自分自身に振り向かせて「・・・どうせなるなら私の手でさせてやろう。」

夏美はアーカードを見て「・・・アーカードさん。」と呟いた。

此れで良いの???

本当に????

私の中はもう・・・。

混乱状態。

そして外では相も変わらず小十郎が見ていてフツと笑い「・・・逃げ切れるとも思っなよ？」夏美。」

さア・・・俺達の所に堕ちてこいよ。早く・・・早く・・・。

小十郎「第6夜。アーカードと夏美。そして・・・竜の右目再び？」

「次章もどうぞ宜しく頼むぜ？」

以上です。其れでは次章も今章同様御付き合い頂ければ幸いです。

第6夜。アーカードと夏美。そして・・・竜の右目再び？（前書き）

今章は、主にアーカードさんと夏美が主になる予定です。

長丁場で少々？片倉さんも出演予定です。

第6夜。アーカードと夏美。そして・・・竜の右目再び？

アレから夏美は、アーカードと共に自分の部屋にいた。

そして何気ないアーカードの一言

「何があつた？」

すると夏美は只タバコを口に加え直しながらようやく口を開き「・・・何でも」ないですよ。何も・・・」

だが、アーカードは夏美を見て「・・・私をごまかせるとでも思つたのか」？大方奥州の独眼竜の小僧に血を入れたのであるう？」
とニヤリと笑つて言つた。

夏美は只其れを聞いて黙つた。

「アーカードフツと笑い「・・・『凶星』だな。お前が黙っている事は」

すると夏美は「・・・くれぐれもインテグラ様方には御内密にお願いします。」

此れは、正直「私自身が望んだ事じゃないから。」と悲しそうに笑い呟いた。

と同時に「・・・あの方々の眼に正直今の私はちゃんと映っているのかも」

分からないのですから・・・。」とも呟いた。

アーカードはフツと笑い「・・・前慮しよう。だが、」と同時に夏美のタバコを口元から取り消して夏美を自分自身に振り向かせて「・・・どうせなるなら私の手でさせてやろう。」

夏美はアーカードを見て「・・・アーカードさん。」と呟いた。

此れで良いの??

本当に???

私の中はもう・・・。

混乱状態。

そして外では相も変わらず小十郎が見ていてフツと笑い「・・・逃げ切れるとも思っなよ?」夏美。」

さア・・・俺達の所に堕ちてこいよ。早く・・・早く・・・。

夏美、小十郎が居る事を察知したのか慌ててアーカードの腕から出て窓を見る。

すると「・・・!!!!!!」と驚きながらその場を見る。

すると其処には小十郎が夏美を見てニヤリと笑っていた。

夏美は冷や汗をかきながらも小十郎を見て「・・・・片倉様」。
と呟いた。

・・・確かに、私は、過去にあなた様方に拾われた。だけど、

本当の居場所に戻った。

・・・そう戻った。はずなのに。

どうして??どうして???.そっとしておいてくれないの??

もう、あの頃の私とは違うんだからさ。そう思いたいよ。願いたいよ。

I My little girl。 -

其れと同時にあの方の声も私の中でこだまする。

I C o m e o n M y l i t t l e g i r l

―俺の所へ戻って来いよ。 -

あア・・・・・・・・・・もう、あれは‘毒’だ。

‘甘い毒’、‘甘い罠’

だけど・・・・・・・・・・私は。

そう心の中で呟きいつの間にか左手を握り締めて拳から血が滴れて

いた。

そして、夏美の鼻に血の匂いがする。

夏美はその匂いを嗅ぎ少々顔しかめた。

と同時に己の拳を見て「・・・何時の間に。」と同時にアーカードを見て「・・・すみません。1人にして頂けませんか？」

アーカード夏美を見て「・・・大丈夫なのか？」

夏美フツと笑い再びタバコを懐から取り出し「はい。大丈夫ですよ。」とごまかした。

アーカード軽くタメ息をつき「・・・今は退くが、すぐに何かあったらすぐ行くからな。」そう言い壁から消えた。

夏美は、アーカードを見送った後タバコに火を灯して吸い始めた。

血・・・血・・・血・・・。

血・・・血・・・血・・・。

ーねえ？欲しいんでしょう？素直になったら？ -

「ねえ？欲しいんでしょう？素直に……。」

いらねエ！！！！止めろッ！私は……
「人間なんだ」。

頼む！人間として居させてくれ！！

人間として宿命を果たさせてくれ！！！！

と同時に手を見た「！！！」

もう、すっかり傷が癒えていた。

馬鹿な……どうして？

アレ（回復龍王波）使っていないのに……。

夏美はタバコを再度口に加え直しソファに座って軽く舌打ちした。

と同時に後ろから両手が出てきて夏美を包み込む。

夏美「……誰？アーカードさん？それとも、晋助様？？」

するとクククと笑い「ひでエな。夏美。俺が居るのに他の男の名何ぞア呼ぶなんてよ。」

夏美その事を聞いて驚いて慌ててタバコを落してしまう。

そして、タバコの火が消えた。

夏美驚いた顔で「・・・か、片倉様。」と呟いた。

その後ろには小十郎が居た。

夏美は我に戻り急いでギンガを懷から出そうとした。

だが小十郎が耳元で「・・・物騒なもんは仕舞え、夏美。」と囁いた。

夏美はその声を聞くとすんなりと聞き入れ懷にギンガを戻した。

小十郎はそれを見て満足そうに「・・・良い子だ」と同時に「・墮ちて来いよ、俺達の下へ。」

そう其れはまるで、戻つて来いよ、とも言われているようだ。

夏美は只首を横に振り「……そつとしておいて下さい」片倉様・

小十郎クククと笑い「悪いがそいつは、聞けねエ相談だな。」
「そ
う言い夏美の首筋に顔をやり舐めそして……。」

ブツリ。と咬まれた音がした。

すると、部屋の中に、甘い血の香り、が漂った。

と同時に血を啜られる音もした。

ズズズ・・・。。。

ズズズ・・・。。。

グチュ・・・。。。

グチュ・・・・・・・・・・。

其れも早くなくてゆっくりと・・・。

まるで味わうかの様に・・・・・・・・。

夏美は顔しかめたが余りにも、快樂の方が大きくて、そのまま「・・・
っ。か、片倉様っ。もう。」

そう言い小十郎の服の袖を握り締めた。

そして小十郎は満足したかのように夏美の首筋から顔を離した。

と同時に夏美はすぐさま血を補給しようと手を首筋に充てようとしたが小十郎がそれを許さなかった。

いつの間にか手首を片手で押えられ小十郎はもう片方の手首をさらけ出し咬みつき自分の血を自分の口に含んだ。

夏美はその行動で察知したのか……。口を思いっきりつむる。

多分、片倉様は私しやアに己の血を飲ます気だ。と。

小十郎はそんなこともお構いなしに夏美に口づけを落した。

夏美は抵抗していたが、舌で強引に口を開けられ其処から血を流し

こむ。

夏美は苦しそうに「んん。」ともがくが其れも虚しく終えて夏美の意志とは逆に体がすっかり小十郎の血を受け入れてしまっていた。

小十郎の血は何故か、甘く夏美自身感じていた'。

と同時に夏美はその場で気をいつの間にか失って行った。

小十郎はそれを見て再度クククと笑い「・・・御休み。俺たちの小さき蒼き龍よ。」と呟き夏美を自分の膝の上に載せ寝かした。

第6夜。アーカードと夏美。そして・・・竜の右目再び？完。

第6夜。アーカードと夏美。そして・・・竜の右目再び？（後書き）

今章も無事に更新完了出来て良かったです。

遅くなりまして申し訳ありません（一礼）

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ・・・。

すると、夏美は眼が覚める。

夏美はあたりを見渡し「・・・ゆ、ゆめ???」

そして内心夢で良かったと呟いていて寝室からリビングに出てソファに座りタバコに火を灯した。幸い今日は「非番」だった。

だから、ゆっくり寝れたのだ。

だが・・・夏美にとってはあまり「良き夢ではなかった」。

夏美タバコを口に加え直しカーテンを開けたすると軽く舌打ちし「・・・寝すぎたな。こりゃア。もう、夜だ（彼らの時間）。「そう呟きながらも「・・・月」か。」とも呟いた。

それにしても・・・良い月だ。満月ではないけど・・・でも、満月は嫌いだからこの方が良かったのかも・・・とも呟いた。

そして、ソファーに座りタバコを吸い続けた。

・・・ヤバいな。何故か知らないけど、血が・・・たぎる。血が欲しい。

夏美首を横に振り

しっかりしろ！！私ッ！！！落ち着け私！！！！そう言い聞かせて
そして

タバコを灰皿でもみ消し「だアくそう！！！！梨でも食べよう！」
と何故かむしゃくしゃになりつつも気持ちを落ち着かせて台所へ行き
梨を冷蔵庫から取り出し包丁で向き始めた。少しずつゆっくりゆ
っくり剥いて行く。

だが、夏美の気持ちはまだ落ち着かなかった・・・。

次の瞬間ズパッ！！と指が斬る音がした。

夏美顔しかめて「ッ！！！！痛ッ！！！」すると其処から血が滴れた。

指から傷が出来てそこから血が・・・。

夏美「・・・。。。。ハハ。」と苦笑いをして何をしているんだろ
う？私じゃアは。。。。ろくに「梨も剥けないのか？」「そう言い傷を
再度見る。

すると顔をしかめた・・。

血・・・・・血・・・・・。

血・・・・・血・・・・・。

夏美は耐えきれなくなったのか、その傷の血を舐めはじめた。

と同時に瞬時に我に戻る。「な、何をしていたんだ！？私じゃアは！！！！？」まさか・・・あの時の夢が??????

現実には????すると夏美は再度梨を剥き今度は最後までやって食べた。

・・・何故だ??何故??梨がまるで、石の様に・・・

夏美は勿体なさそうに「・・・ごめんな。」と詫びるように梨をゴミ箱に捨てようとしたが、いつの間にか小太郎が来てもらうよ。と言いつばやくその場を去った。

夏美は良いよと言い台所を片づけてリビングに戻ってタバコに火を再度灯した。

すると夏美自身の心の中で声がした再度・・・。

「ねえ、もう、認めちゃいなよ」。貴女はもう・・・・。

夏美は心の中で違う！……違う！……と叫んでいた。

せつかく表に戻れたのに……闇に戻るものか！……！

―血を舐めた。しかも自分の……此れはもう認めざる追えないでしよ？――

黙れっ！……！！

黙れっ！……！！

夏美タバコを再度もみ消し「黙れって言っただよオオ！！」と食器棚のガラスを割った。手から血が垂れる。

と同時に再度夏美は「自我」がなくなりその血を舐めた。

そして後ろから抱きしめられて「……欲しいなら」「俺のblood」を飲めよ。My little girl。」

夏美その声を聞き我にすぐさま戻り慌てて後ろを見た。

其処にはニヤリと笑った政宗が夢に出た小十郎を引連れて来ていた。

夏美驚いて「……………政宗様、ッ！」と政宗の名を呼んだ。

どうして！？どうして！？そっとしておいてくれないの！？

夢が現実……………

夏美「第7章。夏美を襲う『悪い夢』だが、其れは……………」と続け様に「

次章も宜しく。」

以上です。今章も御付き合い下さいまして有難うございました。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第7夜。夏美を襲う、悪い夢、だが、其れは……。 (前書き)

今章はですね・・・吸血シーンらしきシーン等がある予定です。

そのシーンが苦手な方はお引き取り頂いた方が宜しいかと。

其れではどうぞ。多分此方も長丁場です。

第7夜。夏美を襲う、悪い夢、だが、其れは……

すると、夏美は眼が覚める。

夏美はあたりを見渡し「……ゆ、ゆめ???」

そして内心夢で良かったと呟いていて寝室からリビングに出てソファに座りタバコに火を灯した。幸い今日は「非番」だった。

だから、ゆっくり寝れたのだ。

だが……夏美にとってはあまり「良き夢ではなかった」。

夏美タバコを口に加え直しカーテンを開けたすると軽く舌打ちし「・寝すぎたな。こりゃア。もう、夜だ（彼らの時間）。」そう呟きながらも「……月」か。」とも呟いた。

それにしても……良い月だ。満月ではないけど……。でも、満月は嫌いだからこの方が良かったのかも……。とも呟いた。

そして、ソファに座りタバコを吸い続けた。

……ヤバいな。何故か知らないけど、血が……たぎる。血が欲しい。

夏美首を横に振り

タバコを灰皿でもみ消し「だアアくそう!!! 梨でも食べよう!」
と何故かむしゃくしゃになりつつも気持ちを落ち着かせて台所へ行
き梨を冷蔵庫から取り出し包丁で向き始めた。少しずつゆっくりゆ
っくり剥いて行く。

次の瞬間ズパッ！！と指が斬る音がした。

指から傷が出来てそこから血が……。

すると顔をしかめた……。

血
●
●
●
●
○

血
●
●
●
●
○

夏美は耐えきれなくなったのか、その傷の血を舐めはじめた。

と同時に瞬時に我に戻る。「な、何をしていたんだ!? 私じゃアは
!!!!?」まさか・・・あの時の夢が?????

現実には???すると夏美は再度梨を剥き今度は最後までやって食べた。

・・・何故だ???何故???梨がまるで石の様に・・・

夏美は勿体なさそうに「・・・ごめんな。」と詫びるように梨をゴミ箱に捨てようとしたが、いつの間にか小太郎が来てもらうよ。と言
いすばやくその場を去った。

夏美は良いよと言い台所を片づけてリビングに戻ってタバコに火を
再度灯した。

すると夏美自身の心の中で声がした再度・・・。

「ねえ、もう、認めちゃいなよ」。貴女はもう・・・。

夏美は心の中で違う!!!!!!違う!!!!!!と叫んでいた。

せつかく表に戻れたのに・・・闇に戻るものか!!!!!!

―血を舐めた。しかも自分の・・・此れはもう認めざる追えないですよ、？―

黙れっ！！！！！！！

黙れっ！！！！！！！！

夏美タバコを再度もみ消し「黙れっって言っただよオオ！！」と食器棚のガラスを割った。手から血が垂れる。

と同時に再度夏美は、自我、がなくなりその血を舐めた。

そして後ろから抱きしめられて「・・・欲しいなら、俺のblood、を飲めよ。My little girl。」

夏美その声を聞き我にすぐさま戻り慌てて後ろを見た。

其処にはニヤリと笑った政宗が夢に出た小十郎を引連れて来ていた。

夏美驚いて「・・・政宗様、ッ！！」と政宗の名を呼んだ。

どうして!?!どうして!?!そっとおいてくれないの!?

夢が現実に・・・。

ああ・・・よく分からないよ。

夏美は只抵抗していた。よく分からないけど抵抗していた。

男の力と女の力の差は激しすぎる事を知っていた。

政宗フツと笑い「抵抗」何て無意味だぜ? My little girl? 大人しくされてな?」と耳元でささやく。

夏美はそれを聞き只只其処で止まっていた。

政宗はそれを見て満足そうに「Good。」と続け様に夏美の頭を撫でながら「・・・もう、諦めて「受け入れな」。」そう言いながら政宗は自分の首筋をさらけ出し血を出した。

そして、少しずつ少しずつ夏美の顔めがけて落とす様に血を流した。

夏美は顔しかめたと同時に「駄目です！夏美さん！！！！」とセラスの声が聞こえた。

夏美我に戻り急いで政宗の所から脱出をしセラスの所に行き軽くポンと肩をたたき息を切らしながら

「・・・助かった。で？？何でお前さん此処に？セラス？」

セラスクスと笑い「マスターから命令受けていたんです。^{オーダー}夏美さん
の様子がおかしいと

の事で様子を見にね？」と続け様に「夏美さんも夏美さんですよ？夏美さんご自身はお気づきになられていないかもしれませんが、マスターも高杉さん同様に夏美さんの事お気に召されているんですよ？」

夏美タバコに火を灯し苦笑いをし「・・・マジかよ。」と続け様に「だから、取られるわけにもいかないんです！」きっぱり言った。

政宗はセラスを見てニヤリと笑い「・・・アーカードの所のlittle gold girlか。」

セラス拳銃取り出し「此処は、私に任せて下さい。夏美さんは、マスターからのお呼び出しが来ています。すぐに行って下さい。」

夏美はフツと笑い「OK。任せたよ。でも、セラスこのお方がたは強いよ????気をつけな?」

そう言い部屋を後にしようとした次の瞬間小刀が夏美の所に投げ込まれた。

夏美はそれを止めて苦笑いをし「・・・、そう簡単に見逃してくれなさそうですね。、片倉様。」

小十郎はそれを聞いてニヤリと笑い「当たり前だ。」と言った。

第7章。夏美を襲う、悪い夢、だが、其れは……。完。

第7夜。夏美を襲う「悪い夢」だが、其れは……。 (後書き)

今章も遅くなりましたが無事に更新完了致しました。

それではほおなじみのグタグタ予告風をどうぞ(笑)

セラスはそれを察知したのか政宗に銃口向けつつももう一つの手で他の拳銃を取り出し小十郎に向けて「・・・夏美さんは御用があるのです。此れ以上構わないで上げてくれませんか？竜の右目さん？」

政宗其れを聞いてククと笑い「おっかねエな。」

小十郎もニヤリと笑い「政宗様に向けているその拳銃を下してからにしな。」

セラスはクスと笑い「其れは出来ない相談ですね。」すると一瞬殺気が辺りを包んだ。

夏美は察知して「まずい！！セラス！！急いで政宗様から銃口を下せ！！！」

セラスは慌てている夏美を見て「早く行って下さい。夏美さん。此れ以上

マスターをお待たせしてはいけません。」

夏美は叫びながら「分かっているが！急いで銃を下せ！！早く！！」

其れと同時にセラスは行き成り蹴っ飛ばされた。

夏美は軽く舌打ちして「ほら言わんこつちゃアネエ!!」

と同時に小十郎を見て顔が引きつった。

夏美が見た先には前髪が垂れて雷を自分自身に巻き付けていた所謂極殺モードになっている小十郎が居た。

小十郎はニヤリと笑いながら飛ばされたセラスの所に行きセラスを見て「小娘。政宗様に銃口向けた事後悔するんだな?」

夏美は顔をしかめて額に手をやり「やつちまってやんの。」と呟きながらも

此処はセラスに任せて行くか。と思いつつも部屋を急いで出た。

政宗はそれを察知したのか再度ニヤリと笑い「逃げられると思うなよ? My little girl。」と呟いた。

セラスは壁から出てきてニヤリと笑い「後悔していませんよ?」
寧ろ、「楽しみが増えました。」と小十郎を見て言った。

政宗口笛を吹いて「極殺」の小十郎を見て楽しみが増えたなんて軽々しく言えるのはアンタだけだぜ。」と続け様に「オイ。小十郎。チィとばかり

その嬢ちゃんと「遊んでやれや」。

小十郎はそれを聞きニヤリと笑いがえし「承知！政宗様に銃口を向けた愚かな行為をこれから後悔させてやりますよ。」と政宗を見て言った。

セラス其れを聞きクスと笑い「・・・闘争の時間です。」そう言い小十郎に向かって突進して行つた。

一方、アーカードは自分の部屋で第三者の目でセラスの様子を見ていた。

其れも楽しそうに。夏美も合流していた。

夏美は苦笑いをして「・・・ずいぶん楽しそうですね。アーカードさん。」

アーカード夏美を手招きして自分の所に寄らせ「ああ、楽しいとも、セラスが吸血鬼として、成長している、此れ以上に、嬉しい事は無い。」

夏美再度苦笑いをして「・・・左様ですか。」と同時に「・・・暴れられているのが私の部屋つつうのが何とも複雑なのですが。」

アーカードは自分の椅子の所にあるテーブルの所に置いてあるワイングラスを取りながら「ワカバに請求すればいいだろう。」

夏美苦笑いをした。と同時に心の中で・・・片倉様は一筋縄ではいかない相手だよ？セラス。特に「極殺」入った片倉様は特に・・・別に私じゃあが心配する程じゃないだろうが、お前さんの事だ。だが、気をつけなよ??

セラス。と呟いていた。

するとアーカードは「・・・あいつめ。部位分派手に飛ばされ追って
」
と苦笑いしながら呟きワインを飲んだ。

夏美片手を頭にやりながらあっちゃあ。あいつ大丈夫か？

するとアーカードはジャツカルとかスールを持ちながら椅子から離れた。

夏美はそれを察知したのか「・・・まさか。行かれるおつもりで？」

アーカードニヤリと笑い「もちろんだとも。あいつばかりに良い思いさせてられないのでな。お前は此処にいる。お前まで行くと面倒だ。」と言い
壁から消えた。

夏美はタバコに再度火を灯し「・・・ご武運を。」と呟いた。

って、結局何の為に呼ばれたんだ??私じゃアは??と突っ込んだ。
と同時に「Hey! 此処にいたのか??? My little girl
」?

後ろから声がした。

夏美は慌てて後ろを振り向く「・・・もう、追いつかれましたか? 政宗様。」

と呟いた。

政宗はククと笑い「言ったはずだぜ?? 逃がさねえ、ってな。Yousee?」そう言い指を出し夏美を手招きした。

夏美はその合図と共に体が政宗の所に行こうとした。

だが、夏美懷からギンガを取り出し太ももに向かって撃った。

夏美顔しかめて膝をガクつと落とした。

・こいつが効いてしまうツう事はもう人間^{ヒト}じゃなくなってしまった事だな。認めたくないが・・・。

すると、政宗が夏美の所に来てタメ息をつきながら苦笑いをして「・まったく強情な奴だぜ。My little girlは。」そう言い太ももから滴れる夏美の血を舐めた。と同時に顔あげて「・甘いぜ? お前の血は?」そして

耳元で「欲しいんだろ?? もう、勘忍した方が良いぜ?」お前がきつくなるだけだ。」と囁いた。

夏美はその声に耳を傾けてしまいギンガを懷にしまつて政宗の首筋を見て

「・・・・下さい」。政宗様。」と思わず口が滑るように言ってしまった。政宗はそれを聞いてニヤリと笑い「All right.やるよ。」そして先程と同じ様に自分の首筋に爪を立て血を流し「Come on? My little girl。」そう言った。と同時に夏美自身は政宗の首筋に口をあてて飲み始めてしまった。

政宗「第8夜。極殺小十郎VSセラス。そして・・・アーカードも加

勢と同時に夏美に迫ってしまった闇？」

「次章も派手なPartyになりそうだ。宜しくな？」

以上です。今章も御付き合いました。有難うございました。

また次章も宜しくお願い致します。

第8夜。極殺小十郎VSセラス。そして・・・アーカードも加勢と同時に夏美に泊

今章も残酷シーン等ある予定です。

長丁場にもなる恐れもあります。

編集可能性があります。

第8夜。極殺小十郎VSセラス。そして・・・アーカードも加勢と同時に夏美に泊

セラスはそれを察知したのか政宗に銃口向けつつももう一つの手で他の拳銃を取り出し小十郎に向けて「・・・夏美さんは御用があるのです。此れ以上構わないで上げてくれませんか？竜の右目さん？」

政宗其れを聞いてククと笑い「おっかねエな。」

小十郎もニヤリと笑い「政宗様に向けているその拳銃を下してからにしな。」

セラスはクスと笑い「其れは出来ない相談ですね。」すると一瞬殺気が辺りを包んだ。

夏美は察知して「まずい！！セラス！！急いで政宗様から銃口を下せ！！！！」

セラスは慌てている夏美を見て「早く行って下さい。夏美さん。此れ以上

マスターをお待たせしてはいけません。」

夏美は叫びながら「分かっているが！急いで銃を下せ！！早く！！」

其れと同時にセラスは行き成り蹴っ飛ばされた。

夏美は軽く舌打ちして「ほら言わんこつちゃアネエ！！」

と同時に小十郎を見て顔が引きつった。

夏美が見た先には前髪が垂れて雷を自分自身に巻き付けていた所謂極殺モードになっている小十郎が居た。

小十郎はニヤリと笑いながら飛ばされたセラスの所に行きセラスを見て「小娘。政宗様に銃口向けた事後悔するんだな？」

夏美は顔をしかめて額に手をやり「やつちまってやんの。」と呟きながらも

此処はセラスに任せて行くか。と思いつつも部屋を急いで出た。

政宗はそれを察知したのか再度ニヤリと笑い「逃げられると思うなよ？ My little girl。」と呟いた。

セラスは壁から出てきてニヤリと笑い「後悔していませんよ？」
寧ろ、「楽しみが増えました。」と小十郎を見て言った。

政宗口笛を吹いて「極殺」の小十郎を見て楽しみが増えたなんて軽々しく言えるのはアンタだけだぜ。」と続け様に「オイ。小十郎。チイとばかりその嬢ちゃんと遊んでやれや」。

小十郎はそれを聞きニヤリと笑いがえし「承知！政宗様に銃口を向けた愚かな行為をこれから後悔させてやりますよ。」と政宗を見て言った。

セラス其れを聞きクスと笑い「・・・闘争の時間です。」そう言

い小十郎に向かって突進して行つた。

一方、アーカードは自分の部屋で第三者の目でセラスの様子を見ていた。

其れも楽しそうに。夏美も合流していた。

夏美は苦笑いをして「……ずいぶん楽しそうですね。アーカードさん。」

アーカード夏美を手招きして自分の所に寄せ「あア、楽しいとも、セラスが吸血鬼として、成長している、此れ以上に、嬉しい事は無い。」

夏美再度苦笑いをして「……左様ですか。」と同時に「……暴れられているのが私の部屋つつうのが何とも複雑なのですが。」

アーカードは自分の椅子の所にあるテーブルの所に置いてあるワイングラスを取りながら「ワカバに請求すればいいだろう。」

夏美苦笑いをした。と同時に心の中で……片倉様は一筋縄ではいかない相手だよ？セラス。特に「極殺」入った片倉様は特に……別に私しやあが心配する程じゃないだろうが、お前さんの事だ。だが、気をつけなよ??セラス。と呟いていた。

するとアーカードは「……あいつめ。部位分派手に飛ばされ追つて」と苦笑いをしながら呟きワインを飲んだ。

夏美片手を頭にやりながらあっちゃあ。あいつ大丈夫か？

するとアーカードはジャッカルとかスールを持ちながら椅子から離れた。

夏美はそれを察知したのか「・・・まさか。行かれるおつもりで？」

アーカードニヤリと笑い「もちろんだとも。あいつばかりに良い思いさせていられないのでな。お前は此処にいる。お前まで行くと面倒だ。」と言い壁から消えた。

夏美はタバコに再度火を灯し「・・・武運を。」と呟いた。

つて、結局何の為に呼ばれたんだ？？私じゃアは？？と突っ込んだ。

と同時に「Hey! 此処にいたのか？？？My little girl
1?」

後ろから声がした。

夏美は慌てて後ろを振り向く「・・・もう、追いつかれましたか？政宗様。」

と呟いた。

政宗はククと笑い「言っただぜ？？」逃がさねえ、ってな。Y
ousee?」そっ言い指を出し夏美を手招きした。

夏美はその合図と共に体が政宗の所に行こうとした。

だが、夏美懷からギンガを取り出し太ももに向かって撃った。

夏美顔しかめて膝をガクつと落とした。

・こいつが効いてしまうツう事はもう人間^{ヒト}じゃなくなってしまった事だな。認めたくないが・・・。

すると、政宗が夏美の所に来てタメ息をつきながら苦笑いをして「・まったく強情な奴だぜ。My little girlは。」そう言い太ももから滴れる夏美の血を舐めた。と同時に顔あげて「・甘いぜ？」お前の血は？」そして耳元で「欲しいんだろう？？もう、勘忍した方が良いぜ？」お前がきつくなるだけだ。」と囁いた。

夏美はその声に耳を傾けてしまいギンガを懷にしまって政宗の首筋を見ながら政宗の顔を見て

「・・・下さい」。政宗様。」と思わず口が滑るように言ってしまった。

政宗はそれを聞いてニヤリと笑い「All right。やるよ。」

そして先程と同じ様に自分の首筋に爪を立て血を流し「Come on? My little girl。」そう言った。と同時に夏美自身は政宗の首筋に口をあてて飲み始めてしまった。

政宗は、満足そうにそして夏美の頭をいとおしそうに撫でる。

一方、ライカは夏美の気が不安定なのを察知したのか・・・「相棒???」と気にしていた。

まさか・・・あいつ、伊達様の血を浴びたのか????」

伊達様・・・そう、実はライカ自身も知っていたのだ。

幼少の頃から政宗や小十郎の事を。

だが、あえて言わなかった。

自分自身に成長につれて言い聞かせていたのだ。

「過去は過去」そして、「今は今ってね」そう言い聞かせていたのだ。

自分自身が少しでも夏美の為にワカバの為にと思いあえて封印したその心。

だが、政宗達の再度の出現により其れも其れで虚しく終わった。

ライカは軽いため息をつき苦笑いをしタバコに火をつけて「・・・どうしてこうもうまく行かんもんかねエ？」と呟いていた。
やれやれ「・・・」。あいつはもう、人間じゃア」とも呟いた。

すると、背後から軽く舌打ちし「・・・あの野郎、やってくれたぜ」。「と悔しそうに呟いた。

ライカはその声を聞き冷や汗を一瞬かきながら恐る恐る背後を振り向いて「！！！！た、高杉様！！！！？」

其処には日本吸血鬼界の帝王高杉晋助の姿があった。
エンペラー

ライカは、再度心の中でオイオイ・・・何で高杉様が出てくるんだアアア！？しかもこんな時に！？

絶対ご機嫌悪いよ。。相棒オオ！！！と泣いていた。

第8夜。極殺小十郎VSセラス。そして・アーカードも加勢と同時
に夏美に迫ってしまった闇？完。

第8夜。極殺小十郎VSセラス。そして・・・アーカードも加勢と同時に夏美に泊

今章も無事に更新完了しました。

此処まで御付き合い下さいまして有難うございます（一礼）

其れではグタグタ予告をどうぞ。

ライカは苦笑い冷や汗をかきながら「・・・お、お疲れ様です。高杉様。」

高杉タバコに火を灯し「・・・よオ。ライカ。これは一体、どう言う事が

説明してくれるよなア、？」ニヤリと笑いながらライカに詰め寄った。

ハハハ・・・口元笑っているけど眼が笑っていない。。こう言う時の高杉様が正直厄介なんだな汗；；

ライカはただどしくても「え」と・・・・・・・・怒らないで聞いてくれます??」

高杉クククと笑い「内容によってはなア。おら・・・さっさと説明しろや。」

ライカタメ息をつき説明に入る。

第9夜。夏美吸血鬼化？と同時に現れる高杉そして説明を求められて追及されるライカ。

高杉「次章も宜しくなア？」

以上です。次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第9夜。夏美吸血鬼化？と同時に現れる高杉そして説明を求められて追及される

今章は主に高杉さんとライカが中心と成る予定です。

長丁場等予定です。

説明文は多分・・・あえてなくす予定ですのでご了承ください。

第9夜。夏美吸血鬼化？と同時に現れる高杉そして説明を求められて追及される

ライカは苦笑い冷や汗をかきながら「・・・お、お疲れ様です。高杉様。」

高杉タバコに火を灯し「・・・よオ。ライカ。これは一体、どう言う事が説明してくれるよなア？」ニヤリと笑いながらライカに詰め寄った。

ハハハ・・・口元笑っているけど眼が笑っていない。。。。こう言う時の高杉様が正直厄介なんだな汗；；

ライカはただどしくても「え」と・・・・・・・・怒らないで聞いてくれます??」

高杉クククと笑い「内容によつてはなア。おら・・・さっさと説明しろや。」

ライカタメ息をつき説明に入る。

そしてすべてを説明し終わった後「・・・と言う訳なんです。」

高杉はニヤリと笑い「ほオ。そうかい。」と続け様に「なら、あい

つは俺アより奴を取ったことになるなア??？」

ライカげ!?おつ、怒っているよ高杉様!!間違いないエエ!!

ど、どうする!?!どうするよ!?!あああ!?!頼むから夢であつてほしい!?!?!?!

と同時に、ライカの意識が途絶え目がふつと覚める。

気がつくと自分の部屋だった。

ライカはベットから起き上り「・・・『夢』か?????」そう言いベットから出てきてソファ―に座りタバコに火を灯し吸い始めた。

ライカは軽いため息を突き「・・・そういえば相棒も『夢』見たんだよな。だけど、あれだな・・・『嫌な夢なんだよな』。」

この夢が現実にならない事を私しやアは願うよ。

伊達様。片倉の兄様どうして・・・アイツをそつとしておいてやら
つてくれないのですか?????

相棒、お前さんは今はどう思っている????何を願っている??
??????

すると、背後から「不穏な気配」を感じた。

ライカは氷棒を握りしめて「・・・誰だい??」「そこにいるの
は?」「出てきな?????」

すると「フン・・・流石というべきか。死女ライカ・ネアン。勘が良
いな。」すると紫髪をし、全身黒ずくめのスーツを来た男が入っ
てきた。

ライカはその姿を見て驚き「あ、アンタは！？日本吸血鬼界の最強で凶悪‘死神’と呼ばれた石田三成！！！！！！」

クソ！！！何てこった！？どうして！？この男（石田三成）がここに
いるんだよ！？

伊達様方以上か、厄介もんだぞ？この男は。

すると「相棒オオオオ！！！！！！」と夏美の声がする。

三成はそれを聞いてニヤリと笑い。

ライカは「相棒オオオオ！！！！来るなあああ！！！！逃げて
くれ！！！！！！」

夏美は慌てて「何で!?!」

ライカはさいど慌てて「ここに石田三成が居るんだ!!!!!!」

夏美はそれを聞いて驚き「んな!?! 日本吸血鬼界の死神」が此処に居るだと!!!!?」

ライカは再度夏美に向かって「ああ!!! そうだ!!!! いるんだよ! ! 知らねえ間にな!!! 相棒! ‘あの方’ 呼んできてくれ!!! 大至急だ!!!!」

夏美はそれを聞きつなずき「All right!!! 呼んでくる! 待ってる!!!!」

ライカは不振に思った。

あれ？相棒の奴英語使えたっけ？

まア・・・いいや。ってまずはこいつを何とかしなければならねえ！
！！

どうする！？どうするよ！？そうつぶやきながら氷棒を握り直す。

三成はフツと笑「そう警戒するな。別に私は貴様とやり合に来たわけではないのだ。」

ライカはそれを聞いても相も変わらず警戒していた。

と同時に三成がライカに歩み寄ってくる。

そして、ライカは後ずさりをするが・・・ドンとぶつかった。

ライカ思わずしまったという顔をしてそこから離れようとした次の

瞬間三成に何時の間にか壁に手を置かれて逃げ場をなくされていた。

三成はニヤリと笑いライカの耳元で「・・・死神同士」仲良くしようではないか。」そう言った途端ライカの体が急に動かなくなった。

ライカ冷や汗をかきながら心の中で・・・

ヤバいぞ！この男！！すごくヤバいぞ！！何故か知らんが私の中で危険だと言う風に警戒音がして・・・。

ヤバい！兎に角ヤバい！！！！！！！！！！早く離れなきゃ！逃げなきゃ！！！！！！！！！！

と呟いていた。

第9夜。夏美吸血鬼化？と同時に現れる高杉そして説明を求められて追及される？ライカ。完。

第9夜。夏美吸血鬼化？と同時に現れる高杉そして説明を求められて追及される
無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回？？のグタグタ予告風です（笑）

アレから、ライカは日本吸血鬼界の最強凶悪死神と呼ばれている石
田三成と

対峙していてそして、逃げられない様に壁に追いやられていた。

クソ！仮にも‘死女’と呼ばれたこの私じゃアが恐怖を抱いている
だと！！

でも、この男なら‘侮れねエ！！’

すると、三成は行き成りライカの頬を撫でた。

ライカは驚いた表情をして三成を見つめていた。

と同時に三成がライカの首筋に顔を近づけた。

ライカは思いつきり抵抗しよう試みた・・・。

ライカ「第10夜。ライカに近寄る闇！？その名は石田三成。」

続け様に「次章もどうぞ宜しくな！」

グタグタで申し訳ないです汗以上です。

其れでは次章も今章同様に楽しんで頂けたら幸いです。

第10夜。ライカに近寄る闇！？その名は石田三成。（前書き）

ご無沙汰しておりますでしょうか。

今章は、あの・・・怖いお兄さん出てきます（笑；）

長文及び編集等可能性またあります。御了承を・・・。

第10夜。ライカに近寄る闇！？その名は石田三成。

アレから、ライカは日本吸血鬼界の最強凶悪死神と呼ばれている石田三成と

対峙していてそして、逃げられない様に壁に追いやられていた。

クソ！仮にも‘死女’と呼ばれたこの私じゃアが恐怖を抱いているだどー！！

でも、この男なら‘侮れねエー！！’

すると、三成は行き成りライカの頬を撫でた。

ライカは驚いた表情をして三成を見つめていた。

と同時に三成がライカの首筋に顔を近づけた。

ライカは思いつきり抵抗しよう試みた・・・。

三成はニヤリと笑いながらも‘・・・抵抗など無駄な事だ。’と続け様に‘大人しく私に喰われていればいい。’と再度耳元で呟いた。

ライカ顔しかめて‘・・・チクしょう！離せッ！！！！離せッ！

「！！離セツてんだアア！！！！」 無我夢中で体を出来る限り動かせようとしていた。

クソ！！！頼む！私じゃアの体動いてくれ！！！！！！頼む頼む！！！！！！！！！！頼む！！！！！！！！

そして三成はライカの血を吸おうとした次の瞬間「其処までよ？死神のお兄さん？此れ以上うちの管轄内で好き勝手されちゃあ困るのよね？」と三成の頭をカリーナ（対吸血鬼用拳銃）をつけ「此れ以上、その方に近づいてみな？引き金が引き銀の銃弾がお兄さんの頭貫通するよ？」

ライカその声を聞いて「沙代！！！！！」

風間沙代子。アーカードの新たな従僕。通称沙代。

沙代ライカを見てニコと笑い「遅くなつてごめんね？ライさん。今ね、主様やセラス先輩達が向かっているからもうちょイ辛抱ね？」

三成ククと笑い「……此れで私を封じ込めたつもりか？小娘？」

と同時に「沙代あぶねエ……離れる……」とライカの叫びと共に

三成の刀が沙代子を襲う。

沙代子はぎりぎりで何とかよけきれた……だが……
……。

沙代は激しい痛みに襲われた。

と同時に気がつくとも血だまりになっていた。

激しい痛みそしてたえずやまない「渴き」。

すると三成は刀についていた沙代子の血をなめとりニヤリと笑い「
・残念だったな。私の刀はごく普通の刀ではない。『銀で作られた
特殊な刀さ。』」と同時に沙代子を見つめ「あア、そうだ。もう一
つ教えといてやろう。私には、『銀の銃弾も。』『聖水』も。『ニ
ンクも十字架も』。そして『太陽も』。
聞かないのだ。他の吸血鬼は聞くだろうが……不思議な事に残念な
がら私にはそれが無いのだ。」

と同時に沙代子に刀を振り上げ「と言う訳だ。あの娘は私が頂く。
邪魔した報いだ受けるが良い。」そう言い下ろそうとした次の瞬間。

ガキイイイイイインと音がする。

「オイオイ……。うちの管轄内でもって、アーカード様のお気に入りの従僕の１人でもあり私しやアの相棒の１人になぁにしかしてくれているんだい？死神さんよ？」すると沙代子をかばうかの様に夏美が翡翠刀を取り出して受けていた。

ライカはそれを見て「相棒！！どうして来たんだよ！！！！お前さん・来るなっって言っただろう！？」

夏美フツと笑い「すまねえな。相棒。私しやアも正直来ちゃいけないと思ったんだが……。傷ついて、そして困っている相棒を差し置いて逃げるんじゃないやアな……。私しやアの性分に反するってもんよ！！」そう言いながら三成の刀を撃ち返し推した。

三成は夏美の姿を見てニヤリと笑い「待っていたぞ。橘夏美……。いや、炎龍！」

夏美はその名を呼ばれると顔しかめながら苦笑いを返し「まだ、その名を呼ぶ人がいたなんてな。」と続け様に「……。死神さんよ。断らせてもらうが、もう……。私しやアは‘炎龍’じゃなくて、ワカバ、ヘルシング日本支部の一員の橘夏美よ。」と続け様に「って、

すまないけど・・・貴方と私しゃ会った事会ったつけ？」と三成に聞く。

三成刀を夏美にもう一度振り下ろしながら再度ニヤリと笑い「・・・会った事あるさ」。約10数年前の

前代の炎龍の葬儀の所でな。その時もういないが水龍の奴と共にいたぞ？」

夏美は言われたように頭の中を回想させた。

夏美は思い出したかのように「・・・貴方は、花梨（水龍）の彼氏？（パートナー）。だった？」

三成再度ニヤリと笑い「その通り。後、お前が炎龍時代の活躍も知っているぞ？邪魔者を潔く排除して

闇の中に屍を築き上げ・・・止める！！！！」そして・・・その屍の中で「止めるッ！！！！！！！！」

堂々と・・・「止めるッ！！！！！！」生きているのをな！！！！「止めるって言っただろうがアアア！！！！」と翡翠刀を三成に向けきり刻んだ。三成はそれをぎりぎりでかわした。だが・・・。

三成の胸の所から血が滴れる。

三成其れを見て「ク、ククククハハハハハハハハハハ！」と行き成り笑いだした。

と同時に夏美は血の匂いを感じ取ってしまい思わず顔をそっちのけそして沙代子に輸血パックをストローで刺し出して「此れを飲んで早く此処から逃げる！そしてアーカード様方を・・・。」

沙代子はその様子を見て「・・・夏さん？」

夏美は「良いからいけ！！！！早く！！！！此処は危険だ！！！！」と沙代子の口に輸血パックを突っ込んで

急いで部屋を出させた。

と同時に夏美の額から冷や汗が一瞬出てきた。

昔、政宗の血と小十郎の血を少量だが受け入れてしまった夏美・・・。

夏美自身が成長にするにつれて、人間から、吸血鬼へと、変化している。

クソ！！こんな時に！！！！だが、まだだッ！！！！まだ、変化するわけにはいかねエ！！！！

「血を飲むわけにもいかねエ！！！！頼むからもってくれよ！！！！！！私じゃアの、人間の体、！！！！

・・認めたくはねえけど・・変わっているのは薄々、感じているからな・・。だが・・。まだだ！！！！

本当にまだ何だ！！！！私じゃアは、宿命を（サダメ）・・・。

一方、政宗達はワカバの空いている部屋でいつの間にか待機して夏美のそんな姿を透視していた。

政宗ワインを飲みながらニヤリと笑い「・・強情な奴だぜ。My little girlは。そんな事していても

「辛いだけだつつうのによ・・。」

小十郎は政宗を見て「しかし、まさか・・死神の石田三成が出てこようとは・・。」

政宗も小十郎の言葉に頷き「ああ、こいつはちいとしたsurpriseだな。」

と続け様に「だが、あいつは‘俺達のもんだ’。死神何ざアに渡しはしねエ。」とククと笑いながら

ワインを飲んだ。

小十郎も主を見てフツと笑っていた。

と同時に再度夏美を透視していた。其れも楽しそうに……………

一方、夏美は三成と相も変わらず対立していた。

夏美は息切れしていた。

三成は高笑いをした後夏美を見てニヤリと笑い「どうした？炎龍？
‘辛そうだぞ’？」

夏美は三成を睨みつけながらも「じゃあかしい！！！！！！単なる‘
寝不足じゃい’！」とニヤリと笑いながら言い返した。

三成其れを聞いて再度ニヤリと笑いながら夏美に歩みそして消えた。

夏美は驚き「何処だ!？」と慌てて三成の行方を捜す。

するとライカが「相棒!!!後ろだ!!!!!」

と叫び声がする。

夏美は慌てて後ろを向いたすると三成がいて思いっきり刀の鞘で殴り飛ばされた。

夏美は壁に激突し思わず其処でなだれ込んだ。

夏美壁から体を抱き起こし「・・・ツウ。クソ。頭くらくらする。」
と同時に頭に手をやる。

すると其処から血が出ている事に気がつく。

いつの間にか血が出てらァ。クソ・・・もう限界か?????????
????

と同時に三成が再度夏美の前に現れてククと笑い「どうした???もう
終わりか????」

夏美フツと笑いながら「慌てんじゃないよ。お楽しみはこれから
さ。」

三成はそれを見てニヤリと笑い「楽しませてくれよ?この私を。」

夏美再度フツと笑い三成を見て「・・・もちろんさ。」そう言いなが
ら翡翠刀を鞘に収めそしてもう一つの刀「雷月^{らいづき}」を取り出して「行
くぜ?此处からが、本番だ。」そう言いながら鞘を抜き

三成に向かって「唸れ!!（うなれ）雷神!!!!!!」そう言いな
がら雷を刀にまわせ三成に喰らわせた。

と同時に三成は壁にぶつかって行った。

一方、政宗達は相も変わらず夏美を見続けそして小十郎が夏美の持
っている刀に気づき「・・・あいつ、まだ持っていてくれたのか」

「あの刀を。」と嬉しそうに呟いていた。

と同時に政宗もそんな小十郎の姿を楽しそうに見ていた。

第10夜。ライカに近寄る闇！？その名は石田三成。完。

第10夜。ライカに近寄る闇！？その名は石田三成。（後書き）

今章も無事に更新完了いたしました。

其れではグタグタの予告をどうぞ（笑；）

アレからライカは三成に襲われた。と同時に夏美が助け出した。

其れは、三成と夏美の戦を意味していた。

互いに刃を交える三成と夏美だが、三成の圧倒的な力、そして、夏美自身の、人間としての *time limit* が近づいていて、押されていく。

と同時に翡翠刀をしまい雷月を取り出した夏美。

この刀は昔、小十郎からもらったものだ。其れを使うと言う事は夏美にとって、余裕がない事、と同じことを意味しているようなものだった。

ライカも其れを見て心の中で、*アレ*雷月取り出すつつ事は、アレだな夏美（相棒）の奴、余裕ねエか、

と同時に再度夏美の顔を見る。

ライカは驚いていた。冷や汗をかき続けていると。

夏美は自身を保とうと必死に意識をこらえている。

「もう、限界だろう」？ my little girl」？ -

政宗の声が夏美の中に響いていた。

第11夜。三成VS夏美そして夏美に迫る「人間の^{ヒト}time limit
it」？

次章もどうぞ宜しくお願い致します。

以上です。

第11夜。三成VS夏美そして夏美に迫る、人間（ヒト）のtimelimit

今章も残酷シーン等の長丁場等予定です。

ご了承の願いたします。

第11夜。三成VS夏美そして夏美に迫る、人間（ヒト）のtime limit

アレからライカは三成に襲われた。と同時に夏美が助け出した。

其れは、三成と夏美の戦を意味していた。

互いに刃を交える三成と夏美だが、三成の圧倒的な力、そして、夏美自身の、人間としてのtime limitが近づいていて、押されていく。

と同時に翡翠刀をしまい雷月を取り出した夏美。

この刀は昔、小十郎からもらったものだ。其れを使うと言う事は夏美にとって、余裕がない事、と同じことを意味しているようなものだった。

ライカも其れを見て心の中で、雷月取り出すつつ事は、アレだな夏美（相棒）の奴、余裕ねエか、

と同時に再度夏美の顔を見る。

ライカは驚いていた。冷や汗をかき続けていると。

夏美は自身を保とうと必死に意識をこらえている。

「もう、限界だろう、？ my little girl、？」

政宗の声が夏美の中に響いていた。

夏美は心の中で・・・。

止めて下さいよ！！まだお願いだから言わないで！！！！

このまま居させて・・・お願い。もう、このままでお願いさせて下さいよ。

其れと同時に小十郎の声も夏美の中でこだまする。

「政宗様の『おっしゃる通りだ』。認めちまえよ。もう『限界なんだろう』？」

「『堕ちちまえよ。辛いだけだぜ？あの時俺たちの血が少量入った事でお前エはもう・・・。』」

お願いだから言わないで！！！！此れ以上・・・お願い！片倉様！！！！
その様子を見た三成はククと笑いながら「『どうした？』『顔色が

悪いぞ??、」

そう言いながら再度刀を鞘から抜き出して夏美に斬りかかった。

夏美も応戦する。と共に再度「唸れ!!!!我が雷よ!!!ライリユウ雷龍!!!」

其れと共に夏美の放った雷の竜が一気に三成に襲いかかり三成を倒したと思われたが、いつの間にか夏美自身も左胸辺りに傷を負っていた。

三成は体を起こしつつも夏美を見てニヤリと笑い「・・・今回はこの辺で退いてやろう。」と続け様にライカをチラッと見て「だが、次こそはその小娘をいただく。」そう言い消えた。

夏美はそれを見て軽く舌打ちしこの場に膝を息切れしてついていた。

ライカは思わず夏美に「相棒!!!!」叫び駆け寄った。

ライカ夏美を起こす様に「大丈夫か!?!」

夏美はフツと笑いながら「あア、大丈夫だ。有難うな。」

ライカ顔しかめながら「・・・すまねえ。相棒。私しやア何も・・・」

夏美は再度笑いながら「気にするな？相棒？？？無事で何よりだ。」

とライカに向けて言った。

しかし、本来内心はあまり「本調子」ではなかった。

此れは言わねえ方が良いな。と呟きそしてライカに「疲れたろ？部屋で休みな？」

ライカは心配そうに「・・・一人で平気か？」

夏美は頷き「・・・すまねえ今はむしろ１人が良いんだ」。

ライカは何かを察知したのか頷き自分の部屋に戻って行った。

夏美は雷月を鞘に戻しソファーにまるでなだれ込むように寝込んだ。

此れは知られてはいけねエ！！！！

此れだけは・・・ッ！！！！！！

頼む！‘まだ持っててくれよ？人間の私ヒトじゃア！！’

其れとは裏腹に冷や汗が止まらず‘喉の渴き’が夏美自身を襲い続
けていた。

‘もう一人の自分が囁く。もう限界でしょ？我慢しないで‘血を飲
んじやいなよ’。と。

夏美はソファーから起きあがり偶然にも心配で待機していたライチ
ユウが何も言わず飲み物を差し出した。

夏美は軽くフツと笑いありがとよと眼で伝えライチュウは頷きその場からそつと去った。

と同時に夏美タバコに火を灯す。

クソ！！！！傷の血が止まらねエ！！！！

貧血状態になりつつあるな。

すると夏美は後ろから抱きしめられていた。

夏美は雷月を急いで取り出そうとしたが再度抱きしめられて「・・・夏美！俺だ！！」その懐かしい声を聞き「・・・晋助様」？」

日本吸血鬼界の帝王高杉晋助だった。

高杉はフツと笑い「よオ。久しいな？夏美。」夏美は雷月をしまい高杉に身をゆだねていた。

と同時にタバコを灰皿にもみ消していた。

高杉は夏美のそんな様子を見て「・・・苦しいか」??」

夏美はその事を聞いて驚いていた。

第11夜。三成VS夏美そして夏美に迫る、人間のtimelim
it?完。

第11夜。三成VS夏美そして夏美に迫る、人間（ヒト）のtimelimit

今章も無事に更新完了致しました。御付き合い下さいまして有難うございます。

其れではグタグタですが毎回？予告風をどうぞ。（笑）

夏美はアレからずっと高杉の腕の中にいた。

高杉から、‘苦しいか’？と尋ねられて夏美自身一瞬黙ったが、首を横に振った。

高杉を悲しませないように寧ろ、心配させないように只只夏美自身だまり

身をゆだね続けていた。

高杉はそんな夏美を見て只只抱きしめていた。

と同時に耳元で「・・・俺の所へ来いよ」。「また昔の様に」。

夏美自身はそれを聞いて嬉しい半面なんか悲しい気持ちになった。

自分の中にあるのは、政宗様達の血。晋助様の血じゃない。だけど、

ワカバの相棒達、晋助様と一緒にいたい自分がいる。

「ねえ？本当は限界でしょ？おいでよ？ね？」

夏美の頭の中では「もう一人の自分の声が交差する」。

冷静でいられなくなる。

高杉は夏美を見て「・・・奥州の双竜の血が入っているから俺に
対しての答えが見つからねエか？」

夏美はそれを聞いて驚いて高杉の顔を見た。

夏美の瞳には悲しそうな顔して苦笑いをしている高杉が映っていた。

夏美はそれを見て心がすごく痛んだ。

夏美「・・・違う！お願いそんな悲しい顔しないで！！！！！！私は、
貴方にそんな顔させるつもりはなかったのに・・・。」そう言いな
がら首に手をまわして高杉をいつの間にか抱きしめていて「・・・
此处にいるよ？」ちゃんと、「貴方の黒猫は此处にいるよ？」と
そして「だから、そんな顔しないで！お願いッ！！！！！！」

高杉の頭の中に嘗て愛した女の声が響く。

「晋助。大丈夫よ？私は此处にいるから」

「でも、もし私に何かあつたら私達の娘達をいえ・・・かなり心配なのは夏美の方だから夏美の方を特にお願いね？」

・・・楓。

あの頃のお前の言葉はこう言う事が出て来たからなのか？？

なア・・・楓。

だが、俺は、お前も愛したが今度はこいつ（夏美）を・・・。

そつ心の中で呟いた。

と同時に夏美を再度強く抱きしめた。

夏美はいつの間にか両目をつぶっていた。

そして高杉に身を寄せ続けていた。

だが、政宗はそれを「許さなかった。」

高杉さんよ。そいつは「俺達双竜」のものだぜ？OK？

そして小十郎を見て「・・・小十郎。」

小十郎は一礼をして「承知。」そう言い政宗の部屋を後にした。

向かうのはそう夏美の部屋。

第12夜。三成と対戦後の夏美の所に高杉現るそして・・・。

次章もどうぞ宜しくお願い致します。

以上です。

第12夜。三成と対戦後の夏美の所に高杉現るそして・・・。（前書き）

今章は主に高杉さんと夏美のやり取りです。

最後辺りに片倉さん達が出てくる可能性ありの長丁場等あり予定です。

御了承下さい。

第12夜。三成と対戦後の夏美の所に高杉現るそして・・・。

夏美はアレからずっと高杉の腕の中にいた。

高杉から、‘苦しいか’？と尋ねられて夏美自身一瞬黙ったが、首を横に振った。

高杉を悲しませないように寧ろ、心配させないように只只夏美自身だまり

身をゆだね続けていた。

高杉はそんな夏美を見て只只抱きしめていた。

と同時に耳元で「・・・俺の所へ来いよ。」「また昔の様に」。

夏美自身はそれを聞いて嬉しい半面なんか悲しい気持ちになった。

自分の中にあるのは、政宗様達の血。晋助様の血じゃない。だけど、ワカバの相棒達、晋助様と一緒にいたい自分がいる。

「ねえ？本当は限界でしょ？おいでよ？ね？」

夏美の頭の中では、もう一人の自分の声が交差する。

冷静でいられなくなる。

高杉は夏美を見て「・・・奥州の双竜の血が入っているから俺に
対しての答えが見つからねエか？」

夏美はそれを聞いて驚いて高杉の顔を見た。

夏美の瞳には悲しそうな顔して苦笑いをしている高杉が映っていた。

夏美はそれを見て心がすごく痛んだ。

夏美「・・・違う！お願いそんな悲しい顔しないで！！！！私は、
貴方にそんな顔させるつもりはなかったのに・・・。」そう言いな
がら首に手をまわして高杉をいつの間にか抱きしめていて「・・・
此処にいるよ？」ちゃんと、「貴方の黒猫は此処にいるよ？」と
そして「だから、そんな顔しないで！お願いッ！！！！」

高杉の頭の中に嘗て愛した女の声が響く。

「晋助。大丈夫よ？私は此処にいるから」

「でも、もし私に何かあったら私達の娘達をいえ・・・かなり心配な
のは夏美の方だから夏美の方を特にお願いね？」

・・・楓。

あの頃のお前の言葉はこう言う事が出て来たからなのか？？

なア・・・楓。

だが、俺は、お前も愛したが今度はこいつ（夏美）を・・・。

そう心の中で呟いた。

と同時に夏美を再度強く抱きしめた。

夏美はいつの間にか両目をつぶっていた。

そして高杉に身を寄せ続けていた。

だが、政宗はそれを、許さなかった。

高杉さんよ。そいつは、俺達双竜、のものだぜ？OK？

そして小十郎を見て「・・・小十郎。」

小十郎は一礼をして「承知。」そう言い政宗の部屋を後にした。

向かうのはそう夏美の部屋。

と同時に小十郎の前に何者かが立ちはがった。

小十郎はフツと笑い「・・・何のつもりだ？」ライカ？」

その姿はライカだった。ライカは苦笑いをしながらタバコに火を灯し「・・・野暮なことするつもり

はありませんが、せつかくの相棒の休み時間を邪魔されたくはないと思ひましてね。」

小十郎はそれを聞いてニヤリと笑い「・・・俺とやるつもりか？」

ライカは氷棒を取り出して「・・・例えそれが相棒が望む結果ではなくても・・・。」

「申し訳ありませんが、此処を通すわけにも行きませんかからね。」

其れと同時に行き成り夏美の叫び声が聞こえた。

ライカ驚いて「相棒ッ！！！！??」そう言い急いで夏美の部屋に向かった。

そして小十郎も後を追う。

そして「どうした！？相棒！？」と同時に「んな！？た、高杉様ッ！！??」

其処には夏美の腕の中で倒れ込んだ血まみれの高杉が居た。

と同時に一人の女がいた。

ライカはその女を見て「お前は！？ドラゴン龍！！！！」

相沢由紀子通称龍。闇の始末人。（ヘルシング第一弾のキャラですが、いまだ向こうには出ていません汗

ためしに此方に出してみたら向こうにも出す予定です。順番逆ですが汗）

由紀子の手には銀の銃弾が握り締めていた。

ライカ其れを見て「・・・ッ！！まさかてめエが高杉様を！！？」

由紀子フツと笑い「だったら？」

ライカは睨みつけながら夏美の所に行き「大丈夫か！？相棒・・・ッ！？」

するとライカの眼には何と冷や汗をかきつつも高杉を抱きしめて涙を流す高杉の名を連呼している姿だった。

と同時に「私の血あげるから！死なないでッ！晋助様アア！！」
と同時に「・・・もう嫌だよ。」此れ以上失うのは・・・。」

ライカはその事を聞いて言葉を失った。

と同時にその場にいた小十郎も言葉を失っていた。いや、言えなかったのかもしれない。

すると高杉の体が動いて「・・・相変わらず泣き虫は変わらねエア」。夏美。「と夏美の涙をぬぐいながら言った。

夏美自身は只黙って涙を流し続けていた。

・・・私しやアが？「涙」？もう、「涙何ぞアあの時枯れ果てた」と思っていた。

夏美は懷から小刀を取り出し右腕をめくり傷をつけて血を流して高杉の所に持って行き「飲んで！良いから飲んで！！！！晋助様！！お願い！！お願い！！」そう言い高杉に飲ませた。

その光景はまるで幼子が親に甘えているかのように・・・。

すると龍がフツと笑い「・・・炎龍も堕ちたものね。」とあざ笑うかのように言った。

と同時にガキイイイン！！と音がした。

小十郎はそれを見て「・・・ほオ。」と楽しそうに呟いた。

其処には氷棒を龍に振り落としたライカの姿だった。

ライカはギリと歯ぎしりをして「てめエに何が分かる！！」「あいつの何が分かる！！」「あいつはな

・・・あいつはな、別に好きで「炎龍に」なつたわけじゃねえんだぞ！！！！！！」

と続け様に「あいつのこと何もしらねエ野郎があいつの事をとやかく言われる筋合い何ざアねえんだよオ！！！」とさらに続けて「あいつ（相棒）を侮辱する奴はこの私しゃア、ライカ・ネアンが許さねえ！！！」

その顔はもうすっかり「死女」としての顔だった。

と同時にライカは氷棒を龍に向けながらそして斬りつけながら「あいつは、嘗て『広州とワカバの大戦』の時に末端だった頃自分をむごい捨て方をした姉貴分を・倒そうと思ひ参加した。だが、結果的には母親に庇われ尚且つ父親も其れで散り愛する恋人も失い・・・嘗ての相棒達をも護れなかった自分を

恨み憎しみそして強くなろうと必死で自分自身とも戦い・・・。」と夏美自身の過去を少しずつだが語り始めながら戦っていた。その事を只その場にいた小十郎は黙って聞いていた。いや、聞くしかなかった。

そしてライカはさらに続けて「・・・人前では甘えないようにと寂しさを隠して、出来る限り気丈に振る舞いそして・・・強くなろうと必死でいつの間にか、本来の自分自身を隠すようになってしまったんだ！」てめエに分かるか！？あいつの苦しみと悲しみがッ！？あの苦しみと悲しみを・・和らいで下さったのが、高杉様だったんだよ！！高杉様は楓さんとも恋人同士でもあった。だが・・楓さんの幸せを願高杉様はあえてご自身の身をひかれたんだよ！！！」

その事を聞いた小十郎は只おどろいていた。

んな？高杉と・・・楓が‘恋人同士’だった！？

一方、高杉は自分にすり寄る涙を流していた夏美を見て微笑んで夏美の腕から流れている血を飲み始めた。

夏美自身も相も変わらず高杉に血を与え続けていた。

高杉が復活する事を心から願って・・・。

第12夜。三成と対戦後の夏美の所に高杉現るそして・・・。完。

第12夜。三成と対戦後の夏美の所に高杉現るそして・・・。（後書き）

今章も御付き合いの程有難うございます。

其れではほぼ毎回？のグタグタ予告をどうぞ（笑）

アレから夏美は高杉に血を与え続けていた。

其れも涙を流しながら・・・まるで幼子の様に。

一方ライカは龍をなぎ倒して引かせていて相棒である夏美の所へと急いだ。

と同時にその場にいた小十郎は只その光景を見ている事しか出来なかった。

夏美「第13夜。龍VSライカのその後・・・高杉復活？」

「次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。此処まで読んで頂いて有難うございます。

次章もどうぞ宜しくお願い致します。

有難うございます。

第13夜。龍VSライカのその後・・・高杉復活？そして・・・ワカバのアジトを

此方では新年初の更新となります。

明けましておめでとございます。本年もどうぞ宜しくお願い致します。

其れでは相も変わらず長丁場の残酷シーン等あり予定ですが・・・

御付き合い頂ければと思います。

後、申し訳ないですが・・・SAMURAI DEEPER KY
Oの狂さんが吸血鬼設定で出て来る予定。（笑；）古本屋で立ち読みしててちよつと引かれたので

思わず出してみました。尚此方も予めお断り致しますが当方は実は原作持っておりません（笑；；；；）それ故に戦シーンとかで狂さん出す場合は

技名とかオリ入る可能性も大いにございます。その辺もご了承いただきたく思います（一礼）

第13夜。龍VSライカのその後・・・高杉復活？そして・・・ワカバのアジトをアレから夏美は高杉に血を与え続けていた。

其れも涙を流しながら・・・まるで幼子の様に。

一方ライカは龍をなぎ倒して引かせていて相棒である夏美の所へと急いだ。

と同時にその場にいた小十郎は只その光景を見ている事しか出来なかった。

ライカは夏美の肩を軽くポンと叩き「・・・相棒。」

夏美自身もその声でライカが来たと分かり振り向き「・・・相棒。あの女は？」

ライカフツと笑い「大丈夫だ。安心しな？追っ払ったからさ。」

夏美其れを聞いて「・・・すまねえ。礼を言う。」

と同時にライカを見て「・・・すまねえ。相棒今は晋助様と2人だけにしてほしい。」

ライカタバコに火を灯し頷きながら「了解した。」そう言い部屋を出る。

小十郎もいったん引いた方がいいと思いその場を後にした。

そして、高杉がフと眼を開け夏美を見て「・・・よオ。夏美イ。」と声をかけた。

夏美は微笑んで「・・・良かった。晋助様。目が覚めたんだね？本当に良かった。」そう言い抱きしめた。

高杉も其れを見て体をゆっくり起こしつつ夏美を抱き返して「・・・ありがとうよ。今回は世話になったな。」

夏美は只首を横に振り続けていた。

そして高杉の胸の中で「・・・無事でよかった。」、「本当に・・・本当に。」

そう、其れはまるで幼子の様にたずさっていた。

ワカバのみんな（相棒達）に滅多に見せない弱気な部分。

其れは、昔今は亡き父と母とそして恋人の個人的な誓いそして約束だったからだ。

だから、決して「弱さ」を見せてはいけない。そうアレから自身に誓った。それも今も生き続けている。

高杉は夏美の頭を撫で続けて「・・・」そんないつぱいに詰まらせてはよ。「後がもたねエゼ？」夏美。「

夏美はそれを聞いて只只黙ってすがりついているだけだった。

高杉は其れを見てフツと笑いながら夏美を再度抱きしめていた。

頼むからよ。闇の俺が・・天に願う何ざアチイとアレかも知れねエが、夏美とその仲間たちに一刻も早く平穩をよ。やってくれよ。

なア・・天さんよオ。頼むぜ？

一方、此处は政宗の部屋。

政宗は相も変わらずワインを飲み続けながら先程の小十郎の報告を聞いていた。

政宗「なるほどねエ。高杉の奴が夏美の血で復活したか。」

小十郎頷き「ハ！で？いかがなさいます？？政宗様？」

政宗顎に指を添えて考えながら「・・・一度狙ったものは逃がしたくねえしなア。」と続け様に「あの、石田と同じ死神の鬼と呼ばれ

ている奴も動いている見てエしなア。」

小十郎其れを聞いて「・・・鬼眼の狂'ですか。」

政宗はそれを聞いて頷きながらニヤリと笑い「That's right!だが、鬼じゃ・・・竜は喰えねえよ。」

そして、心の中で。

Hey my little girl。俺たちが此処で退くと思うなよ？必ず'墮としてやるぜ'？You see？

小十郎は楽しそうな主をみてフツと笑っていた。

一方、ワカバのアジト周辺の近くのビルがあり、その屋上でワカバのアジトを見下ろす男がいた。

深紅の眼そして黒の短髪に黒のT・シャツに黒のスーツそして片腕には陰陽の刺青で手には村正が握り締めていた。

男はニヤリと笑い「・・・此処にいんだなア？」橋の小娘と。そ

して・・・‘沙代子’がなア。」

と楽しそうに呟いた。

そうこの男こそ、吸血鬼界の死神石田三成とほぼ同格いや・・・力は恐らく上と言った方がよさそうかと

思うが死神の鬼の‘鬼眼の狂’だ。実はアーカードと出会う前の沙代子はある日狂に拾われ側においていたのだ。

狂タバコに火を灯し「・・・今はヘルシングの狗つころの従僕らしいが、んなの俺には関係ねえ、必ず連れ戻してやんぜえ？沙代子。元々は俺のものだったんだからよオ。」と高笑いをしながら言った。

その光景をメグナが見ていた。

メグナは心の中で・・・。

ちょ！何で狂の旦那さんがいるのさ！？うちら（ワカバとヘルシング）に情報入っていないのに！？

こりゃア大変だ！急いでオウガの旦那さん達に知らせなきゃ。

すると、メグナの気配を感じたのか狂がちらりとメグナの方に向きニヤリと笑った。

メグナは驚いて急いでその場を後にしワカバに戻った。

メグナの気配が消えたのを確認した後狂は再度ニヤリと笑い「・・・橘の小娘のクノー」か。」

と楽しそうにまた呟いた。

第13夜。龍VSライカのその後・・・高杉復活？そして・・・ワカバのアジトを見る鬼眼の狂 完。

第13夜。龍VSライカのその後・・・高杉復活？そして・・・ワカバのアジトを

今章も無事に更新完了致しました。

此処まで読んで頂きありがとうございます。

其れではほぼ毎回？ですがグタグタ予告をどうぞ（笑）

アレから見回りをしてワカバのアジトに戻って来たメグナそしてオウガに

報告をすませた。

オウガ驚きながら「・・・ん？だと？」「鬼眼の狂が、此処に！？其れは本当なんだな！？メグナ？」

メグナ膝をつきながら「残念ながら、「本当」だよ。オウガの旦那さん。」

オウガ其れを聞いて顔しぶりながら椅子に座りこんで「・・・あの男が来たら間違いなく夏美そして沙代子の奴に「会いに来る」。」

闇が死神の鬼までも「此処に誘った」か。

するといつの間にかオウガの部屋にいたインテグラが「・・・死神の鬼が何故

沙代子を？」

オウガは軽いため息をつき「・・・あいつには悪いんだが一応経歴を調べさせてもらった。そうしたら・・・鬼眼の狂と一時共に過ごした経緯が見つかったんだ。」

インテグラ其れを聞き驚き「何だと？其れ本当か！？オウガ？」

オウガは頷き「そうだ。」と同時に「あの男も夏美の幼少時代そして炎龍時代の事も知っている。だから目エ付けられたんだろ？な。炎龍時代に一時刃を交えそして一時ではあるが、^{パートナー}相棒」として共に歩んだこともある。」

メグナ軽くため息をつき「・・・見た感じだとどうやら、手放すつもりは毛頭ないみたいで・・・。」

オウガ険しい顔で事前に用意していたコーヒーを飲み「・・・そうか。」

と同時に「メグナ。此れをちよいと夏美にも報告してきてくれ。」

メグナ頷きそして一礼して一瞬にて消えた。

オウガはそれを見た後軽いため息をついていた。

一方、夏美は高杉を見送った後メグナの報告を聞き「・・・狂さんが？此処に？？？」と驚いていた。

そして沙代子はたまたまオウガの部屋の前でオウガ達のやり取りを聞き此方も此方で驚いていた。

うそ・狂様が！？何で！？貴方は私を・・ほっておいたんじゃないの？？と呟いていた。

と同時に密かに刻み込まれていた片腕の陰陽の刺青と肩に刻み込まれた朱雀の刺青にそつと手をやり「・・狂様。」と呟いていた。

そしてその場を静かに去り自分の部屋へと戻って行った。

そして脳裏には・・。

「今から会いに行つてやるぜ？」沙代子

と狂の声がした。

其れも楽しそうに・・・。

アーカードはそれを見ていてククと笑い「死神の鬼が来るか。だが、あいつの今の主はこの私だ。」返すつもりなど毛頭ないがな・・。
「とワインを飲んで楽しそうに言った。

そして、その側にいたセラスもフツと笑いながらアーカードの膝にそつと寄り添った。

此処は再度夏美の部屋。夏美はアレからメグナを下がらせて頭を抱えながら

ソファアーに座つてそしていつものようにタバコに火を灯そうとした次の瞬間・・・ドクン！！と急に心音が鳴り響いた。

夏美の額に冷や汗が出てきた。

「・・・ッ!!」

こいつは！？異様に喉が渇く冷静でいられなくなる。

まさか！？そして・・・密かに隠してあつた錠剤を事前に用意してあつた水に溶かし一気に飲み始めた。

夏美は息きらしながらもタバコに火を灯しながら「・・・まさか。此れに頼らざる追えないなんて・・・。」

もしかして？私しゃア‘人間’^{ヒト}じゃなくなるのか???

一方、此处は沙代子の部屋。

沙代子は輸血パックを飲んでいた。

と同時に後ろからいきなり抱きつかれそうになり

沙代子は驚きながらも其れを交わし「・・・誰!？」と警戒を強める。

するとクククと笑い声がして「・・・ひでエな。昔はあんなにかわいがってやっていたのによオ。」その声を聞き沙代子は驚きながら「・・・きよ、

狂様!？」

眼の前には何と鬼眼の狂がいた。

沙代子は嬉しい半面複雑さ半面だった。

第14夜。メグナのオウガ達への鬼眼の狂の報告を偶然聞いてしまった沙代子そして・・メグナの報告後の夏美、鬼眼の狂沙代子の前に現る。

次章もどうぞよろしくお願い致します。

以上です。有難うございます。

第14夜。メグナのオウガ達への鬼眼の狂の報告を偶然聞いてしまった沙代子。今章もご覧いただきありがとうございます。

前章の続きの様なものを書かせて頂きたいと思います。

此方も長丁場の編集可能性ひょっとしたら残酷シーン等あり予定です。

其れではお楽しみください。

第14夜。メグナのオウガ達への鬼眼の狂の報告を偶然聞いてしまった沙代子

アレから見回りをしてワカバのアジトに戻って来たメグナそしてオウガに

報告をすませた。

オウガ驚きながら「・・・ん？だと？『鬼眼の狂が』此処に！？其れは本当なんだな！？メグナ？」

メグナ膝をつきながら「残念ながら、『本当』だよ。オウガの旦那さん。」

オウガ其れを聞いて顔しぶりながら椅子に座りこんで「・・・あの男が来たら間違いなく夏美そして沙代子の奴に『会いに来る』。」

闇が死神の鬼までも「此処に誘った」か。

するといつの間にかオウガの部屋にいたインテグラが「・・・死神の鬼が何故

沙代子を？」

オウガは軽いため息をつき「・・・あいつには悪いんだが一応経歴を調べさせてもらった。そうしたら・・・鬼眼の狂と一時共に過ごした経緯が見つかったんだ。」

インテグラ其れを聞き驚き「何だと？其れ本当か！？オウガ？」

オウガは頷き「そうだ。」と同時に「あの男も夏美の幼少時代そして炎龍時代の事も知っている。だから目エ付けられたんだろうな。炎龍時代に一時刃を交えそして一時ではあるが、^{パートナー}相棒」として共に歩んだこともある。」

メグナ軽くため息をつき「・・・見た感じだとどうやら、手放すつもりは毛頭ないみたいで・・・。」

オウガ険しい顔で事前に用意していたコーヒーを飲み「・・・そうか。」

と同時に「メグナ。此れをちよいと夏美にも報告してきてくれ。」

メグナ頷きそして一礼して一瞬にて消えた。

オウガはそれを見た後軽くため息をついていた。

一方、夏美は高杉を見送った後メグナの報告を聞き「・・・狂さんが？此処に？？？」と驚いていた。

そして沙代子はたまたまオウガの部屋の前でオウガ達のやり取りを聞き此方も此方で驚いていた。

うそ・・・狂様が！？何で！？貴方は私を・・・ほっておいたんじゃないの？？と呟いていた。

と同時に密かに刻み込まれていた片腕の陰陽の刺青と肩に刻み込まれた朱雀の刺青にそつと手をやり「・・・狂様。」と呟いていた。

そしてその場を静かに去り自分の部屋へと戻って行った。

そして脳裏には・・・。

「今から会いに行つてやるぜ？」沙代子

と狂の聲がした。

其れも楽しそうに・・・。

アーカードはそれを見ていてククと笑い「死神の鬼が来るか。だが、あいつの今の主はこの私だ。」返すつもりなど毛頭ないがな・・・。
「とワインを飲んで楽しそうに言った。

そして、その側にいたセラスもフツと笑いながらアーカードの膝にそつと寄り添った。

此処は再度夏美の部屋。夏美はアレからメグナを下がらせて頭を抱えながら

ソファアーに座つてそしていつものようにタバコに火を灯そうとした次の瞬間・・・ドクン！！と急に心音が鳴り響いた。

夏美の額に冷や汗が出てきた。

「・・・ッ!!」

こいつは！？異様に喉が渴く冷静でいられなくなる。

まさか！？そして・・・密かに隠してあつた錠剤を事前に用意して

あつた水に溶かし一気に飲み始めた。

夏美は息きらしながらもタバコに火を灯しながら「・・・まさか。此れに頼らざる追えないなんて・・・」。

もしかして？私しやア‘人間’^{ヒト}じゃなくなるのか???

一方、此処は沙代子の部屋。

沙代子は輸血パックを飲んでいた。

と同時に後ろからいきなり抱きつかれそうになり

沙代子は驚きながらも其れを交わし「・・・誰!？」と警戒を強める。

するとクククと笑い声がして「・・・ひでエな。昔はあんなにかわいがってやっていたのによオ」。

その声を聞き沙代子は驚きながら「・・・きよ、狂様!？」

眼の前には何と鬼眼の狂がいた。

沙代子は嬉しい半面複雑さ半面だった。

何故??嬉しいのに・・・でも、こんなにも苦しいんだろう???

狂様と共に居たい自分だけど．．今の主様と別れたくない自分がいる。

どうしよう？？？？？？？？

すると狂が歩き出し沙代子の所へと向かい頬を撫で始めた。

其れも愛おしそうに．．．．．。

沙代子はそれを見て思わず昔の様に懐いていた。

狂はそれを見てククと笑い満足そうに沙代子を抱き寄せて自分の首をさらしだし「ほらよ．．飲めよ。

俺は知っているんだぜ？？お前が女吸血鬼ドラキュリーナになった事をよ。」

沙代子はそれを聞いて驚いていた。何で知っているのと。

その沙代子の心とは裏腹に狂はククと再度笑い「たくひでエ事してくれるぜ。お前には‘俺という存在が居ながら’、他の奴の所に行っちゃうもんなあ’。「そう言い自分の首筋から血を流し沙代子の前に見せた。と同時に沙代子の深紅の眼の色がさらに濃くなった。

其れを確認した狂はニヤリと笑い「ほら、来いや。」そう言い沙代子を誘う。

と同時に沙代子是我慢できなかったのか思わず狂の血を飲み始めた。

狂はそれを見て満足そうに沙代子の頭を撫でていた。

一方、夏美はと言うと火炎風拳の透視術で沙代子の事が心配になって部屋をのぞいていた。

・・・オイオイ。狂さんが来ちゃっているよ。しかし・・・こりゃアレだねアーカードさんの耳に入ったらまずヤベェんじゃないの？???と苦笑い。

すると狂は夏美が透視しているのに気がついたのかチラと夏美の方を見てニヤリと笑った。

夏美は驚いて思わず其処で透視をやめてしまった。

夏美はいつものようにタバコに火を灯し「・・・ハハ。まさかな。勘付かれたか。」

すると1つの刀を見て「・・・ひょっとしたら、こいつの出番」と、炎龍時代とは別にもう一人の私しやア、が呼び覚ますかも知れねエな。」

その刀は黒に月が出ていた。名を「黒月」この刀は闇の始末世界の女王として君臨していた

と言われる「黒煉」と呼ばれた周崎渚と言う女のものだった。

もちろん夏美も炎龍時代からの知り合いで彼女の事を知っている。

が・・・アレから何故か理由は知らんが消息を絶っていた。

因みに彼女の眼は漆黒の黒の色。だ。

すると夏美は鏡を見て「・・・!!」私の眼がいつも以上に漆黒になつてら。まさかな・・・?」

いや・あり得るか?????????

と心の中で呟いていた。

黒煉の奴が、ひよっとしたら私しゃアの中に?、

吸血鬼化の発作と言い・・・二重・・・いや三重化?

‘どうなってんだ?今の私しゃアの体は、?と苦笑いをして呟いていた。

すると、一瞬まがましい気配が夏美の部屋を支配した。

夏美はタバコを急いで灰皿に消し翡翠刀に手をやった。

するとククと笑いながら「よオ。橘の小娘。久しいじゃねエか。
会いたかったぜ、?」

夏美はあちゃあと言う顔をして翡翠刀を構えて「……やはり来ていたのですね？狂さん？」

狂はそれを聞いてニヤリと笑った。

其れと同時に「沙代はどうしたんです？アレから？？」

狂はタバコに火を灯しながら再度ニヤリと笑い「あいつは俺の血与えた後部屋で眠っているぜ？」余程疲れた見てエだな。すやすや眠ってやがる。」

夏美は翡翠刀を構えつつも「……では、あいつは無事なんですね？」

狂再度ニヤリと笑いながら「あア。無事だ。」と同時に夏美を見て「あ・・そーいやアお前エ、体の方は大丈夫なのか？」何か色々立て込んでいる見てエ、だが？」と意味深に言った。

夏美はそれを聞き「・・・フツ。」「ご心配なく何も……………」と

言いかけた次の瞬間再度ドックン！！ドックン！！！！ドックン！！！！と心音が夏美を襲い冷や汗がかき始めた。

そしてその場に膝をついてしまい己の体を支えた。

狂はそれを見てニヤリと笑いながら夏美を見下してみていた。

第14夜。メグナのオウガ達への鬼眼の狂の報告を偶然聞いてしまった沙代子そして・メグナの報告後の夏美、鬼眼の狂沙代子の前に現る。完。

第14夜。メグナのオウガ達への鬼眼の狂の報告を偶然聞いてしまった沙代子

今章も御付き合い下さいまして有難うございます。

無事に更新できました。

それではほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ（笑）

・・・ッ！！「まただ！！まただ！！！！また体が叫んで・・・」
ッ！！

どうするよ????????

すると狂は夏美の前にしゃがみこんで「なア・・・橘の小娘。お前
エも薄々気が付いているんじゃないのか??」

夏美は狂をまるで睨みつけるように「・・・何をです????」

狂はニヤリと笑い「・・・人間^{ヒト}としての限界を。」と夏美を見て
言った。

其れと同時に黒月を見て「序に言う」とアレの本来の持ち主も知ら
ぬ間にお前に宿ってんじゃないか?」

夏美はフツと笑い「・・・まさか。だけど、私は・・・。」とたちな
がら後狂も其れに続きたった。

夏美は狂を見て「・・・私は私です。」それ以外も以下もありませ

ん。」

と言った。

狂はそれを見てクククと笑いながら「お前はお前か・・・」。「そして思いっきり高笑いをして」「俺を軽くだましていたと思ったか？」「俺は薄々感づいているんだよ。奴もお前の中に宿っているってエのがな。漆黒の瞳の色がかなり黒ずんでいるのがその証拠よ。」と同時に狂は後ろを振り向き「さてと・・・沙代子を「俺から奪った奴ら」を始末してこようかね。」と楽しそうに呟いたと同時に・・・

仲間がやられる！！！！相棒達がやられる！！！！

そんなことはさせない！！！！やられる前に・・・私が護らなきゃ。

そしてー黒月を取れよ。そうしたら私も手伝ってやるぜ？ -

ー私の愛しき紅の竜よ。私の・・・大事な相棒よ。 -

んな？？？何故あいつの声が私の中に・・・・。そう呟きながらも急いで夏美は黒月を取った。

と同時に夏美の周りに黒風が舞いそして包み込んだ。

狂はそれを感じてさらにニヤリと笑みを濃くして「来やがったか
、」

すると「・・・よー鬼眼の狂の兄さんよ。久しいじゃねエか。まさか・・・此処で会えるとは思ってもみなかったよ。其れに・・・この「橘夏美（仮ものの体）」の姿でさ・・・。」と漆黒の瞳をさらに

黒ずんだ夏美がその風の中から出てきた。

狂はそれを見て高笑いし、「あいつにも会えるのが楽しみだったんだが・・・お前エにも会えるのも俺はとても楽しみだったんだぜ？」
「ようやくお出ましか？黒煉！」

闇の始末世界の女王事黒煉が夏美の姿で現れた。

一方、ライカは部屋で黒煉の気配を感じたのか苦笑いをしてタバコを吸いながら「ハハハ・・・出てきちゃったか。黒煉の姉さん。」と呟いていた。

第15夜。沙代子の前に現れた狂がいつの間にか夏美の前に現れ・・・
そして

夏美の中の「もう一人の人格が目覚める？」

以上です。

今章も御付き合いました。誠にありがとうございました。

次章もどうぞ宜しくお願い致します。

第15夜。沙代子の前に現れた狂がいつの間にか夏美の前に現れ・・・そして、夏

今章も御付き合い下さいまして有難うございます。

今章は夏美がチィと多重人格？になる予定です。ハイ・・・（笑；）

狂さんの漫画見てて1つ多重人格者？を作ろうかな？と思わず思っ
てしまったわけです。

設定は似た様な設定です→ごめんなさい汗。

此方も長丁場そして残酷シーン等あり予定ですのでご了承ください
ます様お願い致します。

後一応みづちが出てきますがその前のセリフが多分間違っている可
能性もございます。その辺もご了承ください。

・・・原作買つか（笑；）お金出来たら・・・古本屋で。

第15夜。沙代子の前に現れた狂がいつの間にか夏美の前に現れ・・・そして、夏

・・・ッ！！「まただ！！まただ！！！！また体が叫んで・・・」
ッ！！

どうするよ????????

すると狂は夏美の前にしゃがみこんで「なア・・・橘の小娘。お前
エも薄々気が付いているんじゃないか?」

夏美は狂をまるで睨みつけるように「・・・何をです????」

狂はニヤリと笑い「・・・人間^{ヒト}としての限界を。」と夏美を見て
言った。

其れと同時に黒月を見て「序に言つと」アレの本来の持ち主も知ら
ぬ間にお前に宿つてんじゃないか?」

夏美はフツと笑い「・・・まさか。だけど、私は・・・」とたちな
がら後狂も其れに続きたつた。

夏美は狂を見て「・・・私は私です。」それ以外も以下もありません。
」

と言つた。

狂はそれを見てクククと笑いながら「お前はお前か・・・」
「そして思いつきり高笑いをして」「俺を軽くだましていたと思つたか

？　俺は薄々感づいているんだよ。奴もお前の中に宿っているってエのがな。漆黒の瞳の色がかなり黒ずんでいるのがその証拠よ。」と同時に狂は後ろを振り向き「さてと・・沙代子を俺から奪った奴ら」を始末してこようかね。」と楽しそうに呟いたと同時に・・仲間がやられる！！相棒達がやられる！！！

そんなことはさせない！！やられる前に・・私が護らなきゃ。

そしてー黒月を取れよ。そうしたら私も手伝ってやるぜ？・

ー私の愛しき紅の竜よ。私の・・大事な相棒よ。・

んな？？？何故あいつの声が私の中に・・・。そう呟きながらも急いで夏美は黒月を取った。

と同時に夏美の周りに黒風が舞いそして包み込んだ。

狂はそれを感じてさらにニヤリと笑みを濃くして「来やがったか
、」

すると「・・よオー鬼眼の狂の兄さんよオ。久しいじゃねエか。まさか・・此処で会えるとは思ってもみなかったよ。其れに・・この橘夏美（仮もんの体）」の姿でさ・・。」と漆黒の瞳をさらに黒ずんだ夏美がその風の中から出てきた。

狂はそれを見て高笑いし「あいつにも会えるのが楽しみだったんだが・・お前エにも会えるのも俺はとても楽しみだったんだぜ？」
ようやくお出ましか？黒煉！」

闇の始末世界の女王事黒煉が夏美の姿で現れた。

一方、ライカは部屋で黒煉の気配を感じたのか苦笑いをしてタバコを吸いながら「ハハハ・・・出てきちゃったか。黒煉の姉さん。」と呟いていた。

インテグラも何かを感じていたのか「・・・此れは一体、？」

オウガも感じてそして軽いため息をつき苦笑いをしながら「・・・出てきたか、黒煉、」と呟いた。

するとライカもオウガの部屋に入り「・・・兄様。にいさま」

オウガコーヒーを飲みながらライカに「どうやら、お前も勘づいたみたいだな。あいつが・・・来た事を。」

オウガの言葉にライカは只頷いた。

と同時に、心の中で頼むから黒煉の姉さんよ。相棒の体を傷つけてくれるなや。

ちゃんとちゃんとさ・・・・・・・・・・・・・・・・

・・。

ね？頼むよ？姉さん？

一方、アーカードは自分の部屋で狂と夏美（黒煉）が対峙している所を見てニヤリと興味を持ちながら笑い「ほう。今のあいつはあいつではないな．．．。」

何かが宿っているな。違う人物が．．．。

一方、インテグラはオウガを見て「オウガ。そして、ライカ。此れは一体、？」

オウガ軽くため息をつき「インテグラ。落ち着いて聞いてくれ。今の夏美は夏美ではないし、炎龍でもない。」

インテグラは再度葉巻に火を灯し「どう言う事だ？？オウガ。」

オウガは顔しかめながらも「．．．今のあいつは黒煉の奴、に体が行ってしまっているんだ。」

インテグラはそれを聞いて「オイ・・・まさか。」

ライカも頷き「その、まさかですよ」。インテグラ局長様。闇の始末屋世界の女王と呼ばれた女ですよ。

本名周崎渚。闇の世界で知らない者は恐らくいないでしょう。原因は今はまだ分からずじまいですが、何らかの影響で相棒の体に入り込んだのは間違いないでしょう。」とインテグラを見て言った。

インテグラはそれを聞いて只黙るしかなかった。いや・・・この方が正しいのかもしれない。

「言葉が見つからなかったと。」

一方、此処は再び夏美の部屋。夏美の体で狂と対峙していた黒煉は狂の言葉を聞いてニヤリと笑い「いやはや・・・そうやってもらえる嬉しいねエ。実は、私もさ鬼眼の狂の兄さん。またアンタとこうして会える事を楽しみにしていたんだよ。只・・・今は彼女の体での再会つつ事になってしまったんだがね。」

狂は黒煉を見て「で？お前エの‘体（本体）’はどうしたよ？？」

黒煉はフツと笑い「其れが行方知らず・・・誰かさんに封印されたのは間違いねえだろうな。おっと！

勘違いするなよ？この嬢ちゃんじゃないよ？？別の奴だと思つが・・・」と続け様に「どうするかい？

‘やるのかい’？」と狂に聞いた。

狂はその事を聞いてニヤリと笑い村正を鞘から抜き「あア・・・せつかくだ。‘やりあおうぜ’。」

黒煉は再度フツと笑い「やっぱね。そうなるかい。致し方ねえな。」
そう言いながら心の中で・・・

すまないねエ。相棒。（夏美）もしかしたらアンタの体傷つくかも知れねエ・・・その辺は許してくれ。

と謝りながら愛刀である黒月を鞘から抜き取り狂に向けて「・・・さてと、じゃ軽く気楽に行きますか。」

そして狂VS黒煉の戦いが始まった。

一方、政宗達はその光景を楽しそうに部屋で見っていた。

第15夜。沙代子の前に現れた狂がいつの間にか夏美の前に現れ．．
そして、夏美のもう一つの人格黒煉が目覚める、？完。

第15夜。沙代子の前に現れた狂がいつの間にか夏美の前に現れ・・・そして、夏

今章も無事に更新完了致しました。

此処まで読んで頂きありがとうございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

政宗口笛を吹き「」まさかなアこんな'surprise'があるとはな驚きだぜ。」

小十郎もフツと笑い「本当ですね。まさか、闇の始末屋界の女王が、出るとはしかも夏美の体の中にいたとは・・・。」

と同時に「、楽しませてくれよ？黒煉？」と呟いていた。

一方、天井裏で見ていたメグナは頭を手で抱え「あちゃア・・・始まったみたいだねエ。まさか黒煉の姉さんも出てくるなんてなア。やれやれ・・・参っちゃったねエ。」と呟きつつも「さてと・・・此処はひとまず様子見かね。」と天井裏から見る。

そして、夏美の部屋では狂VS黒煉の戦いが始まっていた。

狂と黒煉の互いの刃が混じる。

狂ニヤリと笑いながら「昔の様に俺を楽しませてくれよ。」黒煉。
「そして力では狂の方が上で思わず押されていた。」

黒煉軽く舌打ちし心の中で・・・。

やっぱ借りもんは動きずらいか・・・。

すると・・・。

― 黒煉。
-

夏美の声が黒煉の中に響き渡る。

そして・・・。

― ‘今の私しゃアの体はお前さんが握っているんだ。’ 好きなように使ってくれ。
-

その事を聞いた黒煉は驚きつつも

― 其れじゃあ万が一の時に何かあったらお前さんが仕事の時に支障あるだろうよ？
-

― かまわねエよ。寧ろ本気出さないと狂さんは満足しないかも知れねエから

さ。だから・・・好きに使ってくれ。相棒。
-

その声を聞いて黒煉は何か吹っ切れたようにフツと笑い

― ‘ありがとうよ。’ じゃ御言葉に甘えさせてもらつよ。
-

すると狂がニヤリと笑い「どうしたア？黒煉？もつと俺を楽しませてくれよ。なア・・・。」

すると黒煉の周りに風が舞いそしてニヤリと笑い漆黒の瞳をさらに漆黒にさせて「良いぜエ？御望みの通り楽しませてやるよ。鬼眼の狂の兄さん。」

只・・・後悔しないですよ？」と続け様に「黒煉の『本気^{マジ}』を見せてやるよ！」と黒月を構えて「・・・闇の始末屋世界の女王と言われる力をな。黒煉・・・いざ参る！」そして黒月を前に構え直して「・・・

・黒月流神派

」とそして「黒烏^{くろからす}！！！！」と技を放った。

と同時に狂も「無明神風流殺人剣！みづち！！！」と技を放った。

そして2人の周りに風が舞った。

果たして2人は??????

第16夜。狂の前に現れた闇の始末屋世界の女王と呼ばれた黒煉。そして・・・。

以上です。此処まで読んで頂きありがとうございます。

次章もどうぞ宜しくお願い致します。

第16夜。狂の前に現れた闇の始末屋世界の女王と呼ばれた黒煉。そして・・・

今章は前章の似た様な事を書かせて頂く予定です。

尚サブタイトルを少々変えてみました。

長丁場の残酷シーン等あり予定です。相も変わらず・・・その辺もご了承ください

また狂さんの技名もひょっとしたら間違えているかもです。ハイ・・・。

後うちの風魔さんはしゃべります！（笑・）ので原作バサラとは異なりますがその辺もご理解とご了承のほどよろしくお願い致します。

第16夜。狂の前に現れた闇の始末屋世界の女王と呼ばれた黒煉。そして・・・

政宗口笛を吹き「♪まさかなアこんな'surprise'があるとはな驚きだぜ。」

小十郎もフツと笑い「本当ですね。まさか、闇の始末屋界の女王が、出るとはしかも夏美の体の中にいたとは・・・。」

と同時に「楽しませてくれよ？黒煉？」と呟いていた。

一方、天井裏で見ていたメグナは頭を手で抱え「あちゃア・・・始まったみたいだねエ。まさか黒煉の姉さんも出てくるなんてなア。やれやれ・・・参っちゃったねエ。」と呟きつつも「さてと・・・此处はひとまず様子見かね。」と天井裏から見る。

そして、夏美の部屋では狂VS黒煉の戦いが始まっていた。

狂と黒煉の互いの刃が混じる。

狂ニヤリと笑いながら「昔の様に俺を楽しませてくれよ。」黒煉。
「そして力では狂の方が上で思わず押されていた。」

黒煉軽く舌打ちし心の中で・・・。

やっぱ借りもんは動きずらいか・・・。

すると・・・。

「黒煉。」

夏美の声が黒煉の中に響き渡る。

そして・・・。

「今の私しやアの体はお前さんが握っているんだ。」好きなように使ってくれ。」

その事を聞いた黒煉は驚きつつも

「其れじゃあ万が一の時に何かあったらお前さんが仕事の時に支障あるだろうよ？」

「かまわねエよ。寧ろ本気出さないと狂さんは満足しないかも知れねエから」

さ。だから・・・好きに使ってくれ。相棒。」

その声を聞いて黒煉は何か吹っ切れたようにフツと笑い

「ありがとうよ。」じゃ御言葉に甘えさせてもらつよ。」

すると狂がニヤリと笑い「どうしたア？黒煉？もっと俺を楽しませてくれよ。なア・・・。」

すると黒煉の周りに風が舞いそしてニヤリと笑い漆黒の瞳をさらに漆黒にさせて「良いぜエ？」御望み

の通り楽しませてやるよ。’ 鬼眼の狂の兄さん。」

「只・・・後悔しないですよ？」と続け様に「黒煉の‘本気’^{マジ}を見せてやるよ！」と黒月を構えて「・・・闇の始末屋世界の女王と言われた力をな。黒煉・・・いざ参る！」そして黒月を前に出して再度構え直す。

「・・・黒月流神派」とそして「黒烏^{くろからいす}！・・・！」と技を放った。

と同時に狂も「無明神風流殺人剣！みづち！！！」と技を放った。
そして2人の周りに風が舞った。

すると黒煉が血を吐き「・・・ッ！黒烏が敗れるとはね。流石だね・・・
鬼眼の狂の兄さん。」

私の負けか？？

すると狂がニヤリと笑い「お前にも聞こえただろう？風の声が・・・」。

と同時に狂の体にもいつの間にか血飛沫が舞った。

狂はそれを見て一瞬驚いたがすぐに狂喜の笑みに代わり膝をついていた。

黒煉もニヤリと笑い「・・・うちの黒鳥、舐めていたのが悪かったみたいね。」と息切れをしながらも言った。

其れに続けて黒煉は「黒鳥、はうちの技の中でも一応秘奥義に当たるからね・・・此れ交わされたら

いろんな意味でヤバかったね。」とも呟いた。

と同時に瞬間風と殺気が増加した。

黒煉は一瞬驚き苦笑いし「あらア、こいつはどうやら鬼眼の狂の兄さんも『本気』^{マジ}にさせてしまったようだね。」

と同時に狂は高笑いし「『良いねエ、すげえ楽しいぜ！良いぜ？お前の本気見せてもらったからな・・・』

俺も『鬼眼の狂の本気』^{マジ}を見せてやるぜ！」

一方、天井裏で見ていたメグナは冷や汗をかきながら「ヤバイよ！ヤバいつて！！このままだと姉さんの体が持たない！！！」と同時に「風魔の旦那さん！！！！」

すると小太郎が現れた。

すると小太郎が驚きながらも「・・・すごい、殺気だよ。どうするの？メグナさん？」

メグナは顔しかめながらも「狂の旦那さんはまだしも黒煉の姉さんはうちの姉さんの体の中だからな・・・」

本人は自由にして言いつて多分事前に話しているだろうけどさ。もし緊急事態の時に何かあったらヤバいからもし何かあったら簡単には行かないけれど止めに入るよ？OK？」

小太郎はそれを聞いてコクリと頷いた。

そして狂はニヤリと笑い再度村正を構えて「『せつかく秘奥義』を見せてくれたんだ。俺も見せねエ訳にはいかねエなア。例えば借りもんだろうが手抜きしねえぜ？」と続け様に「無明神風流殺人剣！奥義・・・」

朱雀！！！！！！」

と黒煉に向かって放った。

と同時に黒煉もフツと笑いながら「こいつはやべえな・・・じゃ・・・私もさね。もう一つの奥義を繰り出すかい」と黒月を再度構えて「黒月流神派！！黒鳳凰！（クロホウオウ）！！！！」

そして互いに技が鳥の形となって互いにはなっていく。

中で見ていた夏美も流石に焦り

・・・こいつはアすげえや。少なくとも私しやアの炎龍の技でも對抗は多分出来ないだろう。

しかし、血イ流しすぎたせいなのかちよいとヤバいね。

そろそろ此れが終わったら代わってもらわないと笑；

そして互いに風が舞い先に倒れたのが・・・「チィ・・・やっぱアレかね。借りもんだと限度っうもんが

ありそうだね。す、すまねえ相棒。」と苦笑いをしながら血を出しながら倒れ込んだのが何と黒煉だった。

狂はそれを見てニヤリと笑い「お前も感じただろう？朱雀の・・・息吹を。」

黒煉息切れしつつもフツと笑い「あ、あア・・・感じたさ」。だが・・・私の黒鳳凰の‘鳴き声’も

兄さんには聞こえたはずさ。」

すると狂の体にも血飛沫が再度舞った。と同時に軽く膝ついていた。

狂は再度ニヤリと笑い黒煉を見て「・・・あア。確かに『受け取ったぜ？』お前の技をよオ。」とさらに続けて「ククク・・・クハハハハハ！！！！」やっぱりこうでなきゃア楽しくとも何ともねえ！！黒煉！お互いの傷が癒え次第また再戦と行こうじゃねエか！！！」と黒煉に近づきしゃがみ「なア？」

するといつの間にか戻ったのか「・・・彼女からの伝言です。『良いよ。またやりましょうの事です。』」

「狂さん」。

其れを聞いた狂はフツと笑い「何だア？『戻っちまったのか？』」

黒煉から体を戻した夏美は傷だらけの体を抱えて起きあがりタバコに火を灯し「えエ・・・多分彼女も疲れたと思います。」すると冷や汗が夏美の顔を包むと同時に体を抱え起こして少し狂から離れた所で「メグナ。風さん。」と天井に小声で声をかけ「チィと・・・ばかり見回り行ってくれねえか？もしかしたら緊急になるかもしれないからさ・・・。」

メグナ心配そうに小声で「了解した。けど・・・姉さん動けるの？？？」

小太郎も心配そうに「了解？ だけど・・・平気？」

夏美はフツと笑い「回復龍王派使えば何とかなるさ。頼む。」

其れを聞いてメグナ達は見回りに出て行った。

そしてその後水を用意し錠剤を大量に入れ一気に飲み干した。

と同時に回復龍王派で黒煉の傷をいやして行った。

そしてタバコを加え直し苦笑いをし「いやア・・・参ったね。まさかここまで派手に来るとは思っていなかったな。」と呟いていた。

と同時に心の中で・・・。

お前さんの‘本体’必ず時間かかってもしさ見つけてやっから・・・其れまで辛抱してくれ。

黒煉と呟いた。

そしてまた水を用意し錠剤を大量に入れて一気に飲み干した。

その様子を狂が見ていた。

そして狂再度ニヤリと笑い「・・・どうやら限界か？」と楽しそうに呟いてた。

第16夜。狂の前に現れた闇の始末屋世界の女王と呼ばれた黒煉。そして・・・狂VS黒煉。完。

第16夜。狂の前に現れた闇の始末屋世界の女王と呼ばれた黒煉。そして・・・

今章も御付き合い下さいまして有難うございます。
無事に更新完了させて頂きました。

其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告をどうぞ笑；

アレから黒煉に体を貸して狂と対峙していた夏美だが・・・あまりにも激戦？

だったので体の血が足りずに錠剤を大量に飲み干した。
タフレット

冷や汗が止まらない。異様にのどが渴く。

冷静でいられなくなる。だが・・・まだ夏美は‘人間’ヒトとしてあり続けて行きたいと願ってばかりだった。

タバコを吸いソファーに座りこんで前にあるテーブルに錠剤が入った瓶と

水を再度用意した。

・・・血を飲むくらいなら今はこのままでいい。と呟きながら自分に言い聞かせていた。

そして錠剤をまた飲もうとした瞬間、血の匂い、が充満してきた。

夏美の顔が一瞬こわばったが冷静さを取り戻し表情が元に戻る。

と同時に後ろから抱きしめられていた。狂だった。

狂は夏美を後ろから抱きしめそして片方の手に傷を作り己の血を出していた。そして耳元で「なア？」そんなのに頼るのは止めるよ。

『本能のままに欲すればいい』、『そうだろう？』、『』と楽しそうに囁いた。

夏美はそれを聞いて只黙って顔しかめるだけだった。

狂の血の甘い香りが夏美の周りを包み込む。

すると緊急警報が鳴った。

メグナが慌てて夏美の所に戻って来てそして小太郎も戻って来て夏美は

2人を見て「どうした！？緊急警報なつたが！？」

メグナは顔しかめて「大変だ！姉さん！！広州の上層部が石田三成の率いる石田会の連中を連れてこつちに攻めてきたんだ！！」

夏美は軽く舌打ちし「クソ！！で？兄様は！？」

今度は小太郎はそれを聞いて「後攻者と・・・言っていたよ。」

夏美頷き「了解した！じゃ・・・2人とも戦闘準備！私も後から行く！！」

メグナ達は頷きその場を後にした。

と同時に狂に「・・・申し訳ないですが、離してくださいませんか？」

狂はニヤリと笑い「俺の血飲んだら離してやるよ。」

夏美はそれを聞いて首を横に振り「本来なら手あらな真似したくないんですが・・・緊急事態なのでゴメンツ！」そう言い「火炎風拳！

火炎風爆風脚！」

と攻撃し狂を離れさせ潔く戦闘準備しその場を後にした。

狂はそれを見てクククと笑い「俺に一発くらわせるとはなア、後で後悔させてやらねえと行けネエか？ いや・・・もうしているか？ 何せ・・・」

あの時俺の血が少なくともあいつの顔についていたからよ。『飢えているんだ』だから『舐めねエ訳にもいかねエからな。』と楽しそうに呟いていた。

一方夏美は戦の場所を感じながら走り続けていた。

人間のまま・・・奴らと対峙したい！そして父さんたちの無念を！そして

意示を・・・誓いを果たす！今度こそ・・・

石田三成アంతも広州と共に此処で・・・。

と呟いていた。

第17夜。黒煉から再度夏美へ。その後・・・夏美の忍びよる『闇の変化』？

以上です。今章も御付き合いましたら有難うございます。
次章もどうぞ宜しくお願い致します。

有難うございます。

第17夜。黒煉から再度夏美へ。その後・・・夏美の忍びよる「闇の変化」？

有難うございます。

今章は前章と似た様はないよう??になる予定です。

あいからわず長丁場の残酷シーン等あり予定です。

御了承下さい。

第17夜。黒煉から再度夏美へ。その後・・・夏美の忍びよる「闇の変化」？

アレから黒煉に体を貸して狂と対峙していた夏美だが・・・あまりにも激戦？

だったので体の血が足りずに錠剤タブレットを大量に飲み干した。

冷や汗が止まらない。異様にのどが渴く。

冷静でいられなくなる。だが・・・まだ夏美は「人間ヒト」としてあり続けて行きたいと願ってばかりだった。

タバコを吸いソファーに座りこんで前にあるテーブルに錠剤が入った瓶と水を再度用意した。

・・・血を飲むくらいなら今はこのままでいい。と呟きながら自分に言い聞かせていた。

そして錠剤をまた飲もうとした瞬間「血の匂い」が充満してきた。

夏美の顔が一瞬こわばったが冷静さを取り戻し表情が元に戻る。

と同時に後ろから抱きしめられていた。狂だった。

狂は夏美を後ろから抱きしめそして片方の手に傷を作り己の血を出していた。そして耳元で「なア？」そんなのに頼るのは止めるよ。

『本能のままに欲すればいい』、『そうだろう？』、『』と楽しそうに囁いた。

夏美はそれを聞いて只黙って顔しかめるだけだった。
狂の血の甘い香りが夏美の周りを包み込む。

すると緊急警報が鳴った。

メグナが慌てて夏美の所に戻って来てそして小太郎も戻って来て夏美は

2人を見て『どうした！？緊急警報になったが！？』

メグナは顔しかめて『大変だ！姉さん！！広州の上層部が石田三成の率いる石田会の連中を連れてこっちに攻めてきたんだ！！』

夏美は軽く舌打ちし『クソ！！で？兄様は！？』

今度は小太郎はそれを聞いて『後攻者と・・・言っていたよ。』

夏美頷き『了解した！じゃ・・・2人とも戦闘準備！私も後から行く！！』

メグナ達は頷きその場を後にした。

と同時に狂に『・・・申し訳ないですが、離してくれませんか？』

狂はニヤリと笑い『俺の血飲んだら離してやるよ。』

夏美はそれを聞いて首を横に振り「本来なら手あんな真似したくないんですが・緊急事態なのでゴメンツ！」そう言い「火炎風拳！火炎風爆風脚！」

と攻撃し狂を離れさせ潔く戦闘準備しその場を後にした。

狂はそれを見てクククと笑い「俺に一発くらわせるとはなア、後で後悔させてやらねえと行けネエか？いや・もうしているか？何せ・・。」

あの時俺の血が少なくともあいつの顔についていたからよ。‘飢えているんだ’だから‘舐めねエ訳にもいかねエからな。’と楽しそうに呟いていた。

一方夏美は戦の場所を感じながら走り続けていた。

人間のまま・奴らと対峙したい！そして父さんたちの無念を！そして

意示を・・誓いを果たす！今度こそ・・。

石田三成アంతも広州と共に此处で・・。

と呟いていた。

すると再度また‘吸血鬼化の発作’に見舞われた夏美。

クソツ！！またか！？

するとセラスが来て「夏美さん！！大丈夫ですか！？」

夏美はフツと笑い「ああ、平気さ、すまねえ！急ごう！セラス！！
今頃奴ら来ているだろうさ。」

セラスはハルコンネを構えてニヤリと笑い「そうですね！急ぎましよう！『闘争場へ』！」

夏美は再度フツと笑い「やっぱ、アーカードさんの従僕だねエ。もうつきつきしているよ。」

と同時に沙代子の姿も探した。

だが・・・見当たらなかった。

と同時に今度は黒煉の声が夏美の中に響く。

「相棒。大丈夫か？」

夏美はまたフツと笑い「ああ。平気さ。」

「すまねえな。傷大量に……。汗」

夏美はタバコを再度口に加え直し「別にかまわないよ。好きに使ってくれッて言ったのは私しやアの方だしさ。気にすることないよ。」

「そうか。そう言ってくれとありがたいな。また？出ようか？？この次も？」

夏美は首横に振り「さっきの狂さんとの戦いで疲れているんだ少し休みなよ。黒煉。」

「……。そうか？」

夏美頷き「あア。」と同時にタバコに火を灯し「・・・いるんだろ？」「石田三成？」「

すると後ろからククと笑い声がし「流石だな。」「炎龍。いや・・・今は橘夏美に戻ったのか？それとも

・・・黒煉か？」

夏美フツと笑い翡翠刀を鞘から取り出し肩に乗せ「んや・・・前者の方さ。」「と続け様に「どうした？やりあいに来たのかい？」「

三成はニヤリと笑い「頂きに来たのさ。お前とそして・・・ライカ・ネアンをな。」「

夏美は再度フツと笑い「断るって言ったら？」「

三成はそれを聞いてフツと笑い指を鳴らした。

するとドオオオン！と爆発する音が聞こえた。

夏美は両目を開き「兄様アアア！！相棒オオオオ！！晋助様アアア！！政宗様アアア！！片倉様アアア！！！！狂さあああん！！」と同時に三成を睨みつけ「石田三成イイイ！！！！てめエエエエ！！！！」

三成は再度ニヤリと笑い「これなら断れまい。」

夏美はあまりにも卑劣なやり方で怒りに満ちていた。

そして・・・また翡翠刀を鞘にいつの間にか納めて・・・黒月を手にする。

同時に「・・・てめエどうやら散りたいらしいなア。」と低い声の女の声がし黒風が夏美を再度舞った。

そして漆黒の瞳がさらに漆黒をまし・・・「三成の兄さん。アンタはゆるさねエよ！！」といったの間にか

再度黒煉状態になっていた。

一方、ロビーに集まっていたワカバそしてヘルシングは攻め入っている敵をなぎ倒しながらも爆破の消化作業を続けていた。

ライカは夏美の変化に再度気づき「ああ．．また、出てきちゃったね」。黒煉の姉さんが．．こりゃア当分またかかりそうだぞ？」と苦笑い。

そして黒煉は三成に向かって「．．．覚悟できているか？」私が自ら、散らせてやるから覚悟しな？」そう言い黒月を鞘から抜き取り三成に斬りかかった。

其れと同時に三成もニヤリと笑い刀を鞘から抜き出し応戦した。

第17夜。黒煉から再度夏美へ。その後．．夏美の忍びよる、闇の変化、完。

第17夜。黒煉から再度夏美へ。その後・・・夏美の忍びよる「闇の変化」？

今章も御付き合い下さいまして有難うございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ。

アレから再度出た夏美の中に出てきた黒煉。そして吸血鬼界の死神石田三成と対峙していた。

お互いの刃が混じるそして黒煉は黒月を構え直して「・・・悪いねエ。こいつを相棒達の所に送らなきゃならねえんでな。」とっとと終わらせてもらっぜ？」と同時に黒月を上に掲げ直して「・・・黒月流・神派・・・」「黒鳳凰！！！！！」そして技を三成に放った。

果たして・・・勝者はどちらに？

第18夜。吸血鬼界の死神石田三成再びそして夏美から再度黒煉へ。その後三成VS黒煉。

以上です。此処までお読みくださいまして本当にありがとうございます。ました。

其れでは次章もどうぞ御付き合いの程宜しくお願い致します。

有難うございます。

第18夜。吸血鬼界の死神石田三成再びそして夏美から再度黒煉へ。その後三成

今章も御付き合い下さいまして有難うございます。

今章は主に三成さんと黒煉さんがメイン?となります。

長丁場の残酷シーン等あります。

もちろん編集もです。

御了承を・・・。

第18夜。吸血鬼界の死神石田三成再びそして夏美から再度黒煉へ。その後三成

アレから再度出た夏美の中に出てきた黒煉。そして吸血鬼界の死神石田三成と対峙していた。

お互いの刃が混じるそして黒煉は黒月を構え直して「・・・悪いねエ。こいつを相棒達の所に送らなきゃ

ならねえんでな。」「とつと終わらせてもらっぜ?。」と同時に黒月を上に掲げ直して「・・・黒月

流・・・神派・・・。」「黒鳳凰!!!!!!」そして技を三成に放った。

三成は交わしたと同時にニヤリと笑い「・・・どうやらお前の技は残念だが通じなかったようだ。」「

黒煉はそれを聞いてフツと笑い後ろを向いた。

三成はそれを良い事に黒煉に向かって斬りかかった。だが・・・三成の体から血飛沫が大量に舞って

三成は驚き「ば・・・馬鹿な!何故!?!」と傷だらけの体を触った。

黒煉はニヤリと笑い「・・・何故って?私しやアは闇の始末屋界の女王として君臨していた女さ。」「

他の連中より力は多少上なんだよ。」と同時に「あんたにも聞こえただろう？黒の鳳凰の鳴き声とその命の音がね。」

そして三成をチラッて見て爆発した所に急いで向かった。

・・・頼むよ！！！！相棒の相棒達よ！！！！無事でいてくれよ！！！！
オウガの兄様もさ！！！！！！

そして戦場になったロビーに来て黒煉は眼を開き驚いた。

其れは広州の上層部そして石田会の下っ端達がグールを従えてワカバを襲わせていた。

一方セラスはグール達をなぎ倒して散らせていた。

と同時に殺気が倍増する。

その場にいたアーカードもニヤリと笑い「・・・ほう。」

すると黒煉が歩み寄って来て「……てめエ等。只で帰れると思うなよ？」「そう言い黒月を再度鞘から抜き出し睨みつけながら」……「来いよ。冥土へ送ってやる。」

グール達は一斉に黒煉に向かって襲いかかって来た。

だが……一瞬にしてグール達は散って行った。

広州の上層部も石田会のメンツ達も其れを見て驚いた。

と同時にその場を少々離れた場所で見っていた狂がニヤリと笑い「……黒月流神派黒疾風」か。」

あの技が出てきたッてエ事は多分……黒煉本気だな。

するといつの間にか目が覚めた沙代子もロビーに向かって行った。

狂はその姿を見ると再度ニヤリと笑い「……沙代子。お前も「やり（遊び）に行くか。楽しんで来いよ？存分にな？」とクククと笑いながら呟いた。」

そして・・・黒煉は広州の上層部の連中と石田会のメンツを見て「さアて、次は『てめエ等の番だ。』、覚悟できてるか???」

すると広州の上層部の連中の1人が黒煉を見て「・・・お前は、
一体、^{シャアアメイ}夏美様じゃねえな???」

黒煉はそれを聞いてニヤリと笑い「・・・私しやアに名を聞くとはねエ。」「ずいぶん物好きがいたもんだ。」「良いぜ?冥土の土産に教えておいてやらア。」「そして「人は私を・・・黒煉。」「と呼ぶ。」「

広州の上層部はそれを聞いてかなり驚いていた。と同時に石田会のメンツも驚いたが母体の吸血鬼そして

再度グール達を襲わせた。

黒煉ニヤリと笑い「・・・黒月流神派、^{「クリュウ}黒龍!」そして黒い龍が母体の吸血鬼達と共度もそして広州の上層部そして石田会のメンツどもを包み倒した。

そして・・・「アンタらにも聞こえたでしょう?黒い龍の鳴き声と息

吹きが。」

こうしてひとまず終わった。

ワカバそしてヘルシングのメンバーの何とかの無事を確認した途端。

黒煉が黒月を地面に突き刺し息切れをした。

其れは、夏美の吸血鬼化の発作の影響だった。

黒煉は夏美に「またかい？平気かい？相棒？」

夏美

「あ、あア。な、何とかな。す、すまねえ相棒。後ろのポケットに錠剤あると思うからよ。其れ口の中に放り投げてくれ。」

黒煉はそれを聞き頷き「・・・了解。」そう言い後ろから錠剤の瓶を取り出し大量に口の中に入れ飲みほした。

と同時に「今返すな？相棒？」

夏美は頷きながら礼を言いその場で倒れ込んで黒煉と入れ替わった。

と同時に夏美は起き上がりタバコに火を灯し「・・・やアれやれ。災難だったなア。ある意味。」と苦笑いをした。

ライカ其れを聞いて苦笑いし「戻ったそうそうその一言かよ。」

其れを聞いたセラスを初めワカバは笑っていた。

そして夏美は笑いながらも再度自分の部屋に戻って沙代子も夏美の後について行った。

第18夜。吸血鬼界の死神石田三成再びそして夏美から再度黒煉へ。
その後三成VS黒煉。完。

第18夜。吸血鬼界の死神石田三成再びそして夏美から再度黒煉へ。その後三成

今章も御付き合い下さいまして有難うございます。

其れでは毎回のグタグタ予告をどうぞ。（笑）

黒煉から再度体を戻した夏美は部屋に戻る途中だった。

すると夏美は歩みを止めフツと笑い「沙代いるんだろ？」

その声を聞いた沙代子はクスと笑い「気づいていたんだ？」

夏美再度フツと笑い「昔の妙な勘繰りがね、まだ抜けていないのさ。」

と同時に「うちの部屋に来るかい??？」

沙代子は頷き夏美の後を追った。

そしてその様子をいつの間にかその場所にいた小十郎が見ていた。

第19夜。三成との対戦後再度黒煉から夏美へ。そして……。

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

有難うございます。

第19夜。三成との対戦後再度黒煉から夏美へ。そして……。（前書き）

今章もご覧いただきまして有難うございます。

今章も長丁場編集可能性等あり予定です。

予めご了承を。

今章のメインは多分夏美と沙代子になると思います。

それではどうぞ。

第19夜。三成との対戦後再度黒煉から夏美へ。そして……。

黒煉から再度体を戻した夏美は部屋に戻る途中だった。

すると夏美は歩みを止めフツと笑い「沙代いるんだろ？」

その声を聞いた沙代子はクスと笑い「気づいていたんだ？」

夏美再度フツと笑い「昔の妙な勘繰りがね、まだ抜けていないのさ。」

と同時に「うちの部屋に来るかい??？」

沙代子は頷き夏美の後を追った。

そしてその様子をいつの間にかその場所にいた小十郎が見ていた。

小十郎はタバコに火を灯しながら夏美達の後をついて行く様に歩き始めた。

その前を塞ぐ者がいた。

小十郎はそれを見て感じたのかニヤリと笑い「アーカードん所の従僕のお金髪の小娘か？」

その前にいたのがセラスだった。

セラスはクスと笑い「よく分かりましたね？竜の右目の御兄さん。気配は消したはずなんですが・・・？流石に前に出てきたら分かりますか？？」

小十郎はそれを見てタバコを口に加え直しニヤリと笑い「ああ。分かるぜ」？特に「同じ闇同士はな」と続け様に「其処どいてもらおうか？？」

セラスクスと笑いながらライフルを取り出し「駄目ッて言ったら？？」

小十郎ニヤリ「うずくでも通るまでだ。」そう言い体中に雷をまとわせた。

一方天井裏では・・・相も変わらずメグナが待機していて顔しかめて「あちゃア。片倉の旦那さんアレだ

極殺になりかけているよ・・・どうしようかね。セラスの姉さん悪いこといわねエから戻った方がいいよ???」と小声で言ったと同時にドシユと小刀が天井裏に出てきた。

メグナ驚いて「・・・おっかないねエ。」と呟いていた。

すると小十郎の声が聞こえ「オイ。いるんだろ???出てこい。メグナ。」

メグナは驚きつつも冷静になりながら天井裏からストとセラスの前に出てきた。

セラス「メグナさん。」

メグナクナイ取り出して「セラスの姉さん。チィと此処は私しやア様に任せてくれないかい??

姉さんの下に行って欲しいなア?なんて?」

セラスは頷きフツと笑い「了解しました。」そう言いながらライフ
ル仕舞夏美の下に向かっていった。

其れを確認したメグナは小十郎に向き合い「さてと・・・片倉の旦那
さんチイと申し訳ないけど相手交代ね？」と言った。

小十郎はそれを見てニヤリと笑い「お前が相手か・・・おもしれエ
な。良いぜ？かかってきな？只、後悔するんじゃないやねエぜ？？」

メグナはクナイを持ちつつそして驚きつつ苦笑いをして・・・。

凄い殺気だね。私しやア様もつかね。と内心呟いていた。

一方、狂はと言うといつの間にか遠目でその様子を見ていてニヤリ
と笑いながら再度タバコに火を灯し

「さてと・・・お前エの實力どんなもんか見せてもらうぜ？橘の小
娘のクノー。」と楽しそうに呟いていた。

するといつの間にか夏美の部屋にいた沙代子が狂の側にやって来た。

狂はそれを見て再度ニヤリと笑い「どうしたア？」

沙代子はいつの間にか狂の後ろに抱きついて来て「・・・分らないけど、会いたかったの」。狂様。」

その事を聞いた狂はクククと満足そうに笑っていた。

そして沙代子の前に振り返り沙代子を抱き寄せ頭を再度なでた。

沙代子は懐かしい匂いに包まれて思わず目をつむった。

ああ・・・そうだ。私はこの方がとても恋しかったんだ。

またこうして抱かれたかったんだ。

何故か気持ちいいのままずっと・・・。

するとドカァァンと音がした。

狂達はそれを見て振り向き壁にメグナが叩きつけられていた。

メグナ苦笑いし「いやはや・参っちゃったねエ」と呟いていた。

そして小十郎が歩み寄りながらクククと笑い「どうした？もう終しめえか？メグナ？俺を楽しませてくれよ。」

メグナは苦笑いをしつつも手でしるしを作り影分身を放って攻撃した。

だが・小十郎に見破られてしまいまた攻撃をくらってしまつ。

メグナは流石に焦った。

影分身見破られるなんて・・・・ちどうするか？

すると行き成り黒風が舞った。

小十郎はそれを避けて少しメグナから離れた所に着地した。

メグナはその技を見て「こいつは・・・黒月流神派。黒風??まさか・。
」

すると夏美と入れ替わった黒煉が再びいた。

そして黒煉はタバコに火を灯しながら黒月を肩に担いで「・・・此れ以上うちの相棒の忍びちゃんいじめないでくれねえかな?竜の副大将?」

メグナはそれを確認すると「こ、黒煉の姉さん!!!」と同時に「ちよいと何度も、入れ替えて大丈夫なのかさ??」と小声で確認する。

黒煉フツと笑い「心配ないよ。」そう言い小十郎の前に出て「さてと・・・次は私じゃアだね。」と言いながら黒月を構えながら「悪いけど、後が一応突っかかっているんでね、終わらせてもらうよ?竜の副大将?」そして「黒月流・・・神派!!!黒鳳凰!!!」と奥義を繰り出した。

だが、小十郎に一瞬にして粉碎された。

黒煉はそれを見て軽く舌打ちし「・・・やっぱ、竜の副大将相手にそう簡単に済ませられねエか。」

と同時にメグナも体制整えて「・・・狭川忍法、蜘蛛烏！！！！（クモガラス）」と己の忍法の技を放った。

蜘蛛のようにそして烏の形をした網上が小十郎を包み込む。

メグナ心の中で・・・。

やったか！？と呟いていた。

だが・・・小十郎はそれをいとも簡単に斬り裂いていた。

メグナ軽く冷や汗をかきつつも再び手で印を結いながら「じゃ！こいつでどうよ！？狭川忍法火炎玉！！！」

と火炎玉を小十郎に向けてはなつた。

だが其れもいとも簡単にかわされてしまう。

メグナ軽く舌打ちして再度印を組み口笛を軽くふき「狭川忍法！！
かえんぶんしんきりあやし
火炎分身霧妖！！！」と同時に

「黒煉の姉さん！」

黒煉頷き黒月を上にご構えて「・・黒月流神派！！黒鳥！！！」と
再度小十郎に向けて技を放った。

と同時に「鳴神！！！！！！！！」黒煉の最大の技をいとも簡単に跳ねあげた。

黒煉は驚きそして鳴神を受けて壁に激突してしまった。

メグナはそれを見て「黒煉の姉さん！！！！！！」

すると「人の事心配するよりも自分の事心配したらどうだ？メグナ？」と同時にメグナも再度ぶっ飛ばされた。

メグナは先程も影響もあつてかその場にたたきつけられて気を失ってしまった。

黒煉は傷だらけになりつつもメグナの所へ行きメグナを見て軽く舌打ちし「・・・気失わされたか。」と同時に「風魔君！！」

小太郎が出てきてメグナを安全な場所へと移す様に言った。

小太郎は頷きその場を急いでメグナを抱え去って行った。

すると黒煉は心の中で・・・

さてと、どうするよ？私の、黒烏の鳴き声も黒風の音の声等も、竜の副大将には聞こえねえ見てえだしな

弱ったな……。だが、竜の副大将にダメージを与えねえと前に進めねえ。普段滅多にやらねえが、あれをやるか？

小十郎はフツと笑い「・・・どうした？　もう終わりか？」それとも「戻っちまったか？」

黒煉フツと笑い「まだ戻っちゃあいないさ。」とそう言い黒月を前にして「ちよいと・・・細工させてもらうよ。」そう言いながら手で黒月をスツとやったすると黒く光った。

と同時に黒煉ニヤリと笑い「・・・こいつをくらっても尚且つ耐えられるかな？」「そう言い再度黒月を頭に抱え直して「・・・黒月流神派・・・裏黒疾風！」と技を放った。

すると小十郎に見事当たった。

だが・・・小十郎の体には傷一つついていなかった。其れも不思議なこと・・・。

と同時に小十郎ニヤリと笑いながら黒煉の所に来て「・・・効いて
いねエゼ？」と言った。

黒煉懷からタバコを取り出しフツと笑いながら火を灯し「・・・そ
いつはどうか？」

すると小十郎の体から血飛沫が舞った。

小十郎はそれを見て驚きながら膝をついた。

黒煉歩き出しながら「・・・竜の副大将。アンタにも聞こえただろ
？黒い疾風の声が。」そう言いながらその場を立ち去った。

小十郎ニヤリと笑い「・・・おもしれエな。お前も手に入れてやる
よ。黒煉。夏美あいつと共に。」と楽しそうに呟いていた。

第19夜。三成との対戦後再度黒煉から夏美へ。そして・・・。

完。

第19夜。三成との対戦後再度黒煉から夏美へ。そして……。 （後書き）

有難うございます。無事に更新完了致しました。

有難うございます。其れではほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ笑。

アレから小十郎との対戦を終えひとまず部屋に戻ろうと廊下を歩いてた

黒煉（夏美）するとタメ息をつき「・・・いるんだろ？鬼眼の狂の兄さん？」

すると狂がククと笑いながら「よオ。また会ったなア？『黒煉』。」

黒煉壁に手を組みながらもたれて「・・・何用さ？」

と狂を見て言った。

狂はそれを見て再度クククと笑い「『そっけねえナア』」と呟きながらも

「『俺の所に来いや。』」と黒煉に向かって言った。

その答えとは？

黒煉「第20夜。小十郎との対峙後黒煉と鬼眼の狂再び再会？」

「次章もどうぞ宜しくさね。」

以上です。有難うございます。

其れでは次章も御付き合いの程宜しくお願い致します。

第20夜。小十郎との対峙後黒煉と鬼眼の狂再び再会？（前書き）

有難うございます。有難うございます。

今章は主に狂さんと黒煉のやり取りが主になる予定です。

度々すみませんが長丁場等予定です。此方も・・・。

第20夜。小十郎との対峙後黒煉と鬼眼の狂再び再会？

アレから小十郎との対戦を終えひとまず部屋に戻ろうと廊下を歩いていた

黒煉（夏美）するとタメ息をつき「・・・いるんだろ？鬼眼の狂の兄さん？」

すると狂がククと笑いながら「よオ。また会ったなア？『黒煉』。」

黒煉壁に手を組みながらもたれて「・・・何用さ？」

と狂を見て言った。

狂はそれを見て再度クククと笑い「『そっけねえナア』」と呟きながらも

「『俺の所に来いや。』」と黒煉に向かって言った。

黒煉はタバコを吸いながら「・・・一体どういう風の吹きまわしだい？」と続け様に「少なくとも私じゃアは『つるむ気は』ないんだけど??」とも言い返した。

狂は黒煉の前に歩き始めながら「・・・そんなつれねエ事言つなよ。」と同時に「元の体に戻りたくはねエか？」と言って黒煉はそれを見て驚き「・・・今何て言った？」

狂はその様子を見てクククと笑い「何度でも言つてやるぜ？」元の体に戻りたくねエのか？」つてな。」

黒煉はそれを見てまた驚きを隠さずに「・・・その様子だと私しやアの体（本体）の居場所知っているみたいだね。」と言った。

そして、狂は「その言葉」を聞くとニヤリと笑って黒煉を見ていた。

すると・・・。

― 待て。 黒煉―

狂に聞こえない程度の声で夏美が話しかけてきた。

「落ち着いて考える。『あくまでも狂さんは敵同士』、なんだぞ？敵の言葉をうのみにしてどうするよ？」

本当なのか嘘なのかをきちんと見極めないとな……。って私じゃアが言えたきりじゃねえけどなー

と苦笑いしながら言った。

すると黒煉は狂の前を素通りしながら「……。『悪いけど今は乗れないねエ。』、『兄さんが言っている事

本当かうそかまだ分からんしね。』」

その事を聞いた狂はククと笑い「あの橘の小娘に言われたか？」と聞き返した。

黒煉は一瞬驚いたと同時に冷静な顔して「……。『さあな。』」そう言い今度こそ後にした。

狂はその姿を見てククと再度笑い「『本当なんだがなア』。」「そう言いそしてまた「『…いるんだろう？沙代子？』」

すると沙代子がクスクスと笑いながら「あゝ。見つかつちやつたな。やっぱり狂様にはかなわないや。」

そう言い狂の前に再度出てきた。

狂は手招きして自分の所へと呼んだ。

そして耳元で「『…いい加減に俺の所へと戻って来い。お前の本当の居場所は俺の腕の中だ。』」と囁いた。

だが、沙代子は黙りながら狂の腕の中にしがみついていた。

狂はそれを見てフツと笑いながら「『…迷ってるのか？』」と問いかけた。

沙代子は只頷いた。

狂はそれを見て再度ニヤリと笑い「・・・何を迷う必要があるんだ？」「元々お前の居場所は俺の腕の中（此処）だったろが。あの時の約束覚えてねエのか？」と再度聞いた。

と同時に一方で後ろで何とライカが聞いていて苦笑いし小声で「・・・いやア参ったねエ」これ「どうするよ？」ある意味まずい事になった。」「と呟いて狂達の行く末を見ていた。

第20夜。小十郎との対峙後黒煉と鬼眼の狂再び再会？完。

第20夜。小十郎との対峙後黒煉と鬼眼の狂再び再会？（後書き）

有難うございます。有難うございます。

遅くなりましたが今章は此れにて更新完了です。

其れではほぼ毎回？ですがグタグタアニメ風予告をどうぞ（笑）

沙代子は「・・・あの時の約束」。

狂に拾われたあの日を思い出した。

大雨の日のある路地裏。まだ当時幼かった沙代子は親もそして家もなく

‘ある施設に預けられていた。’だが・・・其処にも‘居場所がなく
ついには
嫌でたまらなくなつて’逃げ出して来たのだ。

そして今の路地裏に辿り其処にうずくまっていた。

「このまま誰にも気づかずにいるのも良いかな。 - と心の中で呟いていた。

だが「オイ。子供其処で何してやがる？」と男の声がした。

すると沙代子はその声の主に目を向けた。

其処には黒いスーツに身を包んだ、若き日の狂、がいた。

沙代子「・・・別に何も。」只此処にいるだけ。」と静かに答えた。

狂はそれを見てククと笑い「只居るだけか？」さつさと家に帰った方が身のためだぜ？」今は夜だし、吸血鬼がうろついている時間だ。」見つかつちまったらひよつとすると食われちまうぜ？」

沙代子は「・・・其れも良いかも。」と呟いた。

其れを聞いた狂は「あア？」と顔しかめて言った。

続け様に沙代子「・・・だって私には居場所なんてないもの。」
「帰る家ない」「預けられた施設にだって・・・」

その事を聞いた狂はまるで何かを思いついたかの様にニヤリと笑い
沙代子の視線に合わせ「なア？子供？」

沙代子狂を見て「・・・何？お兄さん？」

狂は手を差し伸べ「・・・何なら俺と一緒に来い。」俺がお前の居場所になつてやるよ。」

沙代子はそれを聞いて「・・・本当に？」「本当になつてくれるの？？」

私の居場所に???」と聞き返した。

狂はニヤリと笑いながら頷き「ああ。『なつてやるよ』。『だから来い。』」と再度沙代子に手を差し出した。

沙代子は迷いもせずに頷き狂の手を取った。

何せ・・・狂がとてつもなくきれいでかつこ良かったからだ。『

心の中で・・・。

この男にならついて行っても良いかな?と呟いていた。

沙代子「第21夜。狂と幼き日の沙代子あの時の約束。」

「次章もどうぞ宜しくね?」

以上です。

有難うございました。

第21夜。 狂と幼き日の沙代子あの時の約束。 (前書き)

有難うございます。

今章はですね。 主に沙代子の過去が中心となる予定です。

多分今章も長丁場編集可能性等あり予定です。

第21夜。 狂と幼き日の沙代子あの時の約束。

沙代子は「・・・あの時の約束」。

狂に拾われたあの日を思い出した。

大雨の日のある路地裏。 まだ当時幼かった沙代子は親もそして家もなく

「ある施設に預けられていた。 だが・・・其処にも「居場所がなく
ついいは

嫌でたまらなくなつて、逃げ出して来たのだ。

そして今の路地裏に辺り其処にうずくまっていた。

「このまま誰にも気づかずにいるのも良いかな。 - と心の中で呟いていた。

だが「オイ。 子供其処で何してやがる？」と男の声^{ガキ}がした。

すると沙代子はその声の主に目を向けた。

其処には黒いスーツに身を包んだ「若き日の狂」がいた。

沙代子「・・・別に何も。」「只此処にいるだけ。」と静かに答えた。

狂はそれを見てククと笑い「只居るだけか？」「さつさと家に帰った方が身のためだぜ？」「今は夜だし、吸血鬼がうろついている時間だ。」「見つかつちまったらひょっとすると食われちまうぜ？」

沙代子は「・・・其れも良いかも。」と呟いた。

其れを聞いた狂は「あア？」と顔しかめて言った。

続け様に沙代子「・・・だって私には居場所なんてないもの。」
「帰る家ない」「預けられた施設にだって・・・」

その事を聞いた狂はまるで何かを思いついたかの様にニヤリと笑い
沙代子の目線に合わせ「なア？子供^{ガキ}？」

沙代子狂を見て「・・・何？お兄さん？」

狂は手を差し伸べ「・・・何なら俺と一緒に来い。」「俺がお前の居場所になってやるよ。」

沙代子はそれを聞いて「・・・本当に？」「本当になってくれるの??」

私の居場所に??？」と聞き返した。

狂はニヤリと笑いながら頷き「あア。」なつてやるよ。だから来い。」と再度沙代子に手を差し出した。

沙代子は迷いもせずに頷き狂の手を取った。

何せ・・・狂がとてつもなくきれいでかつこ良かったからだ、

心の中で・・・。

この男にならついて行っても良いかな？と呟いていた。

そしていつの間にか狂に魅かれ狂の事「狂様」と呼ぶようになった。

一方、密かに「偶然にもこの事を聞いてしまっていた」ライカは苦笑いし小声で「・・・あア。本当にある意味面倒な事になったね」。
ま・・・。」

アーカード様は多分すでにご存じかと思うけどね。

すると狂がククと笑い「・・・オイ。其処にいる事は分かってんだぜ？」大人しく出てきたらどうだ？

ネアンの小娘。」

するとタバコを吸いながら苦笑いしライカが出てきて「いやア参っちゃったですよ。」此れでも一応気配消したんですがね。」
と続け様にさすが・・・鬼眼の兄さんにはかなわないや。とも呟いた。

と同時に沙代子も驚いていた。

そんな沙代子を見てライカは「・・・沙代子。確かに私しやアは此処にいた。だがな・・・決めるのはお前さんだ。」、アーカーダ様の所にいるのも「鬼眼の兄さんの所に戻る」のもお前さん次第だ。」と言いつつも「安心しな。インテグラ様には一応黙つといてやつから。」と付け加えつつも「でも・・・アーカーダ様がそう簡単に手放すかどうかは私しやアは知らんがね。」と意地悪そうな笑みを浮かべて言った。

そして足を翻し「ま・・・仕事（命令オーダー）」に差し支えんようにな。」と言いきって行った。

そして廊下を歩いている時にピタリと足を止め「・・・いるんですよ？セラス？」と後ろをチラと見て言った。

するとセラスがクスと笑いながら「・・・分かつちやいました？」

ライカフツと笑いながら「・・・もう何年の付き合いだと思ってる？多少見え見えなんだよ。」と楽しそうに呟いた。

一方、夏美は自分の部屋にいた。相も変わらず「発作」と戦っていた。

・ホシイ。ホシイ。チガ・・ホシイ。ホシイ。ホシイ。

夏美顔しかめつつも錠剤を飲み始めてタバコに火を灯しソファーに座りこんだ。

そして・・・。もう一人の自分を抑え込んだ。と同時にいつの間にかテーブルに小さな赤い液体が入っている瓶が置いてあった。

其れは‘血’だった・・。しかも、‘狂’がいつの間にか置いてあった狂自身の血だった。

夏美はそれを見て一瞬手を伸ばそうとした。だが・・・。‘止めた。’

錠剤に手を出す。其れの繰り返し・・・。

‘駄目だ。今は・・まだそっとしておいてくれ。’頼む。と内心呟いていた。

と同時に狂の血が入った小瓶は一応冷蔵庫の中に入れた。

そして「・・・沙代。狂さんの所に戻るか・・・このままアーカードさんの所にいるか。は、お前さん次第だよ。」と呟いていた。

だが、「・・・相棒が一人減るってエのはチィと寂しい気もするがね。」とも呟いた。

そう、実は夏美自身も昔の沙代を知る人物でもあった。

居場所がなくて途方に暮れていた沙代子を密かに援助していたのだ。

タバコ吸いながら「ま！お前さんは覚えているかどうかは知らんが、一応小さい頃色々陰ながらだけど援助はさせてもらっていたんだよ。」

お前さんは多分覚えていないかもしれないがね・・・とも呟いた。

一方ライカは相も変わらずセラスと会いまみれていた。

するとセラスが「・・・ライカさん。」

ライカタバコ吸いながら「ん？」

セラスライカを見て「・・・知っていたんですか？沙代が鬼眼の狂のお氣に入り」だったって事。」

ライカは軽くため息をつきたバコの煙を吐きつつも「・・・いや、私じゃアはしらん。只、相棒（夏美）なら多少知ってんじゃないか？」まア・・・あいつは突っ込んでもあまりいわねエかも知れねエが。」

セラスはその事を聞いて「・・・じゃ、夏美さんに聞いてみます。理由聞きたいからどうしても・・・。」と言った。と同時にライカ「やめときなセラス。今は相棒の所に行っちゃアだめだ。」とも付け加えた。

セラスはそれを聞いて一瞬何故？と言う顔をしたが・・・。

ライカはフツと苦笑いして「・・・頼む。今は一人にしてやってくれねえか??」と言った。

セラスはそれを見て何かがあった事を悟り頷きアーカードの所に戻って行った。

ライカはタバコを口に加え直し「・・・此れで良いんだよね？相棒？」と呟き今度こそ自分の部屋に戻って行った。

第21夜。 狂と幼き日の沙代子あの時の約束。 完。

第21夜。 狂と幼き日の沙代子あの時の約束。（後書き）

有難うございます。無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回？恒例のグタグタ予告風をどうぞ

一方、自分の部屋にいる夏美はソファーにうずくまっていた。

そう、もう‘限界に達していたのだ。’

クソッ！！！！まだだ！！！！まだ人間^{ヒト}のまま！！！！！！

と同時に鏡を見たすると・・・‘濃い真紅の瞳’に眼の色がなっていた。

此れは‘炎龍状態の眼の色ではなくもつとも別の何かだった。’

夏美は驚き「・・・な、何だ？此れ？？炎龍状態？いや。違う！多分薄い・・・
はずだ。まさか？？」

一方、狂はと言うと誰もいない部屋に沙代子を連れていて透視で夏美を見ていた。

狂はその夏美の様子を見てククと楽しそうに「・・・ありやア俺と同じ目だな。’ま、俺の血も密かに入れてやったから当然ちやア当然か’。」

「もう人間のままで入れると思うなよ？ 橘の小娘。」
と同時に夏美は再度ソファに座り懷からタバコを取り出し火を灯す。

するとある時に会った1人の女の声思い出す

「忘れないで？ 狂は貴女にも会いに行くわ？」

「そのままの生活が続くと思わないことね？」

夏美は軽く舌打ちし「・・・何なんだ？ 一体？？」

するとノック音がして「どなた？」

すると「・・・夏美さん。セラスです。お伺いしたい事があるんですが・・・」と先程ライカと別れたセラスだった。

夏美。「第22夜。セラスとライカの会話・・・そして、夏美の変化？」

「次章も宜しくね？」

有難うございます。以上です。

第22夜。セラスとライカの会話後・・・そして、夏美の変化？（前書き）

有難うございます。

今章は前章の後半みたいなものです。

多分夏美が中心となる予定です

長丁場等編集予定です。此方も・・・。

後・・・声の主は一応椎名ゆやさんです。ハイ（汗）

第22夜。セラスとライカの会話後・・・そして、夏美の変化？

一方、自分の部屋にいる夏美はソファーにうずくまっていた。

そう、もう「限界に達していたのだ。」

クソッ！！！！まだだ！！！！まだ人間ヒトのまま！！！！！！

と同時に鏡を見たすると・・・「濃い真紅の瞳」に眼の色がなっていた。

これは「炎龍状態の眼の色ではなくもつとも別の何かだった。」

夏美は驚き「・・・な、何だ？此れ？？炎龍状態？いや。違う！多分薄い・・・

はずだ。まさか？？」

一方、狂はと言うと誰もいない部屋に沙代子を連れていて透視で夏美を見ていた。

狂はその夏美の様子を見てククと楽しそうに「・・・ありやア俺と同じ目だな。」ま、「俺の血も密かに入れてやったから当然ちやア当然か。」

「もう人間ヒトのままで入れると思うなよ？橘の小娘。」

と同時に夏美は再度ソファーに座り懷からタバコを取り出し火を灯す。

するとある時に会った1人の女の声思い出す

「忘れないで？狂は貴女にも会いに行くわ？」

「そのままの生活が続くと思わないことね？」

夏美は軽く舌打ちし「・・・何なんだ？一体？？」

するとノック音がして「どなた？」

すると「・・・夏美さん。セラスです。お伺いしたい事があるんですが・・・。」と先程ライカと別れたセラスだった。

すると夏美は驚いて「・・・まずい！今のこの状態の私じゃアをあいつ（セラス）に見せる訳には！！」

そして「・・・すまねえがセラス。今はな??」と申し訳なさそうに言った。

セラスはその事を聞いて「・・・分かりました。ではまた改めてお伺

いたします。」そう言い立ち去った。

そして相も変わらず錠剤を飲んでいた。

そして、夏美は軽く舌打ちをしてタバコを吸い続けていた。

‘今の夏美の体内には自分の血そして昔入れられた奥州の双竜組の血、高杉の血、そして・・また新たにいつの間にか入れられた狂の血、この5つの血が、体内に入れ渡っている。’

しかし、帝王である高杉の血と双竜組の血よりも若干上なのが狂の血なのだ。

闇は闇を深く拘束する力がある。

狂は鬼眼のほかに‘闇の鬼’とも呼ばれている。（ごめんなさい
此れはこちらで勝手に汗）

闇の竜（闇の始末屋炎龍）とそして闇の女王である黒煉を‘縛りつける力が強い’のだ。

すると、 - 相棒（夏美） -

夏美タバコ吸いながら「・・・何だ？黒煉？」

「大丈夫か？？」

夏美はフツと笑い「ああ・・・大丈夫さ。」と黒煉に言った。

と同時に「・・・速くお前エさんの本体見つけてやんなきゃな。」とさらに続けて「・・・私しやアの体もいつ『炎龍化』するか分からねエからな。そんな事にお前エさんを巻き込む訳にもいかねエしな。」とも呟いた。

黒煉。

「私の本体（体）どこにあるか？其れは・・・あの兄さんもひよつとしたら言っている事が本当なのかもしれない、只・・・只・・・アレだな。慎重に行った方がよさそうだ。」

すると夏美は黒煉に対して「・・・アレからずっと寝ていないだろ？少し休みな？」

黒煉は心配そうに「大丈夫か？」

夏美再度フツと笑い「ん？ああ・・・平気さ。そんな心配するな。」

黒煉はそれを聞いてひとまず「眠りについた」。

そして夏美自身もタバコをもみ消してソファーに横になり眠りについた。

すると、間もなくしてカタンと音がして冷蔵庫の音も序にした。

そしていつの間にか狂が来て自分の血が入った小瓶を手に取り夏美に近づいていて横に座りニヤリと笑いながら「時間切れだ。人間としてのな？」そう言い自分の血が入った小瓶のふたを開けそして口に含み・・・夏美の口をこじ開け血を流した。

夏美は最初は意地でも自らの舌を使い壁にして血を抑え込んだが、狂が舌を押し倒したため血が巡ってしまったのだ。

・・・っ！！！！頼むから、受け入れないでくれ！

だが・・・その思いとは裏腹に自然と狂の血が体内に流れ込んで言ってしまった。

そして、夏美が、飲んだ事を確認したのを良い事に狂は満足そうに笑い夏美の頭なでてその場を後にした。

第22夜。セラスとライカの会話後・・・そして、夏美の変化？完。

第22夜。セラスとライカの会話後・・・そして、夏美の変化？（後書き）

有難うございます。有難うございます。

無事に更新完了致しました。

ほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ笑；

そして、夏美はソファーから目が覚める。

と同時に冷や汗が顔に滴れた。

夏美頭をクシャッと撫で苦笑いし「・・・夢か」。にしても「いやな夢だぜ」。」と呟いた。

するとまた発作に襲われた。

錠剤を飲む。此れの繰り返しだった。

夏美苦笑いしてタバコに火を灯し「・・・此れはもう、私じゃアに「人間ヒト」として居てはいけないって事なのかね」。」とも呟いた。

そして首筋を見ると赤の小さな蝶の紋章と蒼い竜の小さき刺青が見えた。

夏美は再度苦笑いし「・・・ヤレヤレずいぶんと懐かしいもの」見たな。」

と呟いた。

夏美「第23夜。夏美自身の変化の夢を見る。」

「次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。有難うございます。

第23夜。夏美自身の変化の夢を見る。（前書き）

有難うございます。

今章は主に夏美が中心となる予定です。

此方も長丁場の編集可能性等あり予定です。

第23夜。夏美自身の変化の夢を見る。

そして、夏美はソファから目が覚める。

と同時に冷や汗が顔に滴れた。

夏美頭をクシャッと撫で苦笑いし「・・・夢か」。にしても「いやな夢だぜ」。」と呟いた。

するとまた発作に襲われた。

錠剤を飲む。此れの繰り返しだった。

夏美苦笑いしてタバコに火を灯し「・・・此れはもう、私しやアに「人間ヒト」として居てはいけないって事なのかね」。」とも呟いた。

そして首筋を見ると赤の小さな蝶の紋章と蒼い竜の小さき刺青が見えた。

夏美は再度苦笑いし「・・・ヤレヤレずいぶんと懐かしいもの」見たな。」

とさらに続けて「・・・一体どれが本当の私しやア何だろうな。」とも呟いた。

「さて・・・もう限界かな？」

いや・・・まだだ。’、’まだだ。’、’終わらせてなるものか！人^ヒ間’としての生き方を！！

否定するな！まだだ！まだ大丈夫だ！！！！私じゃアはまだ・・・。

‘人間^{ヒト}として歩んでいける！’

だから平気だ！！

とまるで、自分自身の変化を否定しているかのようにな・・・。

このまま夢なら良いのに・・・。

覚めなければいいのに・・・。

だが、その思いとは裏腹に、’どんどん変化の波が夏美自身におし

かかる。
,

冷静にイラレナクナル。

どこまでが人間としての自分？

どこからが吸血鬼（違うもの）としての自分？

夏美は心の中でフツと笑いそして・・・。

「ざまアないな」と呟いた。

「まだまだ・・・アレだ。悩み続ける等」

私しやアらしくもねえ。

なア・・・。

そしてソファ―に寝っ転がり天井を見て「・・・ヤレヤレある意味^{メン}面倒事^デになっちまったぜ。」と笑いながら呟いた。

と同時に・・・いやアまったく本当だよ。うん。と己をあざ笑った。

第23夜。夏美自身の変化の夢を見る。完。

第23夜。夏美自身の変化の夢を見る。（後書き）

有難うございます。無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ。

そして……。再度再び夏美に「発作が襲う」。

と同時に夏美の体に入る双竜たちの血そして狂の血が「夏美自身を拘束する鎖」になる。

と同時に夏美の口からタバコが下に落ちて火が消える。

と同時に夏美はソファからまるで転げ落ちるかのように下に落ちそしてソファに手をやり握り締めていつの間にか冷や汗を流しながら「・・・またかい？」と苦笑いしてたまたまソファに置いてあつた手鏡を見て「・・・ッ！！！」と驚く。その驚いた夏美自身が見た先には「狂と同じ物凄く真つ赤な深紅の眼」だつた。

夏美はそれを見て脱力しながらも苦笑いしながら頭をかき「・・・^{マジ}本気かよ」。」と呟いた。

夏美「第24夜。夏美自身の変化の夢その後・・・」

「次章も宜しく頼むね。」

以上です。有難うございます。

第24夜。夏美自身の変化の夢その後・・・（前書き）

有難うございます。

今章は前章の後編みたいなものです。

尚、此方も長丁場の残酷シーン等ありの予定ですのでどうぞご了承ください。

第24夜。夏美自身の变化の夢その後・・・

そして・・・・。再度再び夏美に、発作が襲う、。

と同時に夏美の体に入る双竜たちの血そして狂の血が、夏美自身を拘束する鎖、になる。

と同時に夏美の口からタバコが下に落ちて火が消える。

と同時に夏美はソファからまるで転げ落ちるかのように下に落ちそしてソファに手をやり握り締めていつの間にか冷や汗を流しながら「・・・またかい？」と苦笑いしてたまたまソファに置いてあった手鏡を見て「・・・ッ！！！」と驚く。その驚いた夏美自身がみた先には、狂と同じ物凄く真つ赤な深紅の眼、だった。

夏美はそれを見て脱力しながらも苦笑いしながら頭をかき「・・・本気がよ、。」と呟いた。

すると「・・・苦しそうね？」夏美。」と女の声がした。

と同時に夏美はギンガをすばやく取り出し「・・・失礼どちらさんで！？、。」と警戒心をあらわにしな

がら女に付いたと同時に夏美の首筋にいつの間にか小刀をつけ「・・・悪いけど、その人に、銃向けないでくれる？」狂の、大切な人

「だから。」とだるそうに言った。

夏美顔しかめて「・・・私しやアが遅れ取る何ざア珍しいな、腕落ちたかね。」と同時に「久しいじゃねエか？ほたるさん。」

するとほたるが其処にいて「うん。久しぶり。夏美さん。だけど・俺狂にあの人の事頼まれていたからね。」

夏美其れを聞いて「・・・椎名ゆや。」か

ほたるはそれを聞いて頷き「その通り。」

夏美はギンガをすんなり懷にしまい込みソファーにドカリと再度座りなおした。

ほたる夏美を見て「・・・苦しそうだね？夏美さん？」「いい加減に楽になったらどう？？」

その事を聞いた夏美はタバコに再度火を灯しニヤリと笑い「・・・今まだ堕ちる訳にも行かないんでね。」

ゆやはそれを聞いて「．．．いずれそう答え続けて．．．見栄なく人間を襲うようになるわよ？」とクスと笑った。

夏美はそれを聞いて顔しかめて「．．．まだだ。まだあの女との蹴りついて良ねえんだ。」と悔しそうに言った。

ゆやはその事を聞いて「．．．あの女？」と夏美に聞き返した。

夏美はそれを聞いてフツと笑い「．．．私の過去の事だ。」気にするな。」と言った。

と同時に再度また「吸血鬼の発作が」夏美を襲う。

夏美は口では平気だと言いながらも内心は結構焦っていた。

「人間として入れる前に．．．あの女を。」

‘時間がねエか????’

チイくしょう!!!!!!!!!!!!まだだつてえのに!!!!!!!!!!!!

――シャアアメイ
――夏美――

と同時に夏美は何かの気配を感じ翡翠刀を持ち勢いよく自分の部屋を出て行った。

メイランツ!!!!!!!!!!!!!!今度こそ私しやアはてめエを!!!!!!!!!!

‘倒してやる!!!!!!!!この手で!!!!’

だから、だから・・・頼むよ!!!!!!!!このまま居させてくれ。頼む!!!!!!!!!!!!!!

と強く願っていた。

だが、体は・・・其れとは裏腹に聞いてはくれていなかった。

チ・・・血・・・血が欲しい。

チ・・・チガホシイ。

クソ！！！！まだ駄目だっていうのに・・・。吸血鬼にまだ・・・。

ゆやはそれを見てクスと笑い「・・・」と言いながら体は限界みたいよ？、」

夏美軽く舌打ちし血液錠剤をまた飲み飢えをしのいでいた。

第24夜。夏美自身の変化の夢その後・・・完。

第24夜。夏美自身の変化の夢その後・・・（後書き）

有難うございます。無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回のグタグタ？予告風をどうぞ笑

ほたるは夏美を見て「・・・ゆやさんの言つとおりだよ？もう体が限界なんじゃない？」

夏美はタバコに火を灯し「じゃあかしい！まだ・・・まだなんだよ！‘人間’^{ヒト}としてやらなきゃならねエ事がまだ・・・。」

吸血鬼化になった事知ったらメイランの奴・・・ますます手放してくれなさそうだからな。と呟いた。

と同時に「苦しそうだなあ、橘の小娘。」と声がした。

ゆやはその声を聞き嬉しそうに「狂！」と飛びついた。

夏美はその声を聞き顔をしかめていた。

「こんな時に、どうして来るのだろうか？どうして・・・。」

と呟いていた。

夏美「第25夜。夏美自身の変化の夢・・・現実？」

「次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。有難うございました。

第25夜。夏美自身の変化の夢・・・現実？（前書き）

有難うございます。

今章は夢の後で現実を書かせて頂きたいと思います。

尚、此方も長丁場の編集可能性等あり予定なのでご了承ください。

第25夜。夏美自身の変化の夢・・・現実？

ほたるは夏美を見て「・・・ゆやさんの言うとおりだよ？もう体が限界なんじゃない？」

夏美はタバコを再度口に加え直し「じゃあかしい！まだ・・・まだなんだよ！『人間』としてやらなきゃならねエ事がまだ・・・。」

吸血鬼化になった事知ったらメイランの奴・・・ますます手放してくれなさそうだからな。と呟いた。

と同時に「『苦しそうだなア』橋の小娘。」とクククと楽しそうな声がした。

ゆやはその声を聞き嬉しそうに「狂！」と飛びついた。

狂は自分自身に飛びついたゆやの頭を撫でていた。其れも愛おしそうに・・・。

夏美はその声を聞き顔をしかめていた。

「こんな時に、どうして来るのだろうか？どうして・・・。心の中で呟いていた。

あア・・・何でかな。どうしてかな。どうやら「闇」は私しやアの「歯車」をどうしても狂わせたいらしい。

あア・・・。どうしてかな。どうしてかな。どうしてかな。どうしてかな。

只・・・普通に（表）で生き続けただけなのに・・・。とも呟いた。

そして狂は夏美の顔を見てニヤリと笑った。

夏美狂を見て平然とした趣おもむきをかぶせていた。

「・・・別に苦しくなんかないですよ。」「それより何用ですか？」「」

狂はククと笑い「・・・そうかい？」「なら、その空になった瓶は何だ？」「」

と血液錠剤の大量な殻瓶を指さした。

夏美はフツと笑い「・・・只の薬ですよ。」「と言い返した。

狂はそれを聞いて「・・・只の薬、ねえ。」

と同時に緊急警報が発令した。

夏美は慌てて通信機の所に行き「私じゃアだ！何事だ！？」

と同時に雷外がたまたま通信気を取って慌てて「な、夏美の姉御！！！！た、大変だ！！い、石田三成が・・・此処に乗り込んできた！！！！」

夏美はそれを聞いて両目を見開き「な、何だと！？」

と同時に「奥州の伊達の兄貴様方もいる！！！！」

夏美は手で頭を抱えギンガを再度持ち「分かった。今行くから其れまで持ちこたえてくれ。」

『了解！！』『そう言い通信終えた。』

と同時ん夏美は狂をチラッと見て仲間たちの所へと向かった。

そして心の中で・・・頼むッ！！！！頼むッ！！！！間にあってくれよ！！！！

一方、残された狂達はと言うとゆや狂を見て「いいの？行かせて。」

狂はフツと笑い「なあに、いずれまた再会するさ。例え嫌でもな・・・。」

ほたるも頷き「俺もそんな感じがする。」と呟いた。

と同時に夏美はロビーに向かっていた。

血の匂いが・・・さらに濃くなっていく。

「以前はそんな事感じなかったのに・・・。」

夏美は軽く舌打ちしその血の方向へと進む。

頼む！間にあってくれよ！！！！！！

そう心の中で呟きながら夏美は願いながら走っていく。

「もう矢うのはいやなんだよ！！！！此れ以上・・・」

そしてドツクンと心音がまた鳴ってそ体を支えてその場に倒れ込んだ。

クソッ！！一体どんだけ発作が起これば気がすむんだ！！！！

血の匂いが辺りを舞う。

夏美の顔が再度しかめる。

「人間^{ヒト}から吸血鬼へ知らぬ間に着実に変わっていく。」
-

「冷静でいられなくなる。」
-

「冷静にいられなくなる。」
-

クソッ！！私じゃアは一体・・・。

どうすれば。

心の中で叫びながら再度血液錠剤へと手を出す。

そして飲み込む。

そして、自身を立たせた。

人間と吸血鬼の変化への中で揺れる心。

其れを其れを自分自身くいとめている。

否喰い留めないといけないのだ。

と同時に「・・・苦しそうだな。」と男の声がする。

夏美自身はその男の声を聞きその声の主を見て「・・・石田三成。」と呟きそして翡翠刀を抜刀し三成と対立していた。

夏美は顔しかめつつも「・・・石田三成。」

クソッ！何でこんな時に鉢合わせするんだ！？そして続け様に「・・・

・「そこをどいてもらおうか。」

と低い声で言ったその事を聞いた三成はフツと笑い「・・・断ると言ったらどうする？」

夏美はそれを聞いて「・・・なら、意地でも通させてもらおうか。」
「そう言いながら翡翠刀を構えて

「翡翠流・・・爆風烈風弾！！！！！」と技を放った。

三成はニヤリと笑い「・・・斬滅！！！」と技を放った。

夏美の技は消えてそして「・・・！！し、しまった！！！」と同時に喰らい壁に激突する。

夏美「ガハ！！！」と血を吐きその場で倒れ込む。そして血の香りが辺りを舞う。

と同時に夏美自身も血の香りそして血を見ると思わずよろめいていた。

「・・・あア、もう限界か？」ヤバいな・・・。まだ人間として生きたいのにな。」

するとその様子を見ていた三成はニヤリと笑いながら刀を左手の親指に持って行き夏美の所に歩みながら

切って行つた。

そして、三成の血が親指から滴れた。夏美は思わず喉を鳴らしてしまった。

第25夜。夏美自身の変化の夢・・・現実？完。

第25夜。夏美自身の変化の夢・・・現実？（後書き）

有難うございます無事に更新完了しました。遅くなりましたが・・・笑；

其れではほぼ毎回の？グタグタ予告風をどうぞ笑

三成は夏美自身の顔に左手の親指を近づけた。夏美自身は理性を保ちつつ

何とかそらそうとするが・・・三成の左手で顔を持ちあげられ血が出ている親指を夏美の口に押し込んだ。

夏美は驚いて「や、止める！！！！！」と拒絶した。

三成はニヤリと笑い耳元で「そんな飢えた目そして体自身が飢えているのか？」ととても楽しそうに言った。

夏美はそれを聞いて顔をしかめるだけだった。

夏美「第26夜。石田三成との再会・・・そして。」

「次章もどうぞ宜しくね。」

有難うございます。

第26夜。石田三成との再会・・・そして。（前書き）

有難うございます。今章も遅くなりましたがまた更新させて頂きました。

前章の後半みたいなものです。今章も毎度ながら長丁場の編集可能性残酷シーン等あり予定なのでご了承ください。

其れでは第26夜開幕です・・・。（普段とはちょっと違う風にしてみました笑）

第26夜。石田三成との再会・・・そして。

三成は夏美自身の顔に左手の親指を近づけた。夏美自身は理性を保ちつつ

何とかそらそうとするが・・・三成の左手で顔を持ちあげられ血が出ている親指を夏美の口に押し込んだ。

夏美は驚いて「や、止める!!!!!!!!!!」と拒絶した。

三成はニヤリと笑い耳元で「そんな飢えた目そして体自身が飢えているのか?」ととても楽しそうに言った。

夏美はそれを聞いて顔をしかめるだけだった。

だが、其れとは「裏腹に」三成の血がどんどんと夏美の中に流れて行くのだった。

と同時に夏美自身の「意識が」もうろうとしはじめていた。

「クソ。もう、「此処まで」か??」

そして、思わず、意識が飛び、そのまま倒れ込む様に三成の腕の中に入ってしまった。

三成はそれを見て再度ニヤリと笑い夏美を担いでその場を後にした。

と同時に緊急速報が入り夏美が三成に攫われた事を知る。

と同時に政宗達の耳にも入った。

政宗「shit!! 石田三成の野郎!!!」そして小十郎を呼び「あいつの居場所探って来い!!」

小十郎頷き「承知!」と言い政宗に一礼しその場を後にした。

と同時に狂の耳にも入って来ていた。

狂はタバコを吸いながら軽く舌打ちし「・・・凶王の野郎! 舐めた真似してくれるぜ!」

「あいつは沙代子と同じく俺のものなのによ。」

と同時に女の声で「だアア石田三成イイイ夏さん攫うなんてけしからん!!!今、迎えに行くよ!」

夏さん!!」と聞きなれた声がする。

そして「こら・・・沙代。一人で乗りこむと危ないよ?」

「だってさ・・・セラスさん!!!あいつ私達の夏さんにとって行ったアア!!!」

狂はそれを聞いてニヤリと笑い「・・・沙代子とアーカードんこの小娘か。」と呟いた。

一方、ライカはいつの間にか三成に傷けられた体を起こしながら「・・・あ、相棒。」と夏美の身を案じていた。

此処はとある山奥にある黒い洋館。此処で三成は居城としていた。

この黒い洋館は3階建て。

そして、2階の所に小さな高級そうな部屋があり其処で夏美は寝かされていた。

「・・・ッ。」と夏美は意識を取り戻し目が覚め慌てて体を起こし周りをよくみた。

そして軽く舌打ちし「・・・どうやら、」かッ攫われたらしいな、私
「しゃア。」

「石田三成の血を体内に入れるなんて・・・。」

其れはまるで・・・。

「オマエハモウヒトトシテハイキテイケナイ」 -

「ジカクハシテアルダロウ」？ -

と自身にまるで「問いかける闇の声。」

夏美は唇をかみしめて「・・・っ！！晋助様！！！！アーカード様！！！！政宗様！！！！片倉様！！！！」と

何故か嘗て「自身が幼少の頃そして今想いを寄せている者達の名をいつの間にか気がつかずに呼んでいた。」

するとドアの音が鳴った。

夏美はドアの方面に顔向けた。

「・・・起きたか。」其処には悪魔な笑みを浮かべた石田三成がドアの扉に背を預けて両腕を組み夏美を見て立っていた。

夏美はそれを見て幸いにも奪われなかった翡翠刀を素早くとり「石田三成イイイイ！！！！」と顔の形相をしかめ抜刀しながら斬りかかった。

三成はそれを見て楽しそうに抜刀し翡翠刀を受け止めた。

と同時に夏美自身に再度斬りかかった。

夏美自身は避けたように見受けられたが・・・いつの間にか左腕を負傷していた。

幸いにも炎龍の刺青の所ではなかった。

夏美は軽く舌打ちして再度三成に攻撃を仕掛けようと構えた。

次の瞬間、腕を三成に捕まれ自身の所へ持ってこられて耳元で「・・・私には向かうな。」と囁いた。

と同時に夏美の体は思うように動かなくなった。

夏美自身は驚いて両目を見開いていた。

「な、何で??? 動かんの!?! -

「私^{アレ}しゃアは、吸血鬼化^{アレ}確かにした。だがこの男の血ではないはずだ。 -

三成はそれを見てニヤリと笑い夏美自身を見て「・・・私の血を飲んだからな。」「私の血は他の吸血鬼共とは違い拘束力が強いからな。」「

夏美はそれを聞いて驚いた。

そして三成は耳元で「・・・翡翠刀を納めろ。」「

夏美はその声を聞いて思わず翡翠刀を鞘に納めてしまった。

三成はそれを見て満足そうに笑い「・・・私の血をもう一度飲め」。」と言った。

すると夏美はうつろな目になり三成の首筋へと顔をうずめいつの間にか出始めた「己の牙」で咬みつき血を飲もうとした次の瞬間・・・。

「夏美さ〜ん！！何処です！！！！？」とセラスの声がした。

三成は軽く舌打ちして「・・・ヘルシングの狗の小娘か。」と不機嫌そうに呟いた。

と同時に夏美は我に戻り「来るなッ！！！！セラスッ！！！！」とセラスを制した。

セラスは「勘付いたのか」「・・・此処ですね。」そう言いドアをバンと叩き「・・・石田三成さん、其処までです。」夏美さんを返してもらいましょうか？」とハルコソネを向けていた。

三成はフンと笑い夏美の首元に手刀を入れて夏美の気を失わせて夏美を担ぎながら刀を鞘から抜き素早くセラスの所に周り斬りかかっ

た。

セラスは驚いてその場に倒れ込んだ。

三成は刀を鞘に収め夏美を連れて消え去った。

そしていつの間にか気を取り戻した夏美はセラスの名を叫び続けた。
いた。

だが、其れは聞こえていなかった。

夏美は三成を睨みつけて暴れて担がれている事も分かりつつも「
・よくもセラスを！！！」と翡翠刀を再度鞘から抜き出そうとした
が・・

三成に睨みつけられて鞘にしまった。

と同時に別室に入り夏美をソファアの所へと離してそして三成は赤
ワインを取り出してグラスについて飲み始めた。

夏美はそれを見て口をいつの間にか手の甲で押さえていた。

・・ ‘赤ワインすら血に見えるなんて、私しゃアおかしくなったか
もしれないね。’ -

そして、いつの間にか知らずに手の甲を咬んで ‘自身の血を飲んで
いた。’

其れを見た三成は再度ニヤリと笑い夏美の側に来た。

「・・・ ‘美味いか?’」

その一言を聞いて夏美は我に戻った。 「・・・ッ!!!!!!!!!!!!!!」

いつ、何時の間に!?!?そんなに飢えていたのか!?!?

夏美は急いで口元を手の甲で拭いた。

だが、血が出ていたせいか血が広がる一方だった。

三成は夏美の顎を手で持ち上げ口元を舌でなめた。

夏美は、体を震わせた。

そして、三成は再度自身の首筋を出してもう片方の手で爪を立て血を出し夏美の顔を近づけさせて「・・・飲め。今度こそ。」そう言った。

夏美は、其れを聞いて抗えずについに飲んでしまった。

第26夜。石田三成との再会・・・そして。完。

第26夜。石田三成との再会・・・そして。（後書き）

有難うございます。

無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ。

夏美はアレから‘吸血鬼としての本能’にあらがえきれずに三成の血を再度飲んでしまう。

夏美は、心の中で・・・。

‘どうして？飲んでしまったのだろうか？’
‘私の・・・私の・・・私の・・・私の・・・私の・・・私の・・・’
本当の

想い人は・・・’

ごめんなさい。晋助様達・・・。

すまねえ・・・相棒。

と心の中で詫びていた。

夏美「第27夜。三成の血を受け入れた夏美の心中。」

「次章もどうぞよろしくね。」

以上です。有難うございました。

第27夜。三成の血を受け入れた夏美の心中。（前書き）

ご観覧有難うございます。

今章は、夏美自身が三成の血を、完全↑受け入れた所から始まる予定です。

此方も長丁場編集可能性等あり予定なのでご了承下さい。

第27夜。三成の血を受け入れた夏美の心中。

夏美はアレから「吸血鬼としての本能」にあらがえきれずに三成の血を再度飲んでしまう。

夏美は、心の中で……。

「どうして？飲んでしまったのだろうか？」
「私の……私の……私の……」
本当の

想い人は……

ごめんなさい。晋助様達……。

すまねえ……相棒。と心の中で詫びていた。

三成は「其れを感じ取ったのか……」
「……貴様は私の事だけを考えればいい。私の事だけを……」
「其れを聞いた夏美は両目がうつろになっていた。」

三成はその様子を見てフツと笑い夏美の頭を撫でつつけていた。

此れで貴様は、‘ようやく私の物だ。’と心の中で楽しそうに呟いていた。

―相棒！……！……！……！――とライカの声が夏美の中にこだましていた。

―相棒！……！……！……！――

―相棒！……！……！……！――

―戻ってくれ！相棒！……！……！……！――

―相棒オオオオオオ！……！……！……！――

……すまねえ。ライカ（相棒）私しゃアは……。。。

と心の中で呟いていた。

「もう戻れない……。この男すら倒せられない。」

「ああ……。何て忌々しいんだ？」

「ただ普通に生きたかっただけなのに……。」

晋助様。

「ああ……。闇が拘束する。冷静でいられなくなる……。。」

「日の光がまぶしくて……。眩しくて……。。」

「くだらねえと思うが……。な。だが、致し方ねえ事だ。これは・
・。。」

「寧ろ、居心地がいい・・・な。」

「ああ・・・負けそうだ。今回ばかりは・・・いさかさ疲れたよ。」

「本当に・・・負けそうだ。」

そして、夏美は眼をいつの間にか閉じていた。

三成はその様子を見て夏美を抱きかかえながら寝室へと連れて行き
「貴様は私だけを想えばいい。他には何もいらぬ。何も・・・」

何故なら、伊達共よりさきに貴様を見つけたのはこの私なのだから・・・。

そして「・・・もう、離すものか。あの頃のように貴様は私と・・・」

、
、

共に居ればいいのだ。

―三成兄さま！！―

そして三成は夏美をベットに寝かせひとまず輸血パックを取りに台所へと行こうとしていたその時三成の

服の袖がいつの間にか夏美がギュッと逃がさないようにつかんでいた。

三成はそれを見て一瞬驚いたがすぐに表情が戻り夏美の側に座っていた。

「・・・寂しいならそう言えればいいものも。貴様はあの頃の癖をまだ覚えていたのだな。」と呟っていた。

・・・え？癖？？？？何だろう・・・やけに懐かしい気がする

何だろうね。この・・・懐かしさ。

私は一体・・・・・・・・。

―相棒！―

ん？

―相棒ッ！！！！―

ん？なんだ？…………。

―戻って来てくれ！！！！頼むからッ！！！！―

「ワカバとヘルシングの為にッ！！！」

「私達の為にッ！！」

そして寝言を言うように「・・・ラ、イ、カ」と相棒の名を呼んだ。

その事を聞いた三成は軽く舌打ちをした。

「・・・何故だ！？私の名を呼ばない！？何故！！私を認めない！？今の貴様の前にいるのは私だぞ！？」と心の中で叫んでいた。

と同時に「・・・ごめ、ん。隼人・・・。私は・・・。」とも寝言で言っていた。

「あの時の誓い果たせそうにない・・・。」

「……ああ、何で私しゃアはこんなにも過去にとられ過ぎるの
だろうか……。」

まぶしいな。今の私にはまぶしすぎるよ……。

一方、三成は夏美の体をいつの間にか再度抱き寄せていた。

ん？何だ？……暖かいな。ん？銀髪？もしかして……三成兄さま？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0683o/>

ヘルシング、BASARA。表と闇。そして・・・ワカバリリーダー組。

2011年11月13日14時09分発行